
全く、ついていない。誰か助けてくれ。

F1チェイサー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全く、ついていない。誰か助けてくれ。

【Nコード】

N7776S

【作者名】

F1チェイサー

【あらすじ】

行く先行く先で次々と大小様々な不運に見舞われるただの大学生の男がいた。ある日男が自らの不運を呪いながら歩いていると突然襲われ、気が付けばヴァンパイアと化し、異世界にブツ飛ばされていた！！果たして、彼はこの先どうなってしまうのか……*A e c a d i aで作者が火焰魔神の名で投稿していたものと同じものです。また、火焰魔神とF1チェイサーは同一人物です。ご了承ください。

「いったい俺が何をした？」

事の発端はとある普段と何等変わりの無い一日になるはずの平日だった。

俺はその日いつものように大学に出かけた。

そしていつものように満員電車で足を踏まれて鬱になりながら研究室へ。

研究室では、実験中にまさかの試薬が足りなくなる等と言うふざけた事態に陥り、その実験に費やした5時間がパーになる。

凹むまもなくファミレスのバイトへ向かう。度重なる飲み会で一気に金が飛んだからシフトが多く入っている。

駅に着いた時、研究室に財布を忘れたことに気付き取りに戻る。

……バイト遅刻確定だな。

バイト先で店長に嫌味を言われながら働く。

今日も何処か抜けている新人に氷をぶっ掛けられたり、ゴミ袋を換えようとするゴミ箱のキャスターが外れてゴミをぶちまけたり散々だ。

……チクシヨウ、俺が何をしたって言うんだ。全くもってついてない。何で俺だけこんな目に……

「くそつ、何でこんなに運が無いんだ、俺は……」

そんな事を考えながら帰り道を歩いているといきなり背後から大きく真つ黒な布が出てきた。

目の前が真つ暗になり、突然のことに驚いていると、

「……いただきます」

等と言う妙に嬉しそうな女の声と共に首筋にプスリと何かが刺さり、俺は意識を失った。

で、目が覚めてみりや見知らぬ部屋の天井。

誘拐されたのかとも考えたが、別に拘束されている訳でもないの
で誰かに助けられたんだろう。

周りを見てみりや見るからに豪華な調度品に広い部屋。

どうやらここはどつかの洋館の中らしい。

等と考えていたら部屋のドアが開いて20代半ば位の1人の女性
が入ってきた。

金色の長い髪に紅い瞳の自己主張の激しいスタイルの持ち主だっ
たから、胸に眼が行くのは仕方がnゲフンゲフン！！

「あらあら、お目覚めですか　おい、ミリアちゃん、シ
リアちゃん！！　彼、起きたわよ」

なんともおつとりとした声で人を呼ぶ彼女。すると、しばらくし
てまた2人の女性が入ってきた。

2人とも金髪紅眼で、1人は10代後半位、もう1人は10代半
ば位の少女だった。

「あ、目を覚ましたんですか。良かった……」

「これがミリ姉が連れてきた男？　なんていうか、普通ね」

それぞれ違った反応をくれる2人。悪かったな、普通で。

「突然で申し訳ないのですが、此処は何処なのでしょう？」

あくまで紳士的に尋ねる俺。間違っても最初から気安く話しかけると言うことはしない。

「此処は、ツヴァイトスにある私達の館よ。」

は？

「……あつと、すみません。日本ではないのですか？」

思わず素が出そうになるが、かろうじて抑える。落ち着け、紳士的に紳士的に……

「えっと、それは貴方が居たところの名前ですか？ 少なくともそこではありませんよ」

何だつて？

「ついでに言うと、アンタもう人間じゃないから。ま、詳しい話はミリ姉に聞いて」

はあああああ！？

「……ミ、ミアさんでしたよね？ 一体どうなっているんでございましょうか……？」

震える声を抑えながらミアなる女に問う。

すると、彼女は若干申し訳なさそうな顔で答えた。

「え〜と、少し別の世界に遊びに行っただんですが、途中でどうにもお腹が空きまして……で、私はヴァンパイアなのでたまたま通りがかった貴方の血を吸ったんですが吸い過ぎてしまって、そのままじゃ死んでしまうので戻したんです。それから、ヴァンパイアとなった貴方を放っておくわけにも行かないので此処に連れてきたんです」

……何か色々言いたい事が沢山あるが、とりあえずは限界突破した俺の堪忍袋の緒をブチ切ってやろう。

「ふ、ふざけんなあああああああああああ……！！！！！！」

ああ、神様。俺アンタにすつごく会いたいぜ。今なら完膚なきまでにぶつ殺してやれる。

俺は運が無いと思っていたが、まさか人間やめて異世界に来る羽目になるとは思ひもなかったぜ。

あ、でも本当に吸血鬼になったって言う確証は無いのか。

「そういえば、一応一緒に暮らすことになるんだから自己紹介が必要ね〜」

「待った。俺はアンタ等と一緒に暮らすつもりは無い。だからとつとと帰せ。どうせ吸血鬼になったってのもツヴァイトスなんてのもデマだろ?」

もう完璧に素が出ているが気にしない。突然人を連れ去るような連中に礼儀は要らん。

「ちよっと、吸血鬼って言わないでよ！！　ヴァンパイアよ！！

それにアンタがヴァンパイアになったのも本当！！ 今外に出たら大変なことになるわよ！！」

シリアなる女性が眉を吊り上げて勢い良く反論するが、知った事か。

「そんな事知るかよ。俺は帰る！！ じゃあな！！」

ドアを開けて部屋を出て、入り口まで走る。

……やけに身体が軽いな。気分がいい。

そして玄関と思われる大きなドアを見つけた。よっしゃ、こんなところとはもうおさらばだ！！

ドアを開けて外に出る。外は雲ひとつ無い晴天だ。

すると、突然全身が焼けるような感覚に襲われた。

詳しく言うと、溶けた鉄に満たされた溶鉱炉の中に入れられるような感覚だ。

「うぎゃああああああ！！！！！！！！」

焼ける！！ 焼けてしまう！！ まさか本当に俺は吸血鬼になっちまったのか！？

「ああ、もう、言わんこっちゃない！！ ったく、世話が焼けるんだから！！」

結局、俺はシリアに助けられて、最初の部屋に連れ戻された。

「これで分かりましたか？ 貴方はもう人間ではないんです。そして此処はツヴァイトス。信じていただけますか？」

信じるも信じないも実際にこうなっているのだから信じざるを得ない。俺は黙って頷くことにした。

「それじゃ、さっきも言ったけど一緒に暮らすんだから自己紹介するわよ。私はリリアって言うのよ。フローゼル家の当主よ。私もヴァンパイアよ。宜しく」

見た目20代半ばの女性、リリアがほよつとした笑顔を浮かべて自己紹介をする。

……そっちは見ないぞ、どうしても自己主張の激しいとある一点を見そうだからな。

「私はミリアと申します。この屋敷のことで分からない事があつたら私に何でも聞いてください。宜しくお願いしますね」

見た目10代後半の女性、ミリアが頭を下げる。

大人しそっだが油断は出来んな。何せ俺をヴァンパイアにした張本人だし。

……それにしても、やけに嬉しそうだな。何故だろうか？

「アタシはシリア、ヴァンパイアよ。二度とあんな馬鹿はしないでよ」

見た目10代半ばの少女、シリアがぶっきらぼうに声を掛ける。

……何故だろう、この中で一番しっかりしてそうな気がする。

「で、アンタは何て言うの？」

「……栗生永和だ。しばらく世話になる」

若干……どころか滅茶苦茶抵抗はあるが、とりあえず自己紹介をする。

しかし、面白い。恐らく3人の名前に綴りを当てればこうなるだろう。

リリアはLilia、ミリアはMilia、シリアはSilia。
うむ、ものの見事にS、M、Lだ。何の事かは言わないが。

「……ねえ、何か今凄く失礼なこと考えなかった？」

怪訝な顔をしてシリアが俺に話しかけてきた。

その声からは「テメエ殴ってやろうか」的なニュアンスがひしひしと伝わってくる。

「い、いや、そんなことはない。しかし、アンタ等姉妹か？ その割にはやけに年齢差が有りそうだが？」

「あ、違いますよ。私達は正確には姉妹じゃないんです」

「何だ、違うのか？」

「そうよ、ミリアちゃんは私の妹の子で、シリアちゃんはミリアちゃんの姉さんの子よ」

「そうなのか。つまり2人は誰かのおり……済みません、何でもありません。」

滑りそうになる口を無理やり噤む。

危ねえ危ねえ、女性にこれは禁句だ。

リリアとミリアの眼光が鋭くなったし、あのまま言ってたら何をされるかわかったもんじゃない。

「で、これから俺はどうすりゃ良いんだ？ 正直に言って早く帰りたいんだが」

俺はとりあえずの問題に手を付けることにした。

何しろ、日光がダメときているんだもんな。

まずはこれを治さないと話にならない。

その他にも、この場所が俺の居た場所から見るとどんな場所に当たるか把握しなくてはいかんしな。

だが、その方法が分からんで聞いてみた。

「流石にそれは無理ねー 何しろー、もうヴァンパイアになっちゃってるから元の世界からは弾かれちゃうんじゃないかしらー？」

リリアは少し考えながら困った顔でそんな事を言った。

「ん？ どう言うことだ？」

「ごめんなさい、私達はこの話については専門外ですから、詳しい事は何とも言えないんです。」

俺の質問にミリアが申し訳なさそうに答えた。

「ま、簡単に言うると完全に人間に戻らない限り元の世界には帰れないって事。……もつとも、過去にそんな例は存在しないし、そもそも戻し方が無いわ。可哀想だけど、諦めたほうが良いわね」

さらっと口に出されたシリアの言葉に、俺の目の前は真っ暗になった。

マジか？ 人間をやめるのは簡単なのに元に戻るのは無理？

「……な、なあ、冗談だろ？ もう俺帰れないってのか？ ああ、そうか、これは夢なんだな？ よし、夢ならば此処で眠れば……」

ふと見ると3人は俺を無視して何やら話し込んでいる。

……薄情者。悲しくなんか無いやい。

「何だかかなり錯乱してますね、ヒサトさん」

「そりゃあそれなりにはショックでしょ？ で、どうするの？」

「ウダウダ言ってたところで仕方が無いわ。此処は現実を思い知らせることにしましょ」

……何やら不穏な気配を感じる。俺は逃げるべきなんだろうか？

「ま、ヒサト。少し落ち着きなさいな」

後ろから俺の右肩を掴みながら宥めるようにシリアが言う。

……あの、指が食い込んで結構痛いのですが……

「そうですよ。現実逃避っしてしている時間が勿体無いです」

後ろから俺の首に手を回しながらミリアが言う。

こっちは優しい……が、その探していたものがやっと見つかったときの様な笑顔に凄く嫌な予感がするのは何故だろう？

「だから？ まずはこれが夢じゃないって事を証明するわよ」

前から俺の左肩に手を置きながらリリアが言う。

夢じゃない事を証明するって……

「ちょ、ちょっと待った、一体何を……」

「「「せゝの、えいつ！！！」「」」

「うぐはああああああ！？！？！？」

さて、現状を整理しようか。

まず、俺の右腕が無くなっている。これは先ほどシリアが持っていた。

次に、俺の首の骨が異常な方向に曲がっている。これはミリアの仕業だ。

止めに、俺の心臓に穴が開いている。リリアの腕が貫通したためだ。

……めっさいてえ。何て事しやがる。

と言うか、痛いで済んでる事にまずビックリだ。

「どう？ これで現実だって分かったでしょ？」

俺の右腕を弄びながらシリアがそう言う。

……ニヤニヤ笑いやがって、サディストか、あいつは？

「まあ、夢じゃないことはよく分かった。……で、どうしてくれるんだ、この惨状は？」

「ああ、大丈夫ですよ。ヴァンパイアは心臓に銀を受けなければ

死ぬことはありません。腕も心臓もすぐに再生しますよ。」

未だに首に腕をまわしたまま、優しくミリアはそう言う。
どうせ優しくするんなら首の骨を折らんで欲しかった。

「そうよ　だから、安心してね」

相変わらずのほほんとした声でリリアがそう言った。
のほほんとしていながら心臓を貫けるって、ある意味恐ろしくな
いか？

まあ、もうどうでもいいや、そんなこと。

「ああそうですか」

俺は考えることを放棄し、投やりに答えを返した。
はあ……気が重い。これが現実か……

ついてない人間としての人生の果てに、人間やめて元の世界を去
ることになりましたとか、ついてないにも程がある。

まあ、なっちまったもんはしゃあない。

進まねえ研究と嫌味な上司から解放されたんだ、気楽に生きると
しますか。

ふと気が付くと、シリアが俺の心臓の穴をじつと穴が空くほど見
つめている。既に穴あいてるけど。

「ん？　どうかしたのか、シリア？」

「い、いやね、アンタの血はどんな味なのかな」って思っただけ
よ」

ああ何だ、そう言うことか。

ヴァンパイアならそう言うことを考えても仕方が無いか。

「あら〜？ これ結構美味しいわよ〜？」

自分の手についた俺の血を美味そうに嘗めているリリアがそう言う。
う。

「ふふふ、美味しいでしょ、姉さん？ それじゃ、私も失礼して……」

するとミリアは俺の傷口に手を当てて着いた血を嘗めた。

「うん、やっぱり美味しいですね。癖が無くて良い味です」

これまた美味そうに俺の血を嘗めるミリア。
自分の味をそう言う風に言われるのは何やらめっちゃ恥ずかしい。
それにしても……さっきからまた嫌な予感がするんだが……

「ね、ねえヒサト。アタシも貰って良い？」

「あ、私も貰っていいですか？」

「そうねえ〜、折角だから皆でヒサト君を頂いちゃいましょう？」

「「あ、賛成（です）」」

おい、俺の意思は何処に行った！？

俺がそう訴える前に飛びついてくる3人。

後ろから左の首筋に噛み付くりリア。

前から右の首筋に噛み付くりリア。

心臓の傷口を嘗めるシリア。
俺は避けられずにあっさり捕まる。

「ん……はっ……チュルチュル……コクリ……」

「むっ……チュッ……コクッ……はぁ……」

「ぺろぺろ……チュパッ……コクン……」

「くっ……はうっ……くあっ……」

思い思いに俺の血を飲む3人。
首筋を嘗められたりするせいでくすぐったくて思わず声が出る。

「ふふっ……ヒサト君、結構かわいいわよ？」

「全くだす。血も美味しいからもっと飲みたくなります……」

「久々に美味しい血を飲んだ気がするわ。それにしても良い声してるわ、アンタ」

リリアは愛玩動物を愛でる様に、ミリアは恋い焦がれた少女の様に、シリアは新しい玩具を見つけた子供の様に口々にそう言った。

……こいつら全員なんて性格してやがる。

結局、俺は体中の血液を全て吸いだされ、またもやベッドに逆戻りする羽目になった。

……ああ、本当についてない。俺に帰れる日は来るのか？

執事？ ふざけんな。

こないだの日記：俺は人間をやめてしまったぜコンチクショウ。

あゝ、本日は晴天なり。俺の気分は曇天なり。
今日も今日とてついてない。

藪から棒に何かって？ まあ、少し聞きゃ分かるさ。

この館、今俺含めて4人しか住んでいない。

……どう考えても人数と広さがあっていない。どう考えても使用人が20人は必要だぞ……

前はその仕事を1人でこなす鉄腕執事が居たらしいが、つい先日運悪く強盗に遭い、銀の弾丸が心臓に命中なさったそうさ。

下手人は既にとっ捕まっている。まあ、これはどうでも良い話だ。でもって、館の管理はその執事に全て委任していたらしく、どうすりゃいいのか分からのだそうさ。

それで、この間何か管理のマニュアルが無いかどうか倉庫や書架を漁っていたんだが、どうにも妙な気配がする。

あ？ 異世界の文字が来たばっかの人間に読めるのかって？

……例えば話をしよう。アンタは1つの言語を死ぬ気で覚えるのと普通なら間違いなく死ぬ目に遭うのとどっちが良い？

……つまりはそう言うことだ。もっとも、俺は死ぬ気で頑張っただけ死ね目に遭ったが。

さて、話を戻すでしょう。

だが特に異変は無いんでそのまま放置して夜まで漁り続けたんだが、結局見つからんと来た。
諦めて出ようとする、

「失礼ですが、貴方様はどちら様ですか？」

と、きわめて紳士的に話しかけられた。

「うっひゃおおう！！ いきなり何だ！？」

そりやおったまげたのなんのって。

何せ4人しか住んでいないはずの館に見知らぬ5人目が居たんだからな。

「これはこれは驚かせて済みませんでした。私めはこの館で執事を勤めさせていただいたサバスという者でございます。失礼ですが貴方様のお名前をお伺いしても宜しいですか？」

良く見りやそいつはきつちりと執事服を着込んでいて、物凄く風格のある老齡の男だった。

反対側が透けて見えるってことはこいつは幽霊のようだ。

「あ、栗生永和だ。つい先日人間をやめる羽目になって此処に厄介になることになった」

「ああ、此処に御逗留になられるお客様でございましたか。ようこそ、我が主の館へ。住み心地はいかがですか？」

「……別にこの館に罪は無いよな……」

俺が煤けた声でそう答えた瞬間、サバスの笑顔が引き攣ったものに変わった。

「どうやら今の一言で全てを察したらしい。彼とは何だか仲良くなれそうだ。」

「と、ところで永和様。何をお探しだったのですかな？」

何かを振り払うように話題を変えるサバスさん。

良い発音だ、下手な日本人よりも綺麗な発音をする。

それにしても何だか必死だ。此処は人を助けると思っただけ乗っかるでしょう。

「ああ、この館の管理方法を書いたマニュアルみたいなもんが無くなつて探していたんだ」

「左様ですか。しかし、残念ながら私めはそのようなものを残してはおりません。私がこのような身体になっていなければ今もまだ執事を続けているというのに……」

悔しげな表情を浮かべるサバス。

余程悔しいんだろうな。

「管理方法をリリア達に教えるってのはどうだ？　そうすりゃ一応館の管理は出来るだろ？」

すると突然サバスは固まった。額には大量の冷や汗が流れている。

「ハロー、サバスさん？　どつたの？」

「タシカニオシエナケレバナリマセンダガシカシミツカッタガサ

イゴワタシハケンキュウザイリヨウサマザマナヤクヒンゴウセイセイ
イブツサマザマナジゴクヨクグリワタシハワタシハ、アアアアア
アア……」

突然サバスが凄まじい勢いで壊れたロボットの様に錯乱し始めた。
ちよ、ま、こいつはやばい。何か危険なスイッチが入ったらしい。
何とかして戻さなくては。

「お、落ち着け！！ 今此処にリリアもミリアもシリアも居ない
！！ しっかりしろ！！」

どうすりゃいいか分かったのでとりあえず叫んでみる。
リリア達は館の反対側に居るので聞こえることは無い。

「ハッ！！ し、失礼致しました。あまりのことに私めとした事が
混乱してしまいました」

いや、幾らなんでもあれはあんまりだろ。

「…… んで、今の反応を見るにアンタはとある都合でご主人様に
会えないって事でFA？」

「FAです。このような身体になっていますからペンも持てませ
ん。このままでは館が廃れてしまいます……」

心底残念そうな顔でサバスが返す。
そいつは参ったな。さて、どうしたものか……

「あの…… 大変申し訳ございませんが、お願いをしても宜しいで
しょうか？」

「ん？ 何だ？」

「私めが永和様に管理方法をお教えしますので、それをお嬢様方にお伝えして頂けないでしょうか？」

ああ、なるほど。それならばサバスがリリア達に会うことなく伝える事が出来るな。

「OK、引き受けた。しっかりと伝えておくよ。何処で知ったかはボロボロになっちまった本を繋ぎ合せて何とか読んだって事にとく」

「お気遣い感謝します。それでは早速お教えしましょう。まずは……」

そうして俺は屋敷の管理方法を覚えるまでサバスの居る書庫に通った訳だ。ついでに美味しい紅茶とコーヒーの淹れ方も教わった。

何？ 何でんなもん聞いたのかって？ 悪いかよ、数少ない俺の趣味だ。

そんでもって、3人に対して結果を報告したわけだ。

……さて、どうなったと思う？

「管理方法分かったぞ」

「あらあら、見つかったのね。はい、良く頑張りました」

とりあえずほにゃほにゃした笑顔で人の頭を撫でまくるリリア。

……下は向かない。角度的にヤバイから。てか、胸元開きすぎだ

ろ……

「……うう、ヒサト君が目を合わせてくれない……」

そりゃ目を合わせようとする目毒も一緒に見るからだ。少しは男心も理解して欲しい。

あに？ それを見ないで何が男かって？

……悪いかよ、どうせ俺は女性が苦手さ！！ 文句あつかこの野郎！！

「こっとなつたら……えりゃ！！」

強引に目を合わせようとして俺の頭を押さえつけるリリア。

「ほぶっ！？」

歳を重ねた強力なヴァンパイアの力に耐え切れず勢い良く崩れる俺。

ぽよん。

気が付きゃ目の前は真っ暗。代わりに両側の頬に柔らかい感触。俺は何が起きているのかを即座に理解した。いかん、頭に血が上ってきた。

脱出を試みるが、どうしたことかリリアも固まっている。

頭を押さえつけられているので呼吸が出来ん。息苦しくてもがく抜け出そうとして突いた両手にグニヤリとしたした感触が伝わってくるが俺はそれどころではない。

「ん~~~~！！ ん~~~~！！」

「あつ、あうつ、きゃつ、く、くすぐったいわよー!」

お互いに混乱してどうすればいいのか分からない。

「……アンタ……何してんのよー……!」

「げふおおあああああああ!……!」

結局、シリアの踵落としが怒号と共に俺の延髄を捕らえるまでそれは続いた。……こりゃ首逝ったな。

「で、でだ。その管理のマニュアルなんだが、劣化が酷くて読めなもんじゃなかったから処分した。そのかわり、此処に繋ぎ合せて何とか内容を書き写したメモを取ったからこいつを参考にしてくれ」

気を取り直して報告を続ける俺。

恐らく顔は真っ赤であろう。

ついでに世界が横に90度回転している。首痛い。

「それで、そのメモは何処にあるんです?」

「ああ、此処にある。項目と手順が思いのほか多いからこの手帳丸々一冊使ったがな」

それを聞いて苦い顔をする皆様。

その表情から、面倒だという心境が即座に見て取れる。

お前ら、今までそれを何一つ文句を言わずサバスはやってたんだぞ、ちったあ感謝しとけ!!

「まあ良いです。そのメモ少し見せてください」

「ん、良いぞ」

ミリアにメモを渡す。すると、ミリアの表情が変わった。少し辟易したような表情から、訳が分からなくて固まったというような感じた。

「……あの、ヒサトさん？　これなんて書いてあるんですか？」

「はい？」

ん？　おかしいな、俺はちゃんと読める字を……あ、いけね。すっかり日本語で書きしまった。

「あ、済まん。すっかり俺の母国語で書きしまった。ワリイ、書き直すわ」

「待つてください。一緒に読んでいただけますか？　貴方の母国語には興味があります」

ミリアからメモを返してもらおうとすると、ミリアは俺のメモ帳を見ながらそんな事を言った。

「あ？　まあ、別に構わんが？」

「ありがとうございます。はい、メモはお返しします。読んでみてください」

ミリアからメモを受け取って開く。

しっかし、未知の言語に興味を持つとはミリアって文学少女かなんかかね？

そしていざ読もうとしたんだが……

「な、なあ、ミリア。幾らなんでも顔近くないか？」

「でも、こうしないと私が見えませんか？」

やったら顔近い。どのくらいって、俺の肩の上にミリアの顔があるくらい。てか、ぶっちゃけ乗ってる。

あゝ、いかん。間違はなく顔が赤くなる。

ふと見てみると、リリアはいつもの3割り増しくらいの笑顔を見せていて、シリアは顔を手で隠すようにしながらニヤニヤ笑っていた。

やっぱ退いてもらおうと思い、ミリアを見ると、それはまあ良い笑顔をしていた。

……断定、こいつ確信犯だ。

……ああ、何でこんなところで生き恥さらさにやらんのだ。もういい、さっさと読もう。

で、ひとしきり読み終わった後、シリアが一言、

「っていうかさ、アンタが管理すりゃ一番早いんじゃないの？」

等とのたまった。

「そうね、そもそも私はそういったこと苦手だし。」

「私もお掃除は苦手で……」

「と、言うわけでメンドくさいからアンタやって」

全くもってやる気なしのお三方であつた。

「な、ちよつと待て！！ 何で俺がんな事やらにやなんのだ！
？ 断固拒否する！！」

その後、俺は善戦むなく……と言うか、問答無用で議会の賛成
多数で館の管理を任されることになった。

だってさ、下手すりゃ俺は1滴残らず血を吸いつくされる訳で……

更に不運は続く。

俺はすっかり頂垂れて自分の部屋に戻つた。

此処は紅茶でも飲んで少し気分を落ち着かせよう。幸いにして、
此処には必要なものは全て揃つてる。

それじゃ、勢い良く水を汲んでまずはお湯を沸かしてつと。

沸いたらポットにお湯を入れて十分に暖めてお湯を捨てて、茶葉
とお湯を入れまして。

ああ、心が躍る。向こうじゃ金が掛かつてなかなか出来なかった
からな。

さて時間だ。茶漉しを使って別のポットに移し変えて出来上がり
つと。

さてさて、こっちの紅茶はどんな味なんかね？ そいじゃ、いた
だきm

「あら〜？ 何か紅茶の良い香りがするわ〜？」

「ヒサトさんの部屋からのようですね。行ってみますか？」

「アタシは行くわ。あいつの淹れた紅茶がどれくらいのものか審査しましょ」

ドアの外からあの3人の声が聞こえてきた。

どうやら俺の部屋に入って紅茶を飲む気満々らしい。

……やっぱ神様面貸せや。徹底的にブツ殺す。

「お邪魔するわよ？」

「済みません、その紅茶、私たちにも頂けませんか？」

「良い香りじゃないの。貰っていいわよね？」

3人は俺が答えを返す前に備え付けのテーブルに腰掛けた。ちなみに、椅子はちょうど3つあるのだった。よって、俺は座れない。

「……もう好きにしろ」

やってらんねー。趣味ぐらい1人で楽しませろっつーんだ。

「あら、おいしいわ」

「香りが引き立っていますね」

「なんか、サバスの淹れてくれた紅茶に良く似た味ね。アタシの好きだった味にそっくり」

3人ともなかなか良い笑顔と評価をくれる。
というか、サバスに淹れ方をしっかり教えてもらったから、サバ

スの紅茶に近いものになって当然なのだが。

「ああ、そりゃどうも」

結局俺は飲めなくなったので、不貞腐れた俺は投げやりに返事をする。

此处で突然、リリアがとんでもない提案をした。

「ねえ〜ミリアちゃん、シリアちゃん。このままヒサト君に執事をやつてもらうのはどうかしら〜？」

おいこら待てや。何でそうなる？

「あ、いいですね、それ。管理はするし、紅茶も美味しいし、私は賛成です」

「アタシも賛成。この部屋を見る限り、きちんと整頓されてるし」
だからお前ら少しは待てというに。

「だあ〜、お前ら俺の意思を無視すんな！！俺はやらん！！」
絶対、ひゃあうー！！」

俺がそう言う主張をしているとペロリと首筋に舌でなぞるような感触を覚えた。

咄嗟に首筋を押さえてしゃがみこむ。

「くすくす、やつぱ良い反応だわ。赤くなっちゃってかあ〜いいわね〜」

振り返ればそこにはニヤニヤ笑って俺を見下すシリアの姿が。

……今度はお前か。くっ、見た目小中学生の女に見下されるとは何たる屈辱……！

「本当に面白いわよね。ね、ミリアちゃん？」

「はい。困惑した表情、とっても可愛かったですよ。」

「ねえ、ヒサト。こうやって弄られるのと執事やるのどっちが良
い？ 選ばせてあげるわよ？」

……結局、俺は執事を引き受けることにした。

だって、もうプライドがズタズタになるのはご免だ。

……とまあ、こういうわけだ。

………はあ、何とかならんかね？ 俺の運の無さ。

ロースト俺、ってオイ。

こないだの日記：俺は執事をやることと引き換えにプライドを守りましたとさ。……今に見てろ。

あゝつと、此処の掃除は終わった。窓は太陽光がしんどかったが
あらかた拭いた。恐らく一生使わんであるうやたらと大量にある客
間も全部掃除した。

ふゝつ、館の管理をすることになったのは致し方ないが、幾らな
んでもたった4人にこの広さは広すぎるんじゃないかね？ 使用人
すらいないつーのに。

何しろ、その規模といたらヴェルサイユ宮殿に勝るとも劣らな
い規模なのだ。そんなもんを1人で管理しろというのは幾らなんでも無理があんだろつがよ。

あまりの広さに難儀した俺はサバスに相談をしたんだが、聞いて
みれば何ということは無かった。

「ああ、建具等の修理や補強や点検などは1ヶ月に一度業者に頼
んでいたのでございます。こちらがその業者の連絡先は……」

という何とも常識的な答えが返ってきた。ああ、やっぱりそうなん
だな。

しかし、この館はツヴァイトスの町の外れの森の中にあるのだ
が、此処まで来るとは奇特な業者だ。

ちなみに、ついでにこの滅茶苦茶キツイ掃除に関しても聞いてみ
たんだがサバスの答えは、

「……気合です」

「いや、気合で何とかなる広さじゃないだろ、この館」

「K I A I、です。己の能力をフルに活用し、使えるものは何であろうとも駆使して館全体を磨き上げるのです！！ ヴァンパイアの身体能力なら昼までには終わるはずですよ！！」

等という凄まじい根性論が出てきた。

……意外と体育会系だったんだな、サバス。

そう言うわけで俺はヴァンパイアの身体能力で全力疾走し、廊下の幅にピッタリな特注巨大モップに梯子に雑巾などをフル活用して掃除をしたんだが、まあ辛いものなのって。

ん？ 渋ってた割にはえらく真面目じゃないかって？

……実はな、いっぺんサボってたのをミリアに見つけた事があるんだが……

「あら、休憩中ですか、ヒサトさん？ まだ掃除を始めてから30分しか経っていなかった筈ですけど……」

ちなみに、ミリアは良く俺の様子を見に来る。

何が楽しいのか知らんが、大抵は俺を見ると仕事中でも、荷物の運搬中でも近寄ってくるのだ。

……あれかね、俺はミリアに監視されているのだろうか？

「ああ？ まあ、ぼちぼちやってんよ」

めっちゃおざなりに返事を返す。
すると、ミリアは軽く溜息をついた。

「その割には全然片付いていませんね……はあ、仕方ありません」

そう言つとミリアは床に座っていた俺後ろに座りこんだ。

それから俺が反応するまもなく俺の両腕を後ろでがっちりホールドして、俺の首筋を舐め始めた。

「なっ、うっ、い、いきなり何を、うあっ！」

「うふふ、仕事をサボっている人にはお仕置きが必要ですよね？
もし、このままサボるようでしたら、私は貴方を頂きますよ？」

妖艶な笑みを浮かべながら耳元で囁く様に話すミリア。

その声色はどこか楽しそうである。

実際に全身の血をパーフェクトにドレインされた身としては洒落にならん。

という訳で、俺は大人しく真面目に仕事をすることにしたのだった。

「……別にサボってくれててもいいのに……」とかミリアが言っていたが気にしない。気にしたら碌なことにならん気がする。

……とまあ、こういうわけだ。流石に俺も半殺しのリスクを背負ってまでサボろうとは思わん。

で、掃除が終わったら次は洗濯。

こいつに関しては楽なもんだ。何せ、4人分しかないんだからな。

ただ1つ面倒なのはドライクリーニングで無ければ駄目だったり色物柄物が多いくらいか。

どれが誰のか、っていう判別はその服の色と種類を見りや判る。リリアは温かみのあるライトグリーン系やオレンジ系のワンピースやドレスが多い。

ミリアは落ち着いたブルーやワインレッド等のシャツやブラウンやグレーのロングスカートが好きだ。

シリアは明るいイエローやレッドのシャツにミニスカートという服装が多いな。

因みにパーティードレスは色違いのお揃いで、それぞれグリーン、ブルー、レッドだ。

はあ？ 俺？ 最初に着ていた服以外は全て執事服ですが何か？ それしかないんだから仕方ねえだろ。

洗濯が終わったら食事の時間だ。と言っても、冷蔵庫から輸血パックを取って皆に配るだけなんだが。

別に普通の食事でも良いらしいが、身体能力が人間より優れたヴァンパイアのエネルギー源には血液が一番らしい。何度考えても納得がいかなえ。

ついでに言うと俺も一緒に食事を摂るように言われている。向こうからしてみれば執事と言うのは仕事だけの物で、実際のところ俺は友人感覚なんだそうだ。

だから、本来の執事のように畏まられると逆に困るんだとき。ま、楽でいいがな。

……どうでもいいが、食後に全員で俺を見るのはやめて頂きたい。俺はデザートではない。

そんでもって、しばらくしたら食後のティータイムというわけだ。当然俺も御相伴に預かる。

こいつに関しては手を抜かん。自分のためにも丁寧に淹れる。よっしゃ、今回も美味くはいった。他の3人も満足そうだ。

サバスのお陰で随分と美味しく淹れられるようになったな。今度はこれに合うお茶菓子の作り方でも教わってみるか。

等と考えていたらシリアがこんなこと言い出した。

「そういえば、ヒサトは太陽光を克服しないと買出しとか行けないんじゃない？」

「そうね、日が暮れてからじゃあんまり買い物出来ないわね」

のほほんとした表情で少し考えるようにしてリリアがそう言う。

「それに、皆で出かけることも出来ませんしね」

ミリアも、それに同意するように頷く。

確かに、ここを出るためにも太陽光の克服は重要だ。

と、俺はとあることに気が付いた。

「ん？ って事は太陽光を克服する方法があるってことか？」

「あるわよ？ ただ、ちょっと時間が掛かるのよね」

リリアが何て事の無いようにそう言う。

こいつは朗報だ。そうなりや俺は自由だ。ヒャッハウ！！

時間はかかるらしいが、それを差し引いてもメリットは大きい。

「で、その方法は？」

「毎日少しずつ窓際で太陽を浴びて少しずつ慣らしていくんです。

そうして太陽光で壊れた部分を再構成していくことによって太陽が平気になるんです」

成程な。予防接種と似たような原理で免疫を作るってことか。

「それで、どれ位時間が掛かるんだ？」

「うーん、個人差はあるけど、早くて5年。長けりゃ10年ってとこね。まあ、普通なら最初は3秒も持たないしね。アンタが今日窓拭きを終わらせたのだって、此処の窓ガラスは特殊とはいえホントは凄いことなのよ？」

さらっとそう仰るシリアさん。

な、長すぎるorz 少なくともあと5年はこの生活かよ……

「でも、ヒサト君なら皆が協力すればもっと早く行けると思うわよね？ そうね、多分1ヶ月位で何とかなるんじゃない？」

そこにリリアから神の啓示が。

5年が1ヶ月に縮むとは、そいつは朗報だ。

だが、本当なのだろうか？

「そんな方法あるのか？」

「ありますよ。ちょっと待っていてくださいね。少し相談がありますから」

ミリアは笑顔でそう言うと、他の2人を集め、3人で会議をしている。

俺のために相談してくれているのは分かる。

だがしかし、俺の直感は警鐘を鳴らしている。
何というか、精神的なダメージを受けそうな気がする。

「相談終わったわよ。えっと、そういえば最初誰から行くの？」

誰から行くとはどういう事なのだろうか？
いっぺんには出来ない事なのだろうか？

「そうね……それじゃミリアちゃんからどうぞ」

「はい。それじゃ、ヒサトさん。目を瞑っててくださいね？」

どこか楽しそうにミリアはそう言う。

……その笑顔が滅茶苦茶不安にさせるんですけど……

「あ、ああ。わかった」

だがどうしようもないので、言われるがままに目を瞑る。すると、

「それじゃあ、えい!!」

「おわっ!？」

突然腰に手を回され身体を後ろに押される。結果、俺はミリアの腕の中に仰向けに倒れこむことになる。

驚いて目を開けると、そこにはミリアの顔が。

「い、いきなり何を……」

「……ふふっ、それじゃあ、失礼しますね」

相変わらず楽しそうに、笑顔で俺にそう言う。

「んっ……」

「むぐっ!？」

でもって、ミリアは俺の唇に自分の唇を押し当て、俺の口を開かせようと舌をねじ込んで、って何じゃそりゃ!？

しばらくすると、俺の口の中に血の味が広がってきた。

俺は口の中を怪我した覚えはない。つまりこれはミリアの血だ。深みのある穏やかな味の血だった。

よく分からないが、吐き出すのは悪いし、とりあえず飲み込んでおこつ。

「ん……はあ……」

俺から口を離すミリア。心なしか顔が上気しているように見える。言うまでも無く、俺の顔は真っ赤だろう。

ああやばい、心臓が凄いことに……

「ふふふ、ごちそうさまでした。もしかして、ファーストキスでしたか？」

はにかんだ笑顔でそう言うミリア。うぐ、それは反則だと思うぞ。

もちろん、俺にとっては初めてだ。

……随分と強烈なファーストキスになったもんだが。眼を逸らし、ミリアの質問に沈黙をもって答える。

「くすくす、そうですか。それじゃ、次はリリア姉さんですよ?」

ミリアの一言に思わず固まる。

はい? 聞いてませんよ? 一体何事ですか?

「はいはい。それじゃ〜ヒサトくん。準備はい〜い? 行くわよ〜」

「え、ちよつ、ま、むぐう!!」

今度はリリアに口移しで血を飲まされる俺。

頭と肩を抱え込まれているので逃げられん。それから胸当たってるだよ!!

口の中に大量の血が流し込まれた。ほのかに甘い優しい味だった。

あゝ、頭に血が上る〜!! お、落ち着け俺!! これも何か考
えがあつてやつてるに決まつてる!!

「んぐつ!?!」

突然リリアに舌を噛まれた。舌から血が滲み出す。

「はあ……ちゆるちゆる……」

それから少し俺の口の中を吸った後、その口を離れた。

もう俺の頭の中は真っ白だ。何でこんなことをしているのかさっぱり分からん。

「はい、おしまい。最後はシリアちゃんの番よ〜」

「ん、それじゃヒサト。さっさと始めるわよ。ん……」

頭の中がパンクして最早なすがままになる俺。
首に腕を回され、シリアから同様に血を飲まされる。
シリアらしいすつきりとした味だった。

「むっ……は……」

最後に俺の舌の怪我をした部分をひとしきり舐めてシリアが口を離す。

「はぁ……ねえ、ヒサト？ 起きてる？ ボ……ッとしてないで何とか言いなさいよ」

「……っ！ あ、アンタ等何でいきなりこんなことを！？」

シリアの一言で我に返る俺。いかん、声が裏返った。いい加減に落ち着け俺！！

「あはははは……！ 予想はしてたけどやっぱりアンタ面白いわ！」

腹を抱えて心底面白そうに笑うシリア。

……くっそ、人の反応で笑うな。

「キスくらいでそこまで反応するなんて、本当にウブね」

ほんわかとした笑顔でそういうシリア。
気にしてるんだから言わないでくれ。

「ファーストキスの反応、可愛かったですよ」

楽しそうに笑いながら俺の肩をたたくミリア。

……ええい、黙れこの人でなし共！！

あ、もう俺も人間じゃなかったか、くそつたれ。

「さてと、もう十分からかったことだし、説明するわよ。今アンタには太陽に耐えられる私たちの血を飲ませたわ。これでアンタには太陽光への抵抗性がある程度ついた筈よ。まあ、これは私たちの力を一時的に借りられるだけで、根本的な解決にならないんだからね」

「で、この状態のうちに直射日光を浴びて抵抗性を一気につけようという話です。分かりましたか？」

「……ぜひともからかう前に説明が欲しいところだったが理解した」

つまり、病原菌に対する免疫をつけるためにワクチンを打ちこまれた状態って訳だな。

……てことは、その度に俺はあんな事をされるのか……

この3人ほどの綺麗どころにされるのは役得かもしれないが、その後の精神攻撃でどうにかなりそうだ。

「でも、別に口移しじゃなくて首や腕から血を送り込めば良かったんだけどね」

そんな事を考えているところに爆弾発言をかましてくれるリリア。

「はああああ！？ それじゃあ、何でわざわざ口移しなんてした

んだよ!？」

「……ヒサト(君)(さん)の反応が面白そうだったから(よくです)」「」

「ふざけんなあああああああ!!!」

……………全く、分かっちゃいたがホントにこいつら碌なことを考
えん。純真な人の心を弄ぶな。

自らの境遇を嘆いていると、シリアが何かを持ってきた。

長い棒が1本に、Y字型の棒が2本。それからロープが数本にク
ランクだ。

非常に嫌な予感がする。……よし、抜き足差し足……

「リリ姉、あれ持ってきたから準備しとくわよ」

「頼んだわよ。それじゃ、ミリアちゃん、確保!!」

「了解です!! えい、捕まえた!!」

あっさり捕まる俺。くっ、反応が遅れたか。不覚!!

「こ、こら、放せ!! H A N A S E!!!!」

抵抗するも、女性とは言え2人がかりで抑え込まれては抜け出す
事はかなわなかった。

「だめよ、ヒサト君には頑張ってもらわないといけないんだか
ら」

「そう言うわけで、観念してくださいね、ヒサトさん？」

長い棒に両手両足を括りつけられ、外に運び出される俺。気分は
猟師に狩られた猪の気分だ。

そして俺は炎天下の庭に出されることになった。早速全身が焼けるような感覚に襲われる。

「うぎゃああああああ！！！！ や、焼けるうううううう！！！！」

「シリアちゃん、あれ、お願いね」

「了解。ほら、うるさいから少し黙ってなさい！！」

「む、むぐうううう！！！！ おああほええほんえんあ
ああああ（お前らそれでも人間か）！！！！」

大声が出せないように口の中に布切れを突っ込まれる。
何かを致命的に間違った気がするが最早それどころではない。

「それじゃリリ姉。アタシはセイレンと約束があるから出かける
わよ。行ってきます！！」

「はい、行ってらっしゃい。晩ご飯には戻ってくるのよ」

人が悶絶している中、横で平和に会話する2人。
そんなことより早く助けてくれ！！

「姉さん、こんなものを見つけたんだけど、どうしますか？」

「あら、それは丁度良いわね。これじゃ背中が影になって当たらないから少し困ってたのよ」

……おい、冗談だろ？ 何でパラボラアンテナみたいな形をした鏡が有るんだ！？

「えっと、これを身体の下に置きまして。これで良いですね。」

「む、むえあへああえへふええええええ（そ、それだけはやめてくれ）！！！！」

いや、マジで勘弁していただきたい。やるならせめて普通の鏡でやってくれ！！

「ねえ、何か焦げ臭くな〜い？」

「変ですね。まさか、何処か火事なんでしょうか！？」

「大変！？ ミリアちゃん、向こうを見てきて頂戴、私はあつちを見てくるから〜！！」

「分かりました！！」

それぞれ見当違いのところに走っていく2人。

おいお前ら、ちったあ科学の勉強をしてくれーーーー！！！！
こんな凹面鏡で光を一点に集めたらそっから発火するに決まってるだろうが！！！！

背中が本当に燃える！！ あ、熱い！！ 太陽の3倍増しで熱い！！！！

「おつかしいわね〜？ 何処から火が出てるのかしら〜？」

「きゃあつ、姉さん！！ ヒサトさんが燃えてます！！」

「た、大変！？ み、水を持ってきて〜！！！」

その後、俺は水を掛けられて消火はされたが、結局日没まで外に放置された。

もちろん、夜はベッドから一步も動けん。

こ、こんなのがあと1ヶ月も続くのか！？

……俺、生きて出られるかな……

………畜生、何で俺がこんな目に遭わなきゃならんのだ。
こんな状況にしてくれてありがとうがとう神様、地獄へ堕ちろ。

やってきましたツヴァイトス。

こないだの日記：俺は綺麗にローストされましたとき。もうやだ。

なんとか地獄の修行を耐え切った俺は太陽を克服することに成功した。

もう前と同じ感覚で外を歩けるようになった。日光浴で心地よく眠れる。

そして俺は町に今買出しに出かけている所だ。冷蔵庫の中の食料が尽きたので買いに行くのだ。

リリアから町の簡単な地図を貰っているのでとりあえず迷ったりはしないだろう。

だが、俺には1つの懸念事項があった。

ヴァンパイアになっちまった俺が町の人間を襲ってしまう可能性が0とは言えないのだ。

もし、事件なんざ起こしたときにやサバスと同じく心臓に銀玉を喰らう羽目になるだろう。

もうすぐ町に着く。俺は滅茶苦茶緊張しながら町の中に入った。

結論から言おう、俺の懸念は全くの無駄だった。

何でかって？ そりゃ町には人間が1人もいなかったからだ。

それじゃそこにいたのは何か？

そこにいたのは、天使に悪魔、ゾンビに動く人形、幽霊に妖怪等のばけもんばかりだった。

うつわ、何じゃこりゃ。今更だが、本当に此処は異界なんだな。

「だから、困っている人間に無償で救いを差し伸べるのが私たちの喜びなんです！！ 何でそれが分からないんですか！？」

「んな事はかりしてたら人間墮落すんだろうが！！ だから俺達は嫌われながらも願いを叶える時には対価を貰ってんだよ！！」

テレビの中じゃミカエルとバフォメットという大天使と大悪魔の対談が行われていた。

もう少しギスギスしたものかと思っていたら、わりかし平和的だ。

「上司はああ言うけどさ、安い給料で大いに働かされている僕達の気持ちになって考えたことはあるのかな？ こっちは家族を養っている身なのにさ……」

「それでも安全な仕事だから良いだろうがよ。俺らなんざ教訓を与える事が仕事だって言うのに人間どもは全部俺達のせいにして都合よく解釈してやがる。おまけに俺達悪魔を見つけたら殺そうとする始末だ。給料は高いがやってらんねえよ」

食堂を見てみりゃ、テレビの前で悪魔と天使が仲良く食事をしている。

……やっぱ、誰でも上司に文句はあるもんなんだな。そういや、こんなことになるんならあの店長一発殴ったときや良かった。ちえ。そうやって町を眺めていると、

「おや、そこのお前、ちょっと来い」

と、後ろから声が掛かった。振り返ってみると、そこには水晶玉

を覗き込んでいる魔女がいた。

見た目の年齢はリリアと同じくらい。赤紫色でウェーブが掛かった髪を肩の長さで切っている。

「ふむ、こいつは稀に見る酷さだな。総合的に見て運が無さ過ぎる。特に女運に関しては群をぬいて悪い。お前の全体運を数値に表すとすれば、5か。長年此处で占って来たが、此处まで悪いのは初めてだな」

……いきなり失礼なことを言ってくれる。んなこたあ最初から分かってるっての。

「……占ってくれと頼んだ覚えは無いが？ それに運が無いのはもう自覚している」

「まあ、待て。今回はタダだ。聞いていくのも悪くは無い。それにお前は这个世界に来てまだ日が浅いだろう？ ならば私の話を聞いていったほうが良い」

魔女はさらりと重要な事を口にする。

「おい、何で俺が元々この世界の人間じゃないって分かった？」

「これでも一応魔女なんですね、少し魔法でな。それに、別世界から这个世界に来るのは別にそこまで珍しいことではない。もっとも、多くも無いがな。10年に1回といったところか」

何て事の無いように魔女はそう言う。

どうやらそれはここでは普通の事のようにだ。

「待て、それは一体どう言うことだ？」

「まあ待て、話には順序と言うものがある。まずはこの世界について説明しよう。お前が身をもって知った通り、世界は1つではなく無数の世界が存在する。その中には当然お前が元居た世界も含まれている。だが、この世界はその世界の中には含まれていない」

そう言うのと、彼女は紙を取り出して沢山の円を書き始めた。そして、それを何本もの線で繋ぐ。

「この円がそれぞれの世界だ。世界はバラバラの様でいて、その実、似たような世界が近くに集まっている。そうだな、お前が知っている例えで一番合うのはユグドラシルだな。同じ枝から枝分かれた世界は似ているという訳だ。通常、この枝と枝を乗り換えることで世界間の移動が起こる。だが、それは色々な要因が複雑に絡まりあって起こるもので滅多にない」

「ちよつと待て。十年に一度が滅多にないって言う頻度か？」

「人の話は最後まで聞け。確かに普通なら世界間の移動は滅多に起こらん。だが、この世界は違う。例えば、何らかの原因、そうだな、例えばお前のように別の生物になるなどしてその世界の法則に合わなくなったものや、余程運の無い輩が世界から外に弾かれる。その時に丁度枝に飛び移れば良いんだが、飛び出した先に何も無いと言う奴が稀に出てくる。そういった奴は世界樹から転落する。もう解るな？」

「つまり、そうやって零れ落ちた奴が来るのがこの世界って訳だ」

魔女は一つ頷いて話を続ける。

その動きは一つ一つが優雅で、気品にあふれていた。

「理解が早くて助かる。そう言うことだ。無数にある世界から落ちてくるのだから、例えば1つの世界から零れてくるのが稀だとしても短いサイクルで落ちて来ることになる。ただ、お前のように連れてこられる希少な例も有るし、そもそも零れ落ちてきた奴に殆どまともな奴はいないがな。居るのはお前の世界で言う妖怪だの化け物だのそう言うところだ」

「で、俺が元の世界に戻ることは出来るのか？」

これが肝心。ここまでの知識があるのならば帰る方法を知っていてもおかしくはない。

「出来なくはないさ。だが、世界樹を上るには特殊な条件が必要でな。満月の夜に一度だけ、それも1日の間だけ別の世界に居る事が出来る。この世界に落ちた以上、完全に元の世界に帰ると言うのは諦めた方が良く。まあ、一部例外も居るがな。天使や悪魔は仕事上他の世界に行くし、私の知り合いに腰の高さから落ちては死に、石に躓いては死ぬ奴が居るんだが、そいつはその度に世界に呼び戻されているよ」

魔女は少しだけ憐憫のこもったまなざしで俺を見た。

……見た目は冷たそうだが、結構優しい人なのかも知れない。

現に、始めて会う俺にここまで親切に説明してくれたしな。

「……そうか」

それにしても……やれやれ、もう帰れないのか。まあ、月に一度は帰れるのだし、そこまで悲観することは無いか。留まる方法を探

せばいいだけの話だ。

そんな事を考えていると、魔女は少し驚いたような顔をした。

「おや、思ったよりも落ち込まないんだな。その場に崩れ落ちるくらいはしそうなものだが」

「何、月に一度は戻れるんだろ？　なら留まる方法を探すさ。幸いにして、何度でも帰れるんだからな」

すると、魔女は感心したように頷いた。

「そうか、見た目より強いんだな。少しお前に興味が沸いた。何かあったら来るが良い、特別にタダで相談に乗ろう。私の名前はリニア・ミムス。お前は？」

「栗生永和だ。サンキュ、話、結構面白かったぜ」

そう言って立ち去ろうとすると、

「ああ、言い忘れていたがヒサト。お前の不運はまだまだ序の口だ。特にお前の女難はその程度では終わらん。女と関わる時には慎重にな」

……くっ、折角気分良く立ち去ろうとしていたのに台無しじゃねえか。まあ、肝に銘じておこう。

そう言えば、何でただ通りすがっただけの俺を占ったんだろう？
聞いてみるか。

「なあ、何で俺に占ってみようと思ったんだ？　通りすがりの人間を占っても何の得もないだろうに。」

すると、リニアは少し考えて答えた。

「そうだな……何となく占ってみたくなった。理由などそれで十分だろう？」

「そうか。……ありがとよ、話を聞かせてくれて。じゃ、何か困ったら相談をしに来るさ。またな」

「ああ、いつでも来るが良い」

リニアはそう言って仕事に戻った。

何だか、これから先結構お世話になりそうな気がした。

さて、買い物をはじめことにしよう。

まずは紅茶が欲しいな。これは3人からもリクエストがあった。地図を見ながら歩いていくと、裏道に一軒の茶葉の専門店があった。

店の中は歴史を感じさせる造りで、多種多様な種類の茶葉があった。

「いらっしやいませ。ゆっくり見ていってください」

店番の人は人形のように整った綺麗な顔の人だ。

……って言うか、マリオネットだな。身体の上から糸が伸びている。これで表情が出せるんだから凄い。何処の世界から来たんだかうっむ、無難なのは俺が知っているダージリンやアッサムなんだが、他の世界のも試してみたい。

「すみません、お勧めのものって何かありますか？」

「うーん、そうですね……あ、今日はこちらのリグナスが良いのが入ってます。渋みが強いですが、ミルクを入れても風味が全く落ちないので是非ミルクティーでいかがですか？」

店員の受け答えは実に丁寧なものだった。
成程、アッサムの亜種みたいなものと解釈すれば良さそうだ。試してみるか。

「それじゃ、それ200gお願いします」

「ありがとうございます。紅茶に関して聞きたい事がありましたら気軽に来てくださいね」

……良い店だ。目印も覚えたことだし、また来よう。

さて、次は……俺の普段着か。

流石にずっと執事服と言うのは嫌だ。休みの日くらい自由な格好で居たい。

男物の服の店は……此処か。随分でかいな。

「お？ いらっしゃい。試着したけりや勝手にしてくれ」

店員は若い男で、店の隅で煙草を吸いながら新聞を読んでいた。
なんとまあ、やる気の無い奴だ。

見た目は普通だが、恐らくこいつも人間じゃねえな。
お言葉に甘えて自由に選んで試着することにした。

いや、まあ種類が多いの何の。カジュアルウェアにフォーマルスーツ、果ては作業着まで何でも揃っていた。どれにしようか悩んでいると男がこちらを向いた。

「うん？ そっぴい見ない顔だな。此処に来てどれ位経つ？」

「……は、はあ。1ヶ月半ですが……」

「……そうか、アンタがね……ま、頑張れ」

……会話の意味がよく分からん。というか、その哀れむような視線は何だ？

とりあえず、ジーンズと黒いシャツにデニムのジャケットを買って店を出た。

さてと、一旦一休みしますかね。

近くにあった喫茶店に入る。喫茶店の中は小奇麗で、所々に高そうなアンティークのインテリアのようなものが置いてあった。

「いらっしやいませ。1名様御案内致します」

案内されたのはバルコニーにある屋外の席。俺はとりあえずコーヒークラブサンドを注文した。

余談だが、メニューにはちゃんと色々な種族に対応したものもあった。

「お待たせいたしました。こちらクラブサンドとホットコーヒーでございます」

ウェイターが持ってきたクラブサンドを食べながら町の人通りを眺める。

……何ていうか、人間とあんま変わんねえな。ただ、歩いている奴の姿は全く違うから見ていて飽きないが。

「ねえ、ひよつとして貴方、フローゼル家の新しい執事さん？」

余程暇だったのか、ウェイトレスが話しかけてきた。

ウェイトレスは腰まで伸びた明るい茶髪を後ろで束ねていて、人間で言うならミリアと同年代であろう幽霊だった。

「んん？ ああ、そうだが。」

「へえ、ホントに新しい執事さん居たんだ。」

何か面白いものを見つけたような感じでウェイトレスは話しかけてくる。

「何だ？ 何で俺の話が出てくるんだ？」

「あれ、知らない？ フローゼルの館って、今別名「断末魔の館」って呼ばれているのよ。男の声だったから新しい執事でも雇ったんじゃないかって噂が流れてたのよ」

「は、はあああああ！？」

なんと、俺の毎度毎度の叫び声は町にまで響き渡っていたと言っくつ、何という恥。

「マジか……」

「ありやいや、そんなに凹むこと無いじゃん。ま、その内良い事有るって」

俺がマジ凹みしていると、慰めるようにウェイトレスは話しかけてくる。

「そうだな。此処で凹んだって無駄だな」

「うわっ、立ち直り早っ！……！」

俺が勢いよく顔を上げると、ウェイトレスは勢い良く後ずさった。そりゃあな。もう慣れたし。

「ふうん、思ったよりも面白い人だね。それじゃ、私は仕事に戻るね」

「ああ。仕事頑張れよ」

笑顔でこちらに手を振るウェイトレスを何となく応援してみる。む、もうコーヒーが無いな。

「む、もうこんな時間か。早く帰らんとまたミスにどやされる」

隣で紅茶を飲んでいたダンディーなフランケンシュタインが慌てて立ち上がる。

俺も食べ終わったことだし、さっさと用事を済ませるとしよう。

「あ、もう帰るんだ。また来てねー！！」

「ああ。だが、後ろのウェ이터が渋い顔をしてるから出来るだけ敬語でな」

「あはははは……気をつけます」

喫茶店を出た後、ちらりと町の真ん中にある時計塔を見る。……

15時か。まだ結構時間があるな。少し街中を散策してみるか。

街中を当ても無く歩く。新しい町でこれをやると割りと気分転換になるから好きだ。

しばらく歩いていると、何処から子供のすすり泣く声が聞こえてきた。

……ちっ、周りの奴らは無反応かよ。しゃあない、少し見に行くか。

鳴き声のする方向へ行つてみると、そこには、1人の10歳前後に見える天使の女の子が居た。

見ると、膝を擦りむいて血が出ている。恐らく、そこから転んで出来た傷だろう。

「おい、大丈夫か？」

「うう……痛いよ……痛いよ……」

「今消毒してやるから少し待ってる。まずは水道で傷を洗おう。少し沁みるが、我慢してくれよ？」

少女を水道まで連れて行き、傷口の砂を洗い流す。

「うゝゝつ!!!!」

凄く痛そうだが、こうしないと化膿してもっと酷いことになるので続ける。

次に、ポケットから消毒液と軟膏を取り出す。

これは、怪我をした時にわざわざ取りに行くのが面倒くさいので常に所持しているものだ。

「うきゅっ!？」

消毒薬が沁みるのを眼をギュッと閉じて我慢している少女。……
なんだか微笑ましいな。

後は化膿止めの軟膏を塗って、はい終わり。

「よし、消毒終わり。大丈夫か？」

「うん……大丈夫……」

「そうか、それは良かった。それじゃ俺はこれで……」

そう言って立ち去ろうとすると、少女は俺の服の裾をしっかりと掴んでいた。

「い、行かないで……」

「え？」

「一人ぼっちはやだ……」

サファイアの様な青い眼に涙を浮かべ、今にも泣き出しそうな声でそう言う彼女。

参ったな。俺は時計塔を見た。15時15分か。まだ時間はあるな。

「わかった。傍に居てやるから、な？」

「ありがとう……私、シルフィって言うの。名前は何ていうの？」

「栗生永和。永和が名前だ。そういえば、お母さんは居ないの？」

「……お父さんもお母さんもいつもお仕事。兄妹も居ないから家に帰っても誰も居ないよ……」

シルフィは、寂しくてたまらないといった表情でそう言った。

「……そっか」

むむっ、共働きの家か。俺はこの年齢の時に経験した事が無いから解らんが、このくらいの子供にしてみりゃ寂しいのだろう。

「それじゃ、俺はまだしばらく時間があるし、何かして遊ぶか？」

「うん!!」

それからしばらく俺達は2人で出来る遊びでひとしきり遊んだり、お喋りをしたりした。

……あの館の執事だつて言ったら頭を撫でられた。うつつ、悲しくなんてないやい。

しばらくしてから、シルフィがこんなこと言い出した。

「ね、ねえ、ヒサ兄って呼んでも良い？ 私ね……ヒサトみたいなお兄ちゃん欲しかったんだ。だから……ね？」

ああ、そう言うことか。それならもう答えは決まっている。

「ああ。良いぜ。こっちが呼ばれて困ることも無いしな。」

すると、シルフィの顔にぱあっと笑顔が咲いた。

「ありがとう、ヒサ兄！！」

それと同時に抱きついてきたのでしつかり受け止める。
なんだかこつちも妹が出来たような感じた。

しばらく経つと、シルフィの身体から力が段々抜けていった。

ん？　なんだか様子がおかしいぞ？

「シルフィ？　どうした？」

「ごめん、ヒサ兄……少し頭が痛い……」

む、それはいかん。急いで家に送り届けるとしよう。

「わかった。それじゃ家まで送っていこう。案内頼めるか？」

「うん……こつち……」

シルフィに案内されて着いた家は、住宅地の中の一軒で、それなりに大きな家だった。

中に入って、シルフィをベッドに寝かせる。

「ひ、ヒサ兄、傍に居てくれる?」

おっかなびつくりと言った感じでシルフィは俺にそう言った。

「わかった。いつまでもは居られないけど、せめて寝るまでは傍に居てやるよ」

「うん。それじゃ、トイレに行ってくるからちよつと待ってて」

そう言って廊下に歩いていくシルフィ。

言われたとおりに待つ俺。

しばらくして、ガチャリと鍵が掛かる音と共にシルフィが入ってきた。

無言でベッドに入るシルフィ。すると突然、

「ねえ、ヒサ兄。一緒に寝てくれる?」

等と言う強烈な一言を下さった。

「はい?」

「今までお父さんもお母さんも夜遅くまで働いてたから、添い寝してもらったこと無いんだ。だからして貰いたくて……駄目?」

無邪気な顔して上目づかいで俺を見ながら甘える様にそう言う。

……まあ、子供だから良いか。それに、病気で心細いのだろうし、仕方ない。

……おい、今このロリコンとか言っただ奴出て来い。思いっき

り殴るから。

「ああ、良いぜ」

「ありがとう。それじゃ、ここ入って」

シルフィに言われたとおり布団の中に入る。

「フフフ……」

軽く笑いながら俺の胸の上に頬を寄せるシルフィ。

何か様子がおかしいな。そもそも何で鍵なんて掛けたんだ？

「くすくす、どうかしたの、ヒサ兄？」

やけに艶っぽい笑みを浮かべるシルフィ。

あ、あら？ 良く見ると何か白かった筈の背中の翼が黒くなってらっしゃいますよ？ えっと、堕天使？

「し、シルフィ？ どうしたんだ？」

「ん？ 私はヒサ兄を自分の物にしたいだけだよ？ 優しいし、執事さんなら家事も出来ると思うから、今の内に先物買いを、ね？」

此処に来て漸く俺の頭の中に警鐘が鳴り響いた。俺は逃げようとしたが、

「うふふ……駄目だよ、私が寝るまで傍に居てくれる約束だったでしょ？」

と言って、両手両足を俺に絡ませ、俺の胸から離れないシルフィ。それはそうだが、今とは状況が違うつて！！

「い、いや、もう少し考え直さないか？ 何も今そんな先のことを考える必要は……」

「良いでしょ？ 私のことなんだから自分で決めるの」

チロチロと鎖骨の辺りを舐めたり、キスしたりしながら話すシルフィさん。すんません、それメツチャクすぐつたいっす。すると、突如シルフィの様子が急変した。

「うつ！？ あ、頭が痛い……」

突然シルフィが頭を抱えて唸りだす。

すると、黒かった翼がどんどん白くなっていった。

そして、完全に翼から色が抜けるとポテツと俺の胸に倒れこんだ。

「お、おい！！ 大丈夫か！？」

「う……ん？ あ、あれ？ 私いつベッドに戻ったの？ それに何で私ヒサ兄の上で寝てるの？」

シルフィはキョトンとした顔で周りをキョロキョロと見回した。

……マジか。二重人格者かよ。しかも、今さっきあったことを覚えていないとは恐ろしい。

「変だなあ……まあいいや。そうだ、ヒサ兄。このまま寝ちゃ駄目？」

……結局添い寝はするのね。

「まあ良いけどせめて俺の上で寝るのは止めてくれないか。俺も仕事があるからさ」

「うん、わかった。おやすみ、ヒサ兄」

シルフィは俺から下りてピッタリと俺の隣に付いた。

しばらくすると、静かな寝息が聞こえてきた。

やれやれ、漸く開放か。途中のあれは本当に心臓に悪かった。そつとベッドから抜けて家から出る。

はあ……リニアの言った通りだ、子供ももう油断できんな。ふと時計を見る。

…… 18時…… 30分だと!?

拙い、早く帰らなければ何をされるかわかったもんじゃない。

俺は全速力で走って帰ることにした。

館に着いてすぐに時計を確認する。……なんてこった。20時かよ。もう1時間も食事の時間に遅れている。

玄関を潜るとそこに待っていたのは、

「……随分遅かったわね。一体何処で何をしていたの?」

一見いつも通りの笑顔で話しかけてくるリリア。

最初の間に全ての感情が込められている気がして怖いです。

「ずっと待っていたんですよ？ 待たされるこちらの事も考えてください。もうお腹がペコペコです」

見るからに怒ってます、と言う感じのミリア。

ああ、頼む。頼むから俺の首筋から目を離してくれ。

「あら？ ねえ、ヒサト。この鎖骨にあるキスマークは一体何かしら？」

悪戯っぽく笑うシリア。……目が全く笑っていない。

「どうやら色々説明してもらった必要があるわね？」

いつもと変わらない口調でそう言って左腕を固めるリリア。

「聞かせてもらいますよ、色々だね」

絶対零度の声で話し、俺の右腕をロックするミリア。

「それに食事前の運動にもなるわね。さ、早く行きましょう？」

準備運動をしながらついてくるシリア。

「あ、待て、話すから待って……」

懇願虚しく、俺は屠殺場にドナドナされていった。そして、

「あんぎゃあああああああああああ……！！！！」

今日も断末魔の館から悲鳴が上がりましたとき。

……
ああ、
神様殺したい
……

魔境の掃除、しんどい。(前書き)

このあたりのやつは書いたのはもう1年以上前になるのかあ……
訂正しまくった。

魔境の掃除、しんどい。

こないだの日記：子供すら油断なら無い事が発覚した。なんてこ
たい。

事の始まりは、シリアの何てことはない一言だった。

「離れの掃除だあ？ 離れなんて何処にあるってんだ？」

「ああ、そつか。言ってなかったつけ。この館には少し外れた所に離れがあるのよ。で、皆が思い思いに使ってるから、なかなか手入れが出来ないって訳。アンタも離れを自由時間に使っていいから、その掃除をお願いね」

って訳で、俺は離れの掃除をすることになった。

ふっふっふ、自由時間になったら念願の1人でくつろげる空間が手に入るって訳だ。全く、ボロい仕事だ。

しかし、離れの掃除といっても何か特殊な施設があったら困るの
でまずはサバスに聞きに行くとしよう。

そう言う訳で、俺は死してなお頼れる執事幽霊、サバスに会いに
書斎の置くにある書庫に入った。

「おや、永和様。……執事服、お似合いですよ」

サバスは俺に恭しく一礼をした後そう言った。

ああ、気を遣ってくれているんだな。

だがその言葉とは裏腹に、視線に同情がこれでもかと言わんばかりにこもってるぞ。

はい？ こないだ私服を買ったんじゃないのかって？
実は私服を着て仕事をしてたんだが、

「ねえ、ヒサト君」

いつもと変わらずおっとりとした声でリリアが声をかけてきた。
後ろには、ミリアとシリアも居る。

「ん？ 3人揃って何だ？」

「言いづらいんですけど、執事服を着て仕事をしてくれませんか？」

実際はそんなに言いづらそうには見えないミリアだった。

……何か裏の意図が見えるような気がしないでもない。

そう、例えば、単に着せたいだけ、とか。違うか。

「……はあ？」

「執事服を着て仕事しろって言ったのよ」

シリアはきっぱり言い切ってくれる。

何を考えているのかさっぱり分からない。

「そりやまた何で？」

「「「何だか落ち着かないから（よゝ）（です）」「」」

見事にハモった。

「……際ですか」

……とまあ、こういうわけだ。

何か理不尽な気もしなくも無いが、下手に逆らったら処刑場直行なんで何も言わない。ヘタレとか言うな。

閑話休題。

「ところで、今日は如何なさいましたかな？」

「ああ、離れの掃除を任されたんだが、何か注意事項はあるか？」

俺がそう言うと突然サバスが固まった。

……な、何だ？

「ハナレハナレハナレソコニケバワタシハモマレヤカレノマサ
レクワレアラユルシウチノチワレカワヲワランアアアアアア
アアアアア……」

「だー！！ 落ち着け！！」

背広のうらに忍ばせておいた特殊なハリセンで錯乱しきったサバ

スをはたく。

これは幽霊に当たるようになっていゝもので、一応買っておいたものだ。まあ、早速使うことになったが。

「はっ、申し訳ございません、私とした事が取り乱してしまいました」

引つ叩いた瞬間、一瞬にしてサバスは復活した。
うん、良い効果だ。

「あゝ、大体今のでどんなところかは分かった。で、注意事項は？」

サバスはしばらく考えた後、真剣な顔をしてこゝのたまった。

「私めから言えるのはこれだけです。……自分の身を守ることを最優先にしてください」

……離れというのは何とも物騒な場所らしい。

それから離れの前の門に行つたんだが、まあ、凄いのなんのつてまず、それぞれに土地が塀で正方形に区分けされているんだが、その1つ1つが相当の広さがある。

それが、1つの大きな正方形を作るように並んでいて、その間に十字を描く様にして通路が通っている。

土地は4つなので丁度人数分だ。

最初に、荒れ放題になっている通路を掃除する。此処は掃き掃除

だけなんで結構簡単だ。

次はは誰の物でもない空いている離れから掃除するでしょう。入ってみると、中は割りと綺麗だった。

誰も使っていないが、つい最近までサバスが手入れをしていたのだろう。

中には広いベランダつきの一軒の家があつて、中には色々な物が揃っていた。

もしかすると此処は生前サバスが使っていたのかもしれないな。なら、ありがたく使わせてもらおう。

結局、最初の一軒は芝刈りと、自分のためのレイアウト変更で終わった。

さて、お次はリリアの土地を掃除しますかね。

* * * *

……あゝ、此処は何処だ？

いや、リリアの土地だってのは分かつてるぜ？ だがな……

門を開けたら目の前が密林だ、とはどういうことだ？

「あゝ、来た来たゝ。こっちよゝ。お庭の草取りを手伝って欲しいのよゝ」

中から長い金髪を邪魔にならないように結え作業着を着たリリアがほんわかとした笑顔で出迎えてくれた。

ちなみに、待たせていたのは片付ける時に持ち主の判断を仰ぐためだ。

とりあえず、現在の疑問をぶつけてみることにする。

「1つ質問。どうしたらこうなるんだ？」

「それはね、色々お花を育てたら、気が付いたらこうなつてたのよ」

……何を間違えたらこうなる。

花を植えてたら密林になるような状態って何だ？

「あ、そこ足元気をつけてね。下に酸が溜まってるから、落ちたら溶けちゃうわよ」

何と言う事の無いようにリリアはそう言う。

足元を良く見ると、一歩先には蔦で覆われた落とし穴があった。どうやら近くの植物が作ったらしい。

……俺、死ぬかもしれない。くわばらくわばら……

落とし穴を避けて進むと、突然足元を何かにすくわれ、天地が逆転した。見ると足に蔦が絡んでいた。

そして、蔦は大きく俺を振り回し始めた。

「うおおおおわあああああ！！！」

「あ、大変！！ えいつ！！！」

リリアが普段の言動からは想像もつかないような俊敏さで高枝切りバサミで蔦を切って救出してくれ、落ちてきた俺を受け止めた。……右腕に何か当たっているようだが、気にすると拙いので気にしない。

「気をつけてね、此処にはああいうお花が結構あるから。例えばあの花だったら火を噴いてくるわよ」

ギョツと俺を抱きしめながらさらりと重大な事を言っただけのリアさん。

入った奴全員殺す気が、この森は？

と言うより、何時まで俺は所謂お姫様抱っこの状態で居るんですかね？

執事服を着た男が作業を着た美女にお姫様だっこされている図。うむ、傍から見ればめっちゃシユールな絵になっていることだろう。

「……ふふふ」

リアは俺を抱きしめたままいつもの5割増しの、何やら悦に入った様な笑顔になっている。

……何だろう、とっても嫌な予感がする。
さ、さっさと抜け出そう。

「と、とりあえず下ろしてくれないか？ これじゃ作業に入れんのだが？」

「……良いわよ」

リアは渋々といった感じで俺を降ろした。

今の間は何だ、今の間は？

明らかに俺をあの状態からどうにかするつもりでいたな。

それが何かはわからんが、きつと俺がおもちゃになることには変わりあるまい。

……とりあえず、さっさと始めるとしよう。
終わった事は考えんようにしよう。

草取り自体は普通の作業なので、あまり苦労は無かった。
途中、何回か植物に襲われたが手にした鉈で撃退できた。

「これで終わりね。ありがと、お陰で随分楽だったわよ」
どうやら全部終わったようだ。さて、次はミリアの土地だな。

* * * * *

「なあ、俺帰って良いか？」

「駄目です。お掃除手伝ってくれるって約束でしたよね？ 約束
はちゃんと守ってもらいますよ？」

につこり笑いながら俺の腕を抱え込んでしっかりロックするミリアさん。

逃げ道はしっかり封鎖済みと言う訳だ。

んでまあ、ミリアのここに来ている訳だが御覧のように俺はもう
帰りたい。何故なら、

「それはそうだが、何でお前んとこの土地は迷宮と化してるんだ
？」

これがもう全てを物語っている。絶対に何かある。
で、ミリア曰く、

「こうでもしないと私が飼っているペット達が逃げちゃうんですよ」

と、これまた笑顔で言い切った。

そのこうでもしないとイケないペットがめっさ怖いんですがどうでしょうか？

俺は絶対に会いたくない。

「さあ、早く始めましょう？ 汚れている所だけ掃き掃除すれば良いので早く終わると思いますし」

「……ああ、始めよう。もうどうにでもなれコンチクショウ」

迷宮の中は当たり前だが複雑に入り組んでいて、天井がかなり高いところに鉄格子で作られている。道はそれなりに広い。

「あ、そうだ、そろそろ皆のご飯の時間ですね。先にご飯をあげに行きましょう」

思い出したようにぼんつと手を叩いてミリアはそう言った。

よお神様、俺に何か恨みでもあるのか？

俺が会いたくないって言ってる傍から会わなきゃならん理由を作りやがって。

餌と思われる肉塊を3つ持って憂鬱な気持ちで迷宮を歩く。

「ペロちゃん！！！！ 出ておいでー！！！！ ご飯ですよー！！！！」

名前を呼びながらミリアは迷宮の中を歩く。

ペロちゃんね。また可愛い名前だこと。
名前からすると犬だろうか？

「バウ、バウ！」「」

ん？ 鳴き声が3つ？ どう言うことだ？

「ペロちゃん！！！！ 出ておいでー！！！！」

「バウ！」「」

「は、はあああああ！？」

最後にミリアが名前を呼ぶと、曲がり角から勢いよくペロちゃん
なる生物が出てきた。

出てきたのは3つの首を持った犬だった。

……っというか、これじゃまるでケルベロスじゃねえか。

「な、なあ、ミリア。これ、ケルベロス？」

「正確にはケルベロスさんのひ孫さんに当たります。人懐っこく
て可愛いんですよ」

嬉しそうにミリアは俺にペロの紹介をする。

「バウバウ！」「」

そして、出された肉に食いつくペロ。あっという間に無くなった
な。

「『ウウ、バウ！』『』」

食べ終わったと同時に俺に気付いたようだ。こっちを威嚇している。

すると、ミリアはそれを窘めるようにこう言った。

「こら、この人は怖くないからそんな事しないの。あ、そうだ。少し遊んでもらいなさい」

……え。

「『バウ、バウッ！』『』」

ペロも、突然の一言に困惑しているようだ。

……言葉、分かるんだな。賢い。

「それじゃ、他の子にもご飯をあげて来ます。その間ペロと遊んであげてくださいね」

そう言うと、ミリアは三つ編みにした金色の髪を翻して迷宮に消えていった。

ああ、何て楽しそうに言うのだろうか。余程動物が好きなんだなでも、勘弁してください。こんなのと遊んでたら命が幾つあっても足りません。

「『』……『』」

3対の眼がじつと此方を見ている。

「……」

せめて恐怖に飲まれないように見つめ返す。内心冷や汗ダクダクだ。

こっちを見ながらゆっくりと近づいて来るペロ。そして次の瞬間走り出した。俺に向かつて。

もうにらみ合いなど無駄。大急ぎで回れ右して逃げる。

「バウバウバウ!!」「」

「う、うわあああああああ!!!!」

もう全速力、ヴァンパイアの身体能力をフル活用して逃げる。だが、それでもペロは優れた嗅覚で俺を捜し出し、追走を続ける。んで、しばらく逃げまくっていたんだが、

「げ、しくじった……」

そう、此処は迷宮。当然行き止まりがあるよな。

俺は見事に行き止まりに突っ込んだ訳だ。もう逃げ場は無い。

「バウバウ!!」「」

後ろからペロが走って来て、こっちに飛び掛ってきた。

……終わったな。全国の皆さんさようなら。俺はコイツの生体構成物質の一部となります。

ところが、次に感じたものは柔らかい肉の感触とべったりとした液体の感触だった。

まあ、要するに俺は舐め回されているわけだ。3つの頭から同時に。

「くくくバウバウ!! ハッ、ハッ」「」

どうやら本当に人懐っこい性格の様だ。

何だ、これなら別に逃げる必要なかったな。

……と、思っていたのが間違いだった。

「くくくクハ……」「」

「あ?」

次の瞬間、ペロは俺の上で寝ると言う暴挙に出た。

因みにペロの大きさはアフリカ象を1.5倍にした位の大きさ。めっさ重い。

「ぐきゅんんんんんんんんんんん!! つ、潰れるうんうんうんうん!!!!」

結局、俺はミリアに1時間後に救出されるまですっと重石を乗せられたサンドイッチな気分を味わったのであった、まる。

……気を取り直して最後、シリアの土地に行くとしよう。

あゝ、気が重い……

* * * *

さて、俺の体内時計は何百年か狂ってしまったようだ。

いや、自分でも何を言っているのかよく分かんが、とりあえず目の前に映った光景から判断するならそれが一番正しいと思う。

だって、今日の前に居るのは待ち合わせたシリアではなく、

「来客ヲ確認。照合完了、ゴ主人様カラ話八伺ッテオリマス。ヨウコソ、ヒサト様。」

……何、このロボット。

コイツだけじゃない、庭仕事も全部コイツと同じ型のロボットがやっている。

ロボットに付いて行くと、そこにはなにやら機械を弄ってるシリアが居た。

シリアはつなぎを着て、オイルまみれになりながらロボットの中を弄っていた。

「え、ヒサト？ もうそんな時間？ ちょっと待って、あと少しでコイツの修理が終わるから」

そう言ってロボットの中の配線を繋ぐシリア。

どうやら熱で切れていたらしく、その交換作業のようだ。

「よし、終わり。ふう、やっぱりコイツのメンテナンスはもつと念入りにしなきゃ駄目ね。もう一機増やしてお互いにさせるのも良いか」

作業が終わったらしく、晴れ晴れとした表情で思いっきり伸びをするシリア。

どうやら、かなりの長丁場だったようだ。

「そいつは何の機械なんだ？」

「ああ、これは此処で稼動しているロボットのメンテナンスや修理をするロボットよ。これが壊れたから今修理してたって訳」

……絶句。何で上2人に比べてシリアは此処までハイテクなのだろうか？

ロボットが部屋をこまめに掃除しているのか、部屋は至って綺麗だ。

「なあ、何処に掃除する必要性があるんだ？ ゴミどころかホコリ1つ見当たらんが？」

「掃除してもらうのはこっちよ。付いてきて」

シリアに案内されて付いて行くと、そこには化学実験室があった。うゝむ、素晴らしいと言うか、凄まじいと言うか。

物凄い量の試薬の量だ。実験用酵素やレアメタルと言うか未知の金属まであるのか。

惜しむらくは置いてある場所がバラバラ、と言うか使いっぱなしで使いづらいところだろうか。

「少し散らかってるけど、此処には金属腐食性の試薬もあるからロボットじゃ片付けられないの。だから手伝って欲しいのよ」

「ああ、良いぜ」

そんな訳で片付け開始。まずは試薬の分類をすることから始める
としよう。

ふむ、劇薬、毒薬はこっちにまとめて……

「や、やっと終わった……って言うか、試薬は使ったびにちゃんと仕舞えよな」

「うん……そうする……流石にこの量の試薬の整理は辛いわ……」

お互いに疲れきった声で受け答える。

何しろ、試薬の種類が多すぎるのだ。何だよ、棚50台分って。

試薬の分類だけでえらく時間が掛かったな。だが、やることはまだ終わらない。

「さて、次は廃液の処理だな」

「そうね。一応酸とアルカリには分けてあるから安心して」

「重金属系、ハロゲンはちゃんと分けたか？」

「あゝ、有害とその他には分けてなかったはず……」

俺の指摘に言いづらそうに眼を逸らしながら答えるシリア。
ぶっちゃけ、環境に対してハードすぎる。

「適当にも程があるだろ、おい……」

しばらくこうした化学トークをしながらどんどん片付けていく。

俺もこの手の作業はほぼ毎日やってたからもう手馴れたものだ。
気が付くと、全ての作業が終わっていた。

現在は、お互いに研究室であるにもかかわらず、床に大の字に寝そべっている。

一応床は掃除したから試薬の類は付着していない……と思っていたい。

「つ……疲れた……やっぱり掃除はこまめにしようぜ、シリア」

「そ……そうね……それにしてもアンタ結構詳しいじゃない」

「元々ほんの少しだがこういうことをやってたからな。ほんのかじりなら分かる」

俺がそう言っていると、シリアは少し考え込んだ。

「……ねえ、偶にで良いからアタシの実験の助手やってくれない？
ちゃんとお礼はするわよ？」

「……考えておこう」

……一体何の実験をするというのだろうか？

ほら、例えばその後ろのマンドレイクとかはどうするつもりなのだろうか？

しばらく休憩した後、化学実験室から出たところで突然シリアが思い出したように、

「あ、そうだ。屋根裏の配線も確認しなきゃいけないんだった」

と言い始めた。まだあんのか。

「やってくれるロボットは居ないのか？」

「今の段階じゃ重量が重過ぎて天井が落ちるわよ。さ、早いところ終わらせましょ？」

シリアについて行って天井裏に上ると、そこにはえらい量の配線があった。

どれくらいあるかと言えば、屋根裏全体隙間無く、更に「ちやちや」していると言えれば良いだろうか？

「……なんでこんなにケーブルだらけなんだ？」

「ケーブル通す場所が屋根裏くらいしか思いつかなかったのよ。はい、これが配線図よ。ちゃんとこの通りになってるか確認して」

貰った配線図はとても複雑だった。何しろケーブルの種類が半端無い。

えっと、これがこうでこれが……
そうやって配線を確認していると、

「うーん、これは合ってるわね、あとは……きゃあ!？」

「おわっ!？」

お互いの体がぶつかってケーブルの中に倒れこむ。

「あいたたたた……シリア、大丈夫か？」

「え、ええ。何とか怪我は無いわ……」

本当に何でもないように答えるシリア。
どうやら怪我はしていないらしい。
だが、

「問題なのはケーブルが俺たちを巻き込んで絡まったことか……」

「そうね……」

そう、今の俺達は密着した状態で完全に固定されている。

普通に前を向けば、お互いの顔の距離は10cmにも満たない。
首筋にはシリアの吐息が掛かっている。

どうしようか考えていると、首筋に痛みが走った。
見ると、シリアが俺の首筋に噛み付いていた。

「……シリア。今はそんな事している場合じゃないだろう？」

「……だってお腹が空いて我慢できなかったんですもの。アンタ
の血が美味すぎるのが悪い」

何という理不尽な返答だ。

コイツは少し正してやらねばなるまい。

「こら、俺に責任転嫁すうひゃあ!？」

苦言を言おうとしたが、シリアに耳を舐められあえなく沈黙する。

「口答えしないの(ペロペロ)。じゃないと、アンタの喘ぎ声録
音して町に流すわよ(チュッ)? もちろん血も全部頂くわ(コク
ッ)」

「うつ、くつ、そ、それは、ひうつ!？」

首や耳を連続で舐められ、血を吸われる。

駄目だ、どうも体が勝手に反応する。ええい、静まれ俺!!

「ふふふ……それそれ、もつとよ、もつと良い声で鳴いてみなさい。遠慮すること無いのよ?」

なんとも意地の悪い声でそう言いながら、必死でこらえようとす
る俺を容赦なく弄ぶシリア。

いつしか、手も俺のシャツの中を撫でまわし始めた。

「ぐっ、ぎっ……ふあっ!？」

「ふふん、そんなはしたない声出しちゃって……これは少しお仕
置きの必要ね……」

妖しい笑みを浮かべながら執拗に責め続けるシリア。

それも、どんどん過激になっていく。

俺は、ひたすらそれに耐える一方だった。

……ちくせう、このドSめ……今に見てやがれ。

「さて、存分に堪能したことだし、そろそろ抜けるとしますか。」

「ハア……ハア……さ、最初からそうしてくれ……」

しばらくして、俺はようやく解放された。

ああ、願わくばもう二度と離れの掃除はしたくないな。
……多分そうは行かないが。くそう。

魔境の掃除、しんどい。(後書き)

結局今回も永和君は気絶するのでした

休日……良い響きだ……（前書き）

太古の書き溜めを修正しながら投下中。

休日……良い響きだ……

こないだの日記：離れは何か色々魔境だった。ありえん。

今、俺の目の前には、パーティー用のドレスに身を包んだ3人がいる。

……ホント、黙ってりや文句なしなんだが。

「今日はちよつと私達は親戚のパーティーに呼ばれてるから、お留守番宜しくね？」

「あ、それから此処にお金を置いてくので足りないものがあつたら買い足しておいて下さい。」

「帰るのは夜遅くになると思っわ。アンタは連れて行けないけどお土産くらいは用意してあげるわ。」

「OK、わかった。んじゃまあ、行ってらっしゃい。」

そう言つと、3人はあらかじめ用意してあつたハイヤーで会場に向かった。

で、残された俺は1人でお留守番と相成つたのでした。

そう言つわけで今日は久々に1人でまったり過ごせそうだ。

サバスにお茶菓子の作り方を教わつたことだし、いっちょ作ってみるか。

さてと、足りないものは……材料色々足りねえな、おい。

はあ……仕方が無い、他の物も色々足りないことだし、買出しに出るとするか。

てな訳でツヴァイトスの町に到着。

さてと、まずは近くのスーパーで足りない日用雑貨を買おうと思う。

こういつ買出しは街に出られるようになってしょっちゅう行くから、もうこの町の何処に何があるかは大体分かる。

俺はスーパーで齒磨き粉と石鹸、小麦粉とバニラエッセンスを買って次に向かう。

次は紅茶を買うとしよう。

俺はこの間から通っている紅茶専門店、「Marionette Tearoom」に行くことにした。

「いらっしやい、ヒサトさん。今日は貴方の世界のダージリンに良い物が入っていますよ」

店の名前の通り、此処の店主は綺麗なマリオネットの女の人、ミストさん。

しかし、上にマリオネットの証である操り糸が無いと誰がどう見たって人間そのものだ。

一体何処の誰が作ったんだろうか？

「ふむ、たまには見知った味も良いか。それじゃあ、ダージリン

を150g下さい」

「ありがとうございます。……ところで、うちの人見てませんか？」

「ガストさんですか？ 見てませんよ」

因みにガストさんってのはこの人の夫のフランケンシュタインの名前だ。

まあ、フランケンシュタインって言っても見た目は頭に螺子の生えたナイスミドルのおっさんなんだが。

正直、こんな綺麗で優しい人（？）が奥さんで本当に羨ましいと思う。

「そうですか……全く、家の仕事をほっぽりだして何やってんだか……帰ったらじっくりお話を聞かないと……」

と、左手の掌を右手の拳で打つミストさん。豪快な音が店内に響く。

訂正、そこまで優しくは無さそうだ。まあ、ガストさんの自業自得だからしょうがない。

さて、紅茶も買ったし、帰って早速作るとしよう。

軽く鼻歌なんぞを歌いながら家路を辿る。

途中で子供に石をぶつけられて昇天なさった冒険家が居たが、些細な事だ。

「あつ、ヒサ兄だ!!」

パタパタと嬉しそうにこっちに走ってくるブロンドの髪もまぶしい天使の女の子。

……ああ、また大変な奴に見つかった。

逃げたいけど、逃げたら泣くしなあ。仕方が無い。

「……やあ、シルフィ。元気にしてたか？」

「うん！！　ねえ、お友達に紹介したいんだけど、良い？」

下から上目遣いに俺を見るシルフィ。

や、やめてくれ！！　そんな期待に満ちた眼で俺を見ないでくれ！！　断れなくなるじゃないか！！

「あ、ああ。良いぜ」

俺敗北。純真な眼には勝てません。orz

「やった！！　それじゃあこっち来て！！」

ぱあつと笑顔を咲かせて俺の手を引くシルフィ。

公園に着くと、そこには2人のシルフィと同年代であろう人影があった。

褐色の肌に深くかぶったフードから黒髪を覗かせるその人影は巨大な鎌を持っており、種族が何なのか一目でわかる。

「ヘルガちゃん、この人がさっき話してたヒサ兄だよ」

「……この人が？」

……それにしても天使に死神の組み合わせか。
死者を天国と地獄で取り合いをしていそうな組み合わせだな。

「紹介するね。死神のヘルガちゃんだよ」

「……ヘルガ・サーシエス」

死神の子供、ヘルガは一切表情を変えずに単調な挨拶をくれた。
一応自己紹介は済んだようだな。さて、俺はこれで……

「何処に行くの？ 一緒にあそぼ？」

シルフィが俺の腕にしがみ付いて無垢な瞳でジッと見つめてくる。
……もう良い。どうせ最初っから俺じゃ断れそうに無いだろうし
な。

「はあ、分かったよ。で、何するんだ？」

「うん、まだ決めてない。だから一緒に決めよう？」

「……ところで、彼がシルフィの好きな人？」

「うおわっ！！」

気が付くとヘルガが背後に居た。……頼むから気配なく後ろに立つな。気が付いたら首筋に鎌があるって暗殺者か己は。

しかし、その質問はこの位の子なら赤くなって否定するだ」

「うん。だって、初めて会ったときからずっと優しくかったし、具合が悪くなったら面倒見てくれたよ？」

と、満面の笑みでそう言って、腰にぎゅっと抱きついてくるシルフィさん。

……何ていうか、うん。随分と直球な人なんですね、シルフィって。

お陰でヘルガとやらはあまりの直球ぶりに呆けている。

……いや、ぶっちゃけ将来が楽しみな可愛さなだけどさ。何せ墮天使モードがあるからな……

「……名前」

ヘルガは下から無表情で俺の顔を覗き込んでそう言った。

……訊かれたからには名乗っておくか。

「栗生永和だ。今は執事なんてのをやってるがな」

「……1つ質問。その袋の中身は？」

ヘルガは俺の買い物袋の中身が気になるようだ。それにしても静かな奴だな。さっきからあんまり喋ってないし。

「ああ、こん中はシフォンケーキの材料だ。帰ってから作ろうと思ってるんだがね」

「え？ ケーキ作れるの、ヒサ兄？」

俺の話を聞いて興味深げに尋ねてくるシルフィ。

「作れるとも。良いコーチが居たから、それなりに食える味にはなってるはずだぞ？」

無論、コーチとはサバスのことだ。

いや、これがまたスパルタンなコーチなのだが、詳しい話は割愛させてもらおう。

「本当！？ それじゃ、今度私たちにも作って！！」

「……興味ある」

2人とも、ものすごく良い笑顔で思い思いに俺のケーキに思いを馳せる。

「ああ、機会があつたらな」

そう、機会があつたら。つまり機会を作らなければ関わる必要はな

——機会なら後日しつかり出来るから、今の内に覚悟しておいた方がいいぞ、ヒサト——

……要らんテレパシー飛ばすなりニア。少しは楽になりたかったんだい。

その後、しばらく2人と話をして、別れた。

途中でシルフィが頭痛を訴えた時は2人揃って大慌てした。

……やはりあれは周囲に被害をもたらす類の物らしい。

で、今度こそ帰り道を辿る。

途中、胴体だけ青い全身白タイツみたいな格好で頭にピンク色の球体が付いた人間が自分が置いた爆弾でお空の星になった。

……まあ、先週もあつたし、周りの人間も気にしていないから瑣末なことなのだろう。無視して帰ろう。
で、大通りを歩いていると、

「おう、ヒサト。今日は買い物か？」

と言う気だるげな声が聞こえてきた。

「ああ、少し足りないものがあつたからな。店番はいいのか、フアイス？」

俺に話しかけてきた男……フアイスはこの町の洋服屋の男物を取り扱っているやる気の無い店主だ。

まあ、マネージメントの腕は良いみたいだから、若いながらに上からの信用は高いらしい。

インキュバスなんだが、気に入った女性を完璧に口説き落としてから行為に至るといふ、紳士なんだかよく分らん奴だ。

まあ、おかげでコイツ自身は滅茶苦茶モテるんだが、俺はコイツがいつ後ろから刺されないか心配でならない。

「ん？ ああ、今はバイトに任せてある。俺は今日はもうあがりだぜ」

「……って言うか、今はまだ3時なんだが……」

「気にしない気にしない。折角だし、ちっと飲みにいこうぜ」

嬉々とした表情でそういつてのけるサボリ魔。
こいつが本当に店長で良いのか甚だ疑問である。

「はあ？　こんな時間からか？」

「……家に帰りたくないんだよ……」

一転、今にも泣きそうな顔をして俺を見るフェイス。
それは、俺に縋るような視線を送るようでもあった。

「……そうか。お前んとこの姉強烈だからな……だが、俺はまだ
仕事があるから喫茶店でいいか？」

「ああ、良いぜ。時間を潰せりや何処でも良い」

ところで、何で友人になったかと言うと、コイツが自分の身の上
を俺に話したからだ。

いや、コイツには姉が1人居るんだが……駄目だ、思い出したく
ない。この話はやめにしよう。

で、こっちはこっちで俺があ館で何回か悲惨な目に遭っている
のは有名な話な訳で。

今では俺の一番の理解者だな。って言うか、心の友？
さて、俺は今猛烈に言いたい事がある。

「……一つ良いか？　お前、少しくらい身だしなみに気をつけろ
よ。皮は良いんだ、それが無けりや女性の方から寄ってくるんじゃないか？」

フェイスの髪はボサボサであり、服もだらしなく着崩した恰好で

ある。

俺がそれを注意すると、フェイスは苦い顔をしていった。

「それが嫌なんだよ……俺は、この人って決めた人と以外はあんまり付き合いたくないんだよ。だから、本気でやばい時以外はこれで良いんだよ」

と、当然のようにそう言いきった。

……インキュバスのくせに。

さて、喫茶店「Relax Spot」に着いた。この店は最初にこの町に来た時以来、来る度大体寄っている俺のお気に入りのお店だ。

「いらつしやいませ!! あ、ヒサトにフェイスさん!! こんにちは〜す!!」

俺が店に入ると、長い茶髪のポニーテールの幽霊のウェイトレスが陽気に声をかけてきた。

「ち〜す。……もう少し声を抑えた方が良いんじゃないか?」

「よお、ポーラちゃん。相変わらず元気だな」

此処のウェイトレス、ポーラと俺はそれなりに仲が良い。

向こうがガンガン話しかけて来るし、ポーラの話は面白いから話すようになった。

そして、この店にはたまにもう1人の知り合いが居ることもある。

「おお、久しぶりだな、2人とも。今日は2人揃ってどうした？」

それがこの人、紅茶屋の放浪フランケン親父こと、ガストさん。親父と書いてダンディーと読む。

いつも趣味の良いスーツを着ていて、常に紳士的でいる事がダンディーたる所以だ。

店での担当は茶葉の仕入れだが、それを終わらせた瞬間煙のように店から消え失せる。

で、良い物が入ったときはこの店に茶葉を持ち込んでその味を存分に堪能して行ったりする。

因みに、俺とファイスとガストさんの3人で「家族に頭が上がる同盟」などというものが出来上がっている。

…… 全く持って不本意な話だが。

「どうでも良いけどよ、あんま仕事サボってつと奥さんからしかれんぜ？」

ファイスが自分の事を棚に上げてそんな事を言う。

「お前が言うな、ファイス。けどミストさん、ガストさんの事を搜してましたよ？」

俺が一言そう言うと、ガストさんの顔に大量の冷や汗が流れ出した。

「ははは。今日はどうするかね。この前ははこれを食べたから……」

超高速でメニューのページをめくるガストさん。

ただし、メニューは逆さまである。

もしも〜し、現実逃避しないで現実を見てくださ〜い。俺は見ないけどな。

そんなにあの温和なミストさんが怖いのだろうか？

「そういえば、今日の買い物はお前にしちゃ珍しい物があるじゃねえか。薄力粉に、ベーキングパウダー、紅茶に粉砂糖にバニラエッセンスって、ケーキでも作るつもりだったのか？」

今更、そんな事をのたまうサボリ魔。

「ああ、その通りだ。折角美味い紅茶が自宅で飲めるんだ、ならばそれに添えるお茶菓子も良いのを揃えたくなるものだろ？」

「買えば良いものを……」

「やかましい！！俺がそうしたいんだから良いだろうが！！」

ぼそつとファイスが漏らした一言を一蹴する。

ふう、これだから人の趣味を理解しない奴は困る。

1から10まで自分で準備してそれが美味かったときの達成感ときたらこれが……

「ほうほう、つまり断末魔の館に行けばヒサトの紅茶とケーキが食べられるって訳だね」

仕事中にもかかわらず、ケーキと言う単語に反応して横に張り付いて会話に加わるポーラ。

「……食いに来るつもりか、ポーラ」

「そりゃ、女の子ですもん。甘味があればそこに出向きたくなるって」

当然のことのようにポーラはそう言い切った。

……間違いなく俺の作ったケーキ目当てにわざわざ辺境にあるあの館まで行くのはアンタだけだと思う。

しかし、人の評価と言うものも気になるのは事実だし、どうしたものか。

「おや、どうやら満更でもないって顔だな。良かったな、ポーラさん」

「ふふふ、いつか食べに行くから期待して待ってるね!」

ポーラは満面の笑みでそう言った。

こりゃ何作るか考えておかないとな……

「はあ……仕方が無い、次までに何を作るか決めておこう」

「……素直じゃねえなあ……」

「黙れ!」

またしてもフェイスが余計な一言を口走ったので即刻カットする。

「あはははは。あ、お客さんが来たから行くね。いらっしやいませ!」

そう言うと、ポーラは駆け足で仕事に戻っていった。

さて、ポーラは仕事に戻ったことだし、紅茶をゆつくりと味わいましょうかね。

少しぬるくなった紅茶に口をつける。

うん、やはり美味しい紅茶は冷めてもしっかりと香りが立っている。これは何という茶葉を使っているのだろうか？

「それは私が新しく仕入れた茶葉でな、今はまだ店に置いていない茶葉だ。どうかね、ヒサト君？」

む、どうやら顔に出ていたようだ。尋ねようとしたことを先に答えられてしまった。

「美味しいですよ。ダージリンと比べると少し渋みが強いですが、それを補って余りある優しい風味が良いですね。何て言う茶葉なんですか？」

「えーっと、確かレリツシュって言う茶葉だったか。ヒサト君がそう言うならこれはほぼ当たりだな。よし、今度見つけたら大量に仕入れるでしょう」

凄く嬉しそうに話すガストさん。

……ああ、言いたくないなあ。

今後ろに凄く綺麗な笑顔を浮かべたミストさんが立ってるんだよね。

フェイスも遠い眼をしてるし。

そして、ゴスツと言う派手な音と共にガストさんの頭にミストさんの綺麗な踵落しが炸裂した。

……ミストさん、実は結構な格闘家かも知れない。

でも、その短い丈のスカートでやるのはどうかと思います。

……白、見えちゃった。（／＼／＼）

「うーおおお！？ ミ、ミストおお！？」

よっぽど痛かったのだろう、頭を抱えてのたうち回るガストさん。

「あゝなゝたゝ？ なゝんで、また店番放り出してウロウロしてるのかしら？」

笑顔のまま、怨嗟のこもった声でガストさんに詰め寄るミストさん。

おお、後ろに虎が見える！！ なんて迫力だ！！

フェイスは天を仰いでいる。……うん、お前は人事じゃないもんな。

「い、いや、それはだな、新しく仕入れた茶葉を試しに飲んでみよう……」

「そんな家で出来るじゃないの！！ さあ、家でしっかりと話をしましょうか！！」

必死で弁明をしようとするガストさんを、ミストさんは一蹴する。

「ま、待ってくれ！！ こゝ心の準備が……」

「つべこべ言わずに来なさい！！ 来ないなら……こつです！！」

次の瞬間、ガストさんにミストさんの神速のフランケンシュタインが決まった。

だからさ、何でわざわざその格好で目のやり場に困る技を使うかな。

……また見えちゃった（／＼／）

「……ウブだなあ……」

「……ほっとけ」

自覚はしてるんだ、黙れ。

そして、ミストさんは気絶したガストさんの襟首を掴んで引きずって帰っていった。お代はガストさんのツケだ。
ふと時計を見ると、時間は午後6時を回っていた。

「さてと、俺もそろそろ帰るかな。このままじゃ下手すりゃ姉貴にぶっ殺されるし。……ああ、帰りたくねえよ（泣）」

「……まあ、頑張れ。んじゃ、俺も帰るわ。またな」

代金を払い、マジ泣きしているフェイスと別れて家路に着く。
今度は寄り道をせず真っ直ぐ帰る。

あゝあ、結局作れずじまいだったな、ケーキ。

まあ、良しさ。また次の機会に作るとしよう。

そして、門の前に着いたと同時に、一台のリムジンが門の前に止まった。

運転手が降りてきて俺に一礼したので返す。心なしか運転手がやつれて見えたのは気のせいだろうか。

で、運転手がリムジンのドアを開けると……

「あゝ、ヒサト君らゝ。元気いゝ？」

「はぶう！？」

いきなりリリアがご機嫌な表情で飛び出して抱きついてきた。どうやら酒を飲んでいるようだ。

胸元が開いたドレスで俺の頭を抱え込むもんだから良い感じで窒息できる。

むぐぐ、この天国地獄は漫画とかでは良くあったがまさか俺が体感することになるうとは！！

「む、むぐぐっ！！」

「あ、あん、くすぐったいわよぉ」

少しもがくとリリアはあっさり俺の頭を放した。

ホッとしたのも束の間、次は、

「きゃはははは！！ あ、ヒサトであゝ、きゃはははは！！！！」

笑い死にするんじゃないだろうかと思うほど笑いながらシリアが出てきた。

「シ、シリア？ 大丈夫か？」

「あゝによゝ、私は酔ってないんだから、きゃはははは！！」

バシバシと俺の背中を叩きまくるシリア。めっさ痛い。

むっ、絡み酒とは性質が悪い。

「いただきますっす！！ はむっ！！」

「いてえっ！！！」

突然シリアが俺の首に欠片の容赦もなく噛み付いた。

「ん〜ちゅうちゅう……」

「あだだだだ……！！」

ずっと吸い続けるシリア。そんなに吸われると痛いつて！！

「ぷっはぁ〜！！ やっぱアンタの血が一番よ！！ きゃはははは
は！！！！」

「おわっ！？」

吸い終わった瞬間、シリアは俺を投げ捨てる。

……はぁ、本当に性質が悪い酔っ払いだ。
地面を転がりながらそう思っていると、

「ふふふ〜、ヒサトさぁん。だ〜いすき♪」

「んむ！？」

今度はミリアから情熱的なキスを受けた。

首に腕を回してすっかりロックされているから一瞬たりとも逃れられない。

「ん、ちゅ、はぁ、むっ……」

ミリアは俺の下唇を軽く吸ったり、舌を口の中に入れたりして俺の口の内外を蹂躪する。俺はもう成すがままだ。

な、長い……あゝ、頭に血が上るゝ！！

「んっ……ふう……ふふふゝ、これこれ。可愛いですよ、照れた顔」

事が済むと満足げにミリアはそうのたまった。

……ひょっとしてこの3人の中で一番性質が悪いのはミリアなんじゃないだろうか？

この絡み方は俺が知るなかでもトップクラスの性質の悪さだと思うぞ？

そしてとどめは、3人揃って俺にしなだれかかってきた。

「……今度は何だ？」

「「部屋まで運んで（ねゝ）（くださゝい）」」

三人は甘えた声で俺に向かってそう言ってきた。

……キレても良いよね、俺。

「この……酔っ払い共がああ！！！！」

結局、俺は3人まとめてその後の面倒を見る羽目になったとき。

でも今日は生命の危機が無かったただけまだマシか……
はあ………ついてるんだか、ついてないんだか………

休日……良い響きだ……（後書き）

この作品は一人称でやってるけど、一人称だと主人公の心理描写は完璧にできるけど、他のキャラの心理描写が上手く出来ないから難しいんですね……

かと言って一人称で利点はないのかと言われると、そういう訳じゃないし……

とにかく、過去の自分が残したこの難題、なんとか修正して良い評価がもらえるような作品にしてやろう。

と言う訳で、ご意見ご感想および評価のほどを宜しくお願いします。

リニアさんの講義―世界について―

おや、見ない顔だな。

……成程、お前は这个世界を遠くから見ている傍観者と言うわけだ。

ふむ、お前がこの世界で見ているのは……ああ、あの不運な男の話か。

お前名前は……そうか良い名前だな。私はリニア＝ミムスだ。――応魔女なんてものをやっている。

で、私と接触をしたって事は何か質問事項があると言うことで良いんだな。

さて、何について聞きたい？

……この世界についての詳しい説明、か。

そうだな、確かにあいつの時には簡単な説明しかしていなかったな。

それに、もしかしたらお前はそこに立ち会っていないかもしれないのか。

良いだろう、説明するでしょう。

まずはこの世界の位置づけだが、そもそもこの世界は他の世界と系統が違う。

世界樹、ユグドラシルを例にとって説明してやろう。あれが一番説明しやすい。

もっとも、私が知っているものとは違うのかもしれないがね。

ユグドラシルでは枝分かれした分だけの世界がある。もちろん、お前の居る世界もその中に含まれている。

それらの世界とは違う次元の世界が2つある。1つは天界、つまりユグドラシルの頂上。ここに居るのは上級の神ぐらいだ。どんな場所なのか想像もつかん。

そして、もう1つが混沌、つまり、全ての世界の要素を全部含んでいるユグドラシルの根元に当たる世界。我々はここに住んでいることになる。

全ての世界の要素を含んでいるのだから何が起きてもおかしくない。だから私のような魔女や天使に悪魔、それにお前達の言うところの怪物共が居てもそれが普通となっている。

発達した科学が流れ込んでくることもあれば、正反対の魔法文明が根を下ろしたりすることもある。

だが、1つだけ絶対に起こり得ない事がある。何だか分かるか？

誰もが一度は願うような望みだ。

……そうだ、死者を生き返らせることだ。これだけは例え混沌の中にあろうとも不可能だ。

生きているものは必ず死ぬ。まあ、この世界に居る連中はお前等の常識の範疇の生命力ではないがな。

さて、次はこの世界に居る連中はどうやってこの世界に来たのかを教えよう。

さっきも話した通り、この世界に居る連中は怪物その他人外が多いが、これについては世界間の移動について説明しなくてはならないな。

世界間の移動が起きるきっかけは多岐にわたる。

たまたま他の世界と繋がっていて巻き込まれたり、世界を渡れる連中に連れ攫われたり色々だが、最も多いのはその世界に適合でき

なくなつて排斥される場合だ。

ユグドラシルでは、上の方ほどその世界での適合条件が厳しい。そして、そのほとんどがその下の世界の条件を全て含んでいる。

つまり、世界から不適合と言われた奴はユグドラシルの枝から下に落とされることになる。

当然下の世界にも条件があり、その条件に1つでも合致しないとその世界への介入を拒まれる。

不適合となる理由だが、お前等の世界で言うなら人間が人間であることを放棄した場合、などは大体何処の世界でも排斥されるものだ。

既に存在している個体の種の改変など許されるはずが無いからな。また、本来存在するはずの無い蘇生した死者などもこれだな。

……何でそんな奴が居るのかつて？ 知らん、私の知り合いは残機がどうか訳の分からんことを言っていた。

話を戻そう。そして、適合できる世界が1つもなかった場合、この世界に落ちて来ることになる。

ああ、そうだ。私のように自ら望んで来る奴も居る。まあ、大体は迫害から逃げてきたものやただの物好きだがな。

それではその逆、この世界から上の世界へ行くにはどうするのか？

お前、木に登ったことはあるか？ 下りるのはまだ楽だが、下りただけ上るのはそれなりの労力を使うよな？

此処では世界単位でそれが適用される。つまり、上の世界に適合するようにしなければならぬと言っわけだ。

だが、そもそもそれが出来ないからこの世界に来た奴が殆どだ。

よつて、此処の住人はほとんどが自力では上の世界に行くことは出来ない。

もちろん例外も居る。

例えば神と天使と悪魔。彼らは世界を渡り歩いて仕事をしている。そして、下のほうの世界を担当している神達はこの世界を拠点にして働いている。

その理由はこの世界は他所の世界との行き来が楽だからだ。此処に戻るときに条件は無いのだから、勤務先の条件に合わせておけば殆ど苦勞することなく行き来できる。

もう1つの例外だが、自分が居た世界に呼び出される場合。これは私の知り合いなんかがそうだ。

間違はなくその世界の法則を破っているが、その世界にとってその者が必要な場合に呼び戻される事がある。

例外は他にもあるだろうが、一般人はそうも行かない。

だが、1つ方法がある。満月の夜に他の世界への道が開く。

他の世界に行きたければ行きたい世界を選んでその道を進めばその世界に行ける。

まあ、1日経てば不適合者として弾かれるがね。

ふむ、まあこの世界に関してはこんなところか。

今日は此処まで、お前の見ている物語の主人公が此処に来るからな。

また何か聞きたい事があつたら来るといい。

それでは、な――

買い物とはかくも苦痛の伴うものなり也？

こないだの日記：気が付けば俺の周りは愉快な人たちが揃っていた、無駄に。

今日は買い物に行くことになった。

いつもの俺なら自由だヒヤッハア！！　　なんだが、今日はそうも行かない。

その理由はまあ大体想像つくだろうが、

「あ、あの店寄っても良いですか、ヒサトさん？」

とまあ、今日はミリアの付き添いで街に来ている。

どうやら俺は荷物持ちに呼ばれたようだ。因みに現在手ぶらである。

ミリアに付き添っていく時はそこまで大荷物になることは無いから良い。

これが他の2人となると酷いんだ、これが。

「そうですね……これとこれ下さい」

ミリアが買ったのはそれなりにお値段のする肉の塊。ペロその他ペットの餌である。

1回に買う量が100kg単位なので流石にこれは郵送である。ぜひとも一部貰ってステーキにして食いたい。

「お待たせしました。それじゃ、次に行きましょう?。」

「その前に1つ質問。今日は何を買うんだ?。」

「ペロちゃんたちのブラッシング用のブラシが1本と、お洋服を少し見てみたいですね。」

少し考えてからミリアは欲しいものを挙げる。

その行き先を考えて俺は自分の顔が青ざめていくのを感じた。

「げ。……なあ、俺帰っていいか? 俺あの店近づきたくないんだが……。」

本気で勘弁してもらいたい。

その店の店員、碌なもんじゃないから。

「駄目ですよ。しっかり付き合ってもらいますからね。」

そんな俺の気持ちを知ってか知らずか、にこやかに笑ってしつかり俺の腕をロックするミリア。

ああ……なんて悪夢。よりもよってあの店に行くことになるのは……

「それじゃあ、まずはブラシを買う前に洋服を見に行きましょう?。」

俺の右腕をぐいぐい引つ張っていくミリア。

「や、やめろおおおお!!! 奴らにあつたら間違ひなく狩られる!!!」

必死に抵抗する俺。だがしかし、

「もう、うるさいですよ。あんまりうるさいところですよ!!」

「ふばばばばばばばば!!!!!!!!」

ミリアは何処から取り出したのかスタンガンを俺の腹に押し当ててきた。って言うか、何で持ってる？

ヴァンパイアになってから色々と耐久性は上がったからこの程度で失神することは無いが、全身痺れて力が入らん。

俺はそのまま洋品店にドナドナされていくことになった。

* * * * *

「いらっしやい。あら、今日は貴方も一緒なのね、ヒサト？ 随分久しぶりじゃない」

獲物を見つけたような視線で洋品店の店長は俺を見る。

……逃げたい。

「あれ、ヒサトさん、フォーリーナさんと知り合いなんですか？」

「……俺は二度と会いたくなかったけどな……」

俺がこの洋品店のオーナー、フォーリーナを苦手とする理由は多々ある。

まず、素肌の上にYシャツを着て、そのうえボタンを空けまくっ

たりするのは止めてください、貴女のスタイルでそれをやると滅茶苦茶危険です。

どんなスタイルか言つと、89、58、89と言えはお分かりだろうか。因みに、リリアはその上を行っている。

え、何で知ってるのかつて？ そりゃ本人が思いつきりぶつちやけたからだ。

それからこの人、ファイスの姉である。つまり、サキュバスだ。

……うう、初めて遭った時の事を思い出す……

―回想中―

あれはとある俺の休日だった。

俺は1人で街中をウロウロしていた。すると、目の前にいきなりファイスがやってきて、

「よう、ヒサト。悪いが、うちに来てくれないか？」

と言い出した。表面上平静を保っているようだが、額からは大量の冷や汗と、申し訳なさ全開の表情を作っていた。

「……まあ、良いけどよ」

俺はファイスが何か困っているようなので何とかしてやろうと思ひ、それを承諾した。

……ああ、此処で断つて置けばよかったと今でも思う。

「そうか、恩に着るぜ。それじゃ案内する。こっちだ」

で、ファイスに連れられて奴の家に行ったわけだ。

奴の家はそれなりに大きな家で、聞くところによるとファイスが訳あって資産家の女性を落とした時に、半ば押し付けられる形で貰ったものらしい。

俺が世の中の不公平さ具合に呆然としていると、

「お帰りなさい、ファイス。その子がヒサト？」

下着にYシャツ一枚と言う素晴らしく淒まじい格好で出迎えてくれたわけだ。

もう即座に眼をそらしたね、俺は。

ヘタレっていうな。

「姉貴、頼むからもう少し何か着ててくれ！！　一応客だぞ、ヒサトは！！」

「いいじゃないのよ、自分の家なんだし。それに私の裸見た人なんて大勢居るわよ？」

「そう言う問題じゃねえ！！」

玄関先で言いあう二人。

……なんてぶっ飛んだ会話だ。ついて行けん。

つかファイス、一応とは何だ、一応とは？

とりあえず、彼女のことは直視できなかったので天を仰ぐようにしていた。

「まあ、お客さんって言うんならそこで待たせるのもあれだし、とりあえず上がってらっしゃいな」

「あ、はい。お邪魔します」

で、はにかむような笑顔と共にそう言われて家の中に入ったわけだ。

「……自分でヒサトを呼ぶよう俺を脅迫してたくせに……」

ファイスが小声で何か言っていたようだが俺は気にしなかった。敗因その1。

で、応接間に通されるとフォリーナが話しかけてきた。

「始めまして、フォリーナと言います。うちの弟がお世話になってます」

「あ、栗生永和といいます。弟さんにお世話になってます」

それから自己紹介をしてしばらく話したが、その時点では気さくな良いお姉さんだった。そう、その時点では。

「あ、お茶を淹れてくるから少し待ってて貰える？」

「あ、はい。何か手伝いましょうか？」

「ああ、1人でやるから大丈夫よ。座って待ってて頂戴」

そう言ってフォリーナが席を立った。

それからしばらく待ったが、なかなか戻ってこなかった。

お湯から沸かして紅茶を淹れるにしても時間が掛かりすぎだなと思った頃、

「お待たせ、少し遅くなっちゃったわね」

フォリーナは苦笑いしながら戻ってきた。

お盆の上にはアイステイーが乗っていて、それが俺の目の前に置かれた。

「あ、ありがとうございます」

「そんなに畏まらなくても良いわよ。私はあんまり敬語は好きじゃないから、普通にタメ口聞いてもらった方が嬉しいわ」

俺が敬語を使っていると、フォリーナは苦笑しながらそう言った。

「そうか。なら遠慮は要らないな。これで良いか？」

「良いわよ。ああ、それからその口調で話すんなら私のことは呼び捨てで呼んで欲しいわ。私も貴方をヒサトって呼ぶから」

何も知らない俺は、不覚にも綺麗に笑いながら話すフォリーナに見惚れてしまったものだ。

そのエメラルドグリーンの瞳に吸い込まれそうになる。

成程、これが異性に効果を発揮するサキュバスやインキュバスの魔力か。そりゃ、ファイスもモテるわな。

……等と考えていたから「その方が燃えるから」と言うフォリーナの言葉の意味を考えなかったんだよな。敗因その2。

少し喉が渴いたのでアイステイーを一口飲む。

最近は夏が近づいてきていて暑かったのでその冷たさが心地よく、アイステイーも少し苦味が強いがとても美味かった。

……これが罾と気付けなかったのも敗因となった訳だが。敗因その3。

しばらくすると、体が痺れると同時に何やら妙な感覚が全身を走った。体が熱を持ち、呼吸が上がる。

「ふふふ、漸く効いて来たわね……」

声がしたほうを向いて見るとそこには眼を妖しく光らせ、妖艶に笑うフォリーナが居た。

どうやらさっきのアイスティーに何か仕込んでいたらしい。

「く、何を俺に飲ませた？」

「痺れ薬と媚薬だったかしら？」

フォリーナは悪びれた様子もなく、悪戯が成功した子供のような笑みを浮かべて俺にそう言った。

「な、何故そんな事を……」

「前々からファイスと一緒に居るのを見ていたし、良く話をされるから気になっていたのよ。見た目もそれなりに可愛いしね。だからサキユバスらしいアプローチを試してみたって訳」

「うつ……」

俺の頬を撫でながらフォリーナは話し続ける。
神経が過敏になっていて、些細なことでも辛い。

冗談じゃない。俺は救いを求めてファイスを呼ぼうとしたが、

「ああ、ファイスなら外に居るわよ？ でも、助けには来れそうにないわね。何なら、見てみる？」

言うなりフォリーナは俺を抱き上げ、庭が見渡せる部屋に運び込んだ。フォリーナの部屋である。

そして、俺が窓から見たものは……

「ファ、ファイスー！！！！」

そう叫んでしまったのも仕方がないと思う。

何故なら、ファイスは頭から流血した状態で十字架に貼り付けられていたからだ。

実の弟に何と言う酷い仕打ちをするのだ、この姉は！？

「ね？ 助けに来れそうにないでしょう？ まあ、安心しなさいな。あれくらいじゃ死なないわよ」

笑いながらフォリーナはそう言い、俺をベッドの上に横たえ、上に覆いかぶさってきた。

逃げようにも、痺れ薬が効いていて動けない。それに媚薬の効果も洒落にならない。

腹の上でぐにぐにと動く双丘の感触に俺の精神にひびが入りかける。

「ねえ、私の名前を呼んでくれる？」

甘えるような声で俺の胸に頬を摺り寄せながらフォリーナがそう言ってきた。

フォリーナからは甘い匂いが漂っていて、ただでさえ麻痺している思考が余計に働かなくなる。

「な、何をいきなり、はう！？」

「良いから、呼んでみて？」

俺が問い返そうとすると、今度は首筋に触れるだけのキスをした後に耳元で囁くようにそう言った。

首筋へのキスや耳に掛る吐息で背中に電流が流れるような鮮烈な感覚が走る。

やばい、こんなのを繰り返されたら狂う。

逆らうと大変なことになりそうだったので素直に従うことにした。

「フォ、フォリーナ……うつ！？」

すると今度はペロリと舐めて甘ったるい声で一言、

「もっと、はつきり呼んで？」

と言ってきた。媚薬のせいでかなり神経が過敏になっているようで、些細なことでも反応してしまう。

この状況では気恥ずかしいが仕方がない。1回深呼吸して、落ち着いてから言うでしょう。

「フォリーナ」

すると、今度はウツトリとした顔で笑って、唇にキスをして、

「フフフ、合格。これからはそう呼んでね？ それじゃあ、始め

ましよう?。」

と言って、フォリーナは俺の服に手を

——おっと、お楽しみの傍観者の諸君には悪いが、此处から先は検閲させてもらうよ。そう言うのが見たければ他の場所を当たることをお勧めする——

ありがとう、リニア。お陰で黒歴史を深く思い出さなくて済む。

とまあ、こんな事があつたのだ。お陰で俺はこの人がトラウマになつたと言つわけだ。

ついでに言うと、その後も何回かファイスに（涙ながらに説得された後）拉致られて大変な事になった。

「この間は良かったわよ。ねえ、また家に来ないかしら? またあの可愛い声が聞きたいわ」

「冗談じゃない。むざむざ「あ、分かります!! 可愛いですよね、あの声と表情!!」……」

フォリーナの一言に全力で乗っかるミリアさん。
ブルータス、お前もか。

おまいら揃いも揃って何つつー趣味嗜好をしてるんだ。

「とにかく、俺は行かないからな」

俺がそう言うと、フォリーナは不満げな顔をした。

「何よ、つれないわね。大体あの時は何だかんだ言って結構楽しんでたじゃない。無抵抗だったし」

「痺れ薬を飲まされてりや誰だつて無抵抗だろうが!!」

「でも、少なくとも嫌じゃない様に見えたわよ？」

…… 2人の視線が痛い。

仕方ねえだろ、俺だつて男なんだからよ。

俺は店の外で大人しくしてるか。

しばらく待っていると、ミリアが洋服を選び終わったようだが、一向に出てくる気配がない。どうしたのだろうか。店の中に入っていると、ミリアとフォリーナが真剣に何やら話をしていた。

「あ、ヒサトさん。丁度いい所に」

「少しこつちに来て欲しいんだけど、良いかしら？」

大真面目な顔で2人は俺を呼んだ。

何だ？ 何で俺が出てくるんだ？

あの真剣な表情だ、きつと何か大事な話に違いない。

近くに行つて見ると、フォリーナが俺を採寸し始めた。

全くもって訳が分からない。何で俺を採寸するんだろうか？

「OK、いいわよ。それにしても、細いわよね。どうしたらそうなるのかしら？」

「ん？ ああ、それは鍛えることで体が細く見えるように見える筋肉があつてだな。そこを鍛えると細く見えるらしい」

これは本当のことだ。例を挙げるなら上腕三頭筋が良い例だ。此処を鍛えると腕が細くなる。

「そうなんですか。あ、それからもう1つ確認いいですか？」

「忘れてたわ、私も確認したかったことがあるのよ」

「ん？ 何だ？」

そう言うと2人は俺の肩を掴んで、両側から俺の首を舐めた。全身をぞくぞくとした感覚が走り、思わずその場にしゃがみこむ。

「うくう！？ いきなり何をする！？」

俺が全力で抗議すると2人は、

「あ、やっぱりですね」

「本当にヒサトは首筋が弱いわね」

等とすっきりした表情でそう仰った。

……ああ、俺はこの2人から全力で逃げたい。

——いや、全く持って気の毒だがお前がその2人から縁を切るのはお前が天界に行くのよりも厳しい……というのは言いすぎだが、そう言いたくなるほど難しいぞ？——

……ありがとよ、リニア。今度は見事に俺をどん底に突き落としてくれたな。

とにかく、買い物が終わったので次の店に行くことにした。

* * * *

次にやってきたのはペットショップ。

「いらつしゃいませ。お、ヒサトじゃん。ああ、そうか。ミリアんところで執事やってるんだっけ」

店に入ると青白い髪の毛を後ろで束ねた少し背の高めの女性が俺に声をかけてくる。

その表情は何か面白いものを見つけた表情をしていた。

「あれ？ シアンとも知り合いなんですか？」

「……ああ、コイツと会ったびに酷い目に遭うけどな……」

此処のバイトのシアンは人狼で、普段は人間と変わらんが、青白

い毛並みの狼になれるのが特徴だ。

コイツとの出会いは凄まじいものだった。

―回想中―

あれは別の休みの日の事だった。

俺はその日、ガストさんから新しい紅茶を入荷したと言う知らせを聞いて嬉々として喫茶店に向かっていた。

そしたら、柄の悪い連中が3人ほど前に出てきて、

「よう、兄ちゃん。お前、あの屋敷の執事だな？　ちょっと来てもらおうか？」

等と言う訳の分からない戯言をのたまった。どうしようか思案している、

「ちょっとアンタ等、3人がかりで何してんだ？」

とシアンが現れた。……決して駄洒落を言っているわけではない。

「何だ、お前。……へえ、上玉じゃねえか。俺たちと遊びたいってか？」

「まあ、そう言うところだね。そりゃあ!!」

「ぐあっ!？」

シアンは涼しい顔でそう言うなり突然下品な笑みを浮かべた男の

1人にとび蹴りを放った。

その一撃を受けた男は派手に吹き飛び、背後の壁に当たって崩れ落ちた。

あーあ、それじゃ正当防衛にならないじゃないか等と考えていると、

「くそっ!!」

等と考えていると、俺を誘拐しようとしていた奴が掴みかかってきたんで、

「ほいつ」

「うおわ!？」

と、相手の右手を左手で取って、鳩尾にひじを入れ、軽く投げてやった。

いやゝ、合気道って強いわ、やっぱ。俺のはもどきだけだな。

「ぎゃああ!!」

「は、雑魚が。出直して来な!!」

向こうも残り1人を完璧に伸ばしたみたいだ。

手をパンツと叩きながらこちらに向かって歩いて来る。

「怪我は無いか? ……て、その様子じゃ無さそうだな。おや? コイツこの辺りを荒らしまわっていた集団のリーダーじゃないか」

興味津々と言った表情で倒れている男の顔を覗き込むシアン。

そうなのか？ まあ、向こうも相手がひょろいと思って油断してたんだろう。

……何だか途轍もなく嫌な予感がする。

「なあ、アンタ……アタシと一戦どう？ 久々に強い相手とやれそうなんだ、いいだろう？」

突然ギラギラとした眼で笑いながら俺を見てくるシアン。
なに、この戦闘狂？ 何で相手が俺なんだ！？
じりじりと近づいて来る戦馬鹿。

「待て、何で俺がアンタと勝負せにやなんのだ！？」

「問答……無用！！！」

「わーっ！！！」

その後、俺はシアンの攻撃を受け流しながら町中を逃げ回る羽目になったと言うわけだ。

で、お互いの体力が尽きた頃に強制的に自己紹介をさせられて別れたんだが……

それ以来、街中でコイツに見つかるたびに追い掛け回されることになったと言うわけだ。

- 回想終了 -

「次こそアンタに一撃加えてやるからな。覚悟しとけよ」

ギラギラとした金色の眼で俺を見ながらそんなことをのたまうシアンに俺は頭を抱える。

「勘弁してくれ……あんな馬鹿力でまともに喰らったら俺木っ端微塵だぞ……」

「そりゃ大げさだ……って、誰が馬鹿力だって!？」

俺に掴み掛って食ってかかるシアン。

そりゃお前、鉄筋コンクリートのビルディングに素手で穴をあけるとか馬鹿力以外の何でもないだろうがよ。

「ははは……ところでシアン。あのブラシ、届きました？」

「ああ、届いてるよ。待ってな、今持ってくる」

軽く引きつった様な笑みを浮かべてミリアがそう言うと、シアンは奥に引っ込んでいった。

しばらくして、デッキブラシ並みにでかいブラシを持ってシアンが戻ってきた。

「ほい、これが注文の品だよ。ちっ、今がバイト中じゃなければな……」

恨めしそうに俺を見るシアン。

俺はバイト中で本つつ当に良かったと思っている。

さて、買うものも買ったし、サッサとずらかるとしよう。

* * * *

館までの帰り道に大通りを通って帰る。

途中で全身青タイツ見たいな格好で腕が銃みたいになってる男がイガ栗を踏んで爆散していたが気にしてはいけない。

本当は公園前の細道を通った方が近道なんだが、先の2人との会話で精神をすり減らしすぎた。

今、シルフィ達の相手をしたら間違いなく力尽きるだろう。しばらく大通りを歩いていると、

「こんにちは、ミリアさん。……お隣の男性はどなたですか？」

ミリアの知り合いと思いき小豆色の単ひとえを纏った女性が話しかけてきた。

長くて艶やかな黒髪と穏やかで優しい光をたたえた黒い瞳が印象的だ。

「こんにちは、ユキちゃん。彼が前に話した家で執事をしてもらってる人ですよ」

「栗生永和と申します。以後お見知りおきを」

「そうなんですか。始めまして、東雲雪乃しののゆきのと申します。ミリアさんにはお世話になってます」

恭しく礼をする雪乃さん。

何というか、今まで居なかったタイプの人だ。

結構なお嬢様なのであろう、動きが洗練されている気がする。でも、彼女は何で此処に居るんだろうか？

普通の人間がここにいる訳は無いのだが……

「ミリアさんはお買い物の帰りですか？」

「ええ、洋服とペット用のブラシを買いにいったんですよ。ユキちゃんはどうしたんですか？」

「これから夕御飯のお買い物です。今日は里芋の煮つけと焼き魚にしようと思ってます」

にこやかに微笑みながらそう語る雪乃さん。
うゝむ、実に家庭的な人だ。

「女の1人暮らしは大変じゃないですか？」

「そうでもないですよ。周りの人も良くしてくれてますし、生活にも問題はないです」

朗らかに笑いながら話す雪乃さん。
ふむ、今の話から察するに最近越してきたみたいだな。

「何か困った事があつたら言ってくださいね。すぐに私かヒサトさんが相談に乗りますから」

ミリアさんの発言に思わず硬直する俺。
はい？ 何でいきなり俺に振るのか？

「分かりました。それじゃ、とりあえず魚が安い店とか教えてもらえると嬉しいんですが……」

少し言いづらそうに雪乃さんは話す。
どうやら、人と話す事にあまり慣れていないらしい。

「ヒサトさん、分かりますか？」

ミリアが俺に確認する。

一応知っている。何故なら俺はヴァンパイアになったものの、未だに普通の飯の味が忘れられなくて、自分で作って食っているからだ。

材料費は自前なので、なるべく安くて良いものを買うべく、まず店を選ぶところから始めている。

レシピは本屋やネットで調べて、調理法は自分で工夫して作る。そうして出来た料理が美味かった時の満足感がたまらない。

今はこれが俺の楽しみにまでなっている。
血と違って、ちゃんと腹も膨れるしな。

……俺はいつから主夫になったのだろう。

「一応分かります。此方です」

若干心に傷を負いながらも俺が案内したのは、八百屋、魚屋、肉屋である。

調味料は卸問屋に頼っても良いが、流石にそこまですることはないだろう。

それぞれの問屋に行く交通費を考えるとスーパーで買ったほうが安くつくしな。

「ありがとうございます。此処までしてくれるなんて良い人ですね」

笑顔で雪乃さんは俺に向かってそう言う。
そう言うことを面と向かって言われると少し参る。

「いえ、頼まれた事をしただけですし……」

俺は雪乃さんから視線を切った。

そして、その先には良い笑顔でこっちを見るミリアの姿が。

……こっち見んな。

「くすくす、照れてますね。でも、どうしてこんなこと知ってたんですか？」

必要無いのに何で、と言うようにミリアは俺に尋ねてきた。

「町に良く買い物に行ってますから」

……数少ない楽しみを邪魔されてたまるか。
適当な答えでお茶を濁す。

「それでは私はこれで、……クシュン!!」

雪乃さんがくしゃみをした瞬間、俺の周囲が瞬時に冷凍された。
わぁ、周りがきらきらと光って綺麗だな。

……現実逃避はやめよう、冷凍されているのは俺自身である。
漫画のような氷漬け状態だ。

そうか、彼女は雪女だったのか。

氷の外で何か大騒ぎしているみたいだがもうどうでも良い。
俺の意識は窒息すると共に順調に落ちていった。

ああ、今日もまた生命の危機だ。ついてねえな。

買い物とはかくも苦痛の伴うものなり也？（後書き）

ツヴァイトスの街の愉快な者ども。
大本からかなり加筆修正したなあ。

……うん、精進せにや。

ご意見ご感想お待ちしております。

へーんしん!!したくはなかったが。(前書き)

そんなこんなでタグ追加。

へ〜んしん！！……・したくはなかったが。

こないだの日記：困っていた人を助けたら冷凍された。いや、何を（ry。

私が見ているのは鏡です。

鏡には銀色の長い髪で、リリアさん程ではないけれど、結構スタイルの良い体で、少なくとも10人中9人が可愛いと思うかもしれない顔立ちの女性がいます。

眼は真っ赤なのでヴァンパイアであることは変わらないみたいです。

……どうしてこうなっちゃったんでしょう？ まあ、理由は分かっているんですが……

あ、信じてもらえないかもしれませんが、私、栗生永和です。

え、話し方まで違うって？

そ、そんな事言われたって仕方ないじゃないですか〜！！

何故か分からないんですけど自然とこんな風に考えちゃうんですから仕方ないですよ〜！！

——ふむ、何やら面白……もとい、大変なことになっているな。よし、今回だけが、本来の考えを（）内に記されるようにしておこう。まあ、頑張ってくれ。私はお前達の言動を楽しく見守っておいてやるう——

ありがとうございます。これで何とか信じてもらえそうです！！
（おい、本音が混じってるぞ、本音が！！……だが、お陰で信じてもらえそうだな。ところで、（）って何だ？）

えっと……まずはどうしてこうなったか説明しないといけませんね。

（とりあえず、何でこうなったか説明するでしょう）

あれは2時間前、シリアさんに呼ばれて彼女の研究室に行ったんです。

（あれは2時間前、シリアに強制連行を言い渡されて引きずられながらあいつの研究室に行ったんだ）

それで、そこで片づけを手伝うことになったんです。

（でもって、あいつが研究してる中、1人で混沌とした研究室を掃除させられたんだよな）

掃除が終わると、シリアさんが、「お疲れ様、これでも飲んで元気だして」と言っ、水の入ったペットボトルを渡してくれたんです。

（掃除が終わるとシリアは、「アンタ、この間これ忘れてるわよ。ちゃんと持っていきなさい」と言っ、ペットボトルを俺に投げた）

で、この離れに戻ってから少し喉が渴いたので、この水を飲んだ

んです。

（で、この離れに戻ってから少し喉が渴いたんで、この水を飲んだ訳だ）

すると、何だかモヤッとなった後、パアーツとなったんです。それで、気が付いたらこんな身体に……

（すると、突然視界が霞んで、体が弾けるような感覚を覚えた。で、気が付いたらこの身体）

何かがおかしな気がしますけど……大丈夫ですね？ 少し脚色しましたけど。

（だあゝ！！俺はアホの子か！？全然違うじゃねえか！！脚色しすぎだ！！）

そう言うわけで、今とっても困っています。皆さんお出かけ中ですし……

（……何はともあれ、今これ以上なく困っている。全員買い物に行ってるしな……）

とりあえず、分かったことは私は本来よりポジティブな性格みたいです。

（とりあえず、今の俺はいつもより世界が明るく見えているようだ）

つとと。そんなことよりお掃除しないと。もしサボったとか思われちゃいますととってもキツイお仕置きが待ってますからね。

（はあ……まずは掃除すっかね。サボったとか思われるとまたミ

イラにされる)

あ、CDを見つけました!! え〜と、「G線上のアリア」ですね。

(お、CD? 「G線上のアリア」とはまた珍しいな)

これを聴きながら掃除をすればきっと気分も良いですね。えっと、プレーヤーにセットしてと♪

(ふむ、久々に聴いてみるのも悪くない。プレーヤーが確かこっちにあったよな)

♪♪♪

う〜ん、やっぱり音楽はいいです。心が和みます♪

(うむ、やはり音楽は良い。心が癒される……しかし、考えることは微妙に違うが、することは同じなのか)

さあ、和んだところでお掃除に戻りましょう。これは後でも聞けますしね。

(っと、こいつは後でゆっくり聞くとしよう。その前に掃除だ)

花瓶の周りのホコリをはたきで取り……あっ!!

(さて、花瓶の周りのホコリをはたきで……な!!)

ガッシャーン!! と音を立てて花瓶が割れました。箒を持ってきて破片を集めます。……あう、これ幾らするんでしょうか……(盛大に音を立てて花瓶が割れた。仕方がない、箒を持って来るか。はあ……コイツ幾らするんだか……)

気を取り直して反対側の花瓶の台をはたきます。パタパタ……あ

あつ！！　お願い、間に合って！！

（まあ、割ってしまったものは仕方がない。次に行くか。……う
おっ！！　ちつ、間に合え！！）

また花瓶が落ちそうになったので、スライディングキャッチしま
した。キャッチ成功、花瓶は無事です♪

（危ねえ、危ねえ。また落とすところだった。スライディングが
間に合ってよかった……）

花瓶を戻して……ふう、これでよし♪

（やれやれ……今日は調子が悪いな）

次は、額縁の水コリを落とします。今度は落とさないように……
きやあ！？

（次は額縁か。幾らなんでもコイツを落とすことはないと思うが
……おわっ！？）

……うう、濡れ雑巾で滑ってお飾りの甲冑に突っ込んだじゃいま
した……　とつても痛いです……　血も結構出ちゃいましたし、手当て
をして着替えないと……

（……　なんで濡れ雑巾が落ちてんだ？　お陰で倒れてきた甲冑の
剣が俺の腹に深々と刺さってんだが？　……　とりあえず、手当てと
着替えだな……）

自分の部屋に戻って着替えます。身長はそんなに変わってないの
でいつもの執事服で大丈夫そうです。

（部屋に戻って着替える。多少縮みはしたが、それほど身長は変
わってないのでいつもの執事服でOKだ。身長？　うるせー、どう
せ俺の身長は170cmねえよ）

あ、あれ？ 執事服がありませんよ？ …… あつ、良く考えたら今全部修繕中なのでした……

（ん？ いつもの服が無いな。 ああ、そうか。 全部修繕中なんだった。 …… 何かあると破けるんだよな、心臓打ち抜かれたり、ペロの爪が引つかかったり）

何か代わりの服は……… ありました！！ …… えっと、今なら大丈夫ですよ、メイド服。

（代わりの服は……… メイド服？ …… うぐぐ、血まみれの服で客に應對するわけにはいかん。 今なら問題もないし止むを得んか）

何かいつもと違うのでちよっぴり複雑な気分で着替えます。 胸の辺りが少しきついですけど、見た目は大丈夫ですね。

（めっさ複雑な気分で着替える。 具体的には色々な喪失感とか、喪失感やら。 あと、胸の辺りの圧迫感やら。 因みにブラは無かった）

それにしても、何だか使う包帯の量がいつもより少ないですね。 少し得した気分です。

（それにしても、随分とウエストが細いな。 …… 自分の身体に見惚れるとかどうなのよ、俺……）

はあ、何だか今日は失敗だらけです。 少し休んで落ち着きましょう。

（ったく、今日はどうしたってんだ俺は？ …… 少し休むか）

さっきのCDプレイヤーの所に行ってまた「G線上のアリア」を聴くことにします。

（さっきのプレイヤーで「G線上のアリア」を聴くとしよう）

♪
♪
♪

心地の良いオーケストラの音が響き渡ります。

（心地の良いオーケストラの音が心に沁みいる）

……よし、元気だして、お掃除再開です♪

（……さて、もういいだろう。しかし、我ながら随分と早い立ち直り方だな）

散らかった甲冑を片付けて、飛び散った血を拭きます。メイド服
つて、意外と動きやすいんですね。

（散らかった甲冑を片付け、広がった血を拭く。しかし、作業服
だけあって動きやすいな、この服）

何だか今日は割れ物や危険なものを扱うと大変なことになりそう
なので、広間の掃除は中止して書斎のそうじにしましょう。

（……今日は割れ物とかは駄目そうだな。書斎の掃除にするか）

書斎に行くと、机の上には本の塔が出来ていました。……ミリア
さん、読んだらちゃんと後片付けをしてください。

（書斎の机には本の塔が出来ていた。……ミリアだな。しかし、
天井近くまでどうやって本を積むんだ？）

脚立を持ってきて上のほうから少しずつ本を下ろします。崩さな
いように……ひゃあ！？

（脚立を持ってきて上のほうから本を下ろす。流石にこれなら……
…のわっ！？）

……ふえ〜ん、本が崩れてきました〜痛いです〜。

（……はあ、やっちゃったか。怪我は……無い様だな）

「何事ですか！？ ん？ 失礼ですがどちら様ですか？」

今の物音で書庫から慌ててサバスさんが出てきました。はうはう、どうでしょう？

（今の騒音でサバスがすっ飛んできた。さて、どう説明したものか……？）

「あ、あの……」

「む、この気配は…… 永和様！？ 一体どうしてそのようなお姿に！？」

サバスさんはとても驚いた様子で私のことを見ています。

（サバスは驚いたようで、カツと眼を見開いて俺のことは見る）

な、何で分かったんでしょうか、サバスさんは？ でも、これで説明の必要がなくなりましたからよしとしましょう。

（此処まで変わり果てた俺を気配で当てるとはアンタ何者だ？ まあいい、これで説明の手間が1つ省けた）

「じ、実はですね……」

とりあえず、今までの経緯を話す事にしました。するとサバスさんは、遠くを見て言いました。

（とりあえず、今までの経緯を話す。するとサバスは深い悲哀に満ちた表情でこう言った）

「おいたわしや…… 貴方様もシリア様の実験台になってしまわれたんですね……」

……やっぱり、原因はシリアさんみたいです……ぐすつ、あんまりですよ、シリアさん……

（分かっちゃいたがやっぱそうか。くそ、どうしてくれる、この身体？）

「それにしても、何故かは知りませんが、貴女様から永和様には無かった、何というか……オーラを感じます。そう、世間で言う「ドジッ子」と言われるものでしょうか……それから、やはり永和様同様に「弄られ属性」と言っべきものも感じ取れます」

悲しそうな眼で私に語るサバスさん。ドジッ子……弄られ属性……そんなの要らないです……orz

（哀れみに満ちた眼を俺に向けるサバス。……いや、薄々感づいちやいたけどな……orz）

「と、とりあえず、今は片付けるのを後にして、元に戻る方法を探しましょう!!」

サバスさんは近くにある本を取ろうとしました。でも……
（サバスは本を取ろうとするが、）

すかつ。

「……」

「……そうでした。私めは幽霊ですから何も触れないのでした……」

そう言うと、サバスさんは書庫の隅に引きこもってしまいました。
可哀想に……

（そういうと、サバスは書庫の隅に引きこもってさめざめと泣き始めた。哀れな……）

でも、私にはどうしようもないので、元に戻る方法を探すことにしました。

（だが、それに関しちゃうので元に戻る方法を探すことにした）

まずは、本で調べてみましょう。あの薬が何の薬なのか分ければ、それを解除することが出来るかもしれませんね。

（とりあえずは本で調べるか。薬の正体如果能分れば、解除の方法が分かるかも知れん）

ピンポーン……ピンポーン……

あうあう、こんな時に誰ですか？　で、出るしかありませんよね？

（はあ、こんな時にこんな辺境の館に客とは何処の物好きだ？
……出るしかねえか）

「あ、あの、どちら様でしょうか……」

「あれ？ この館にこんなに可愛いメイドさん居たっけか？ あ、すみません、ヒサトの奴居ますか？」

ドアを開けるとそこには金髪碧眼の男の人が首をかしげて立っていました。

（ドアを開けるとそこには金髪碧眼の男が首をかしげて立っていた）

あ、ファイスさん！？ な、何でこんな時に来るんですか！？

（げえ、関羽！？ じゃ無かった、ファイス！？ 何たってこんな時に……）

私がそのヒサトだとばれたら絶対にフォーリーナさんにはれちゃいます。それだけは避けないと……

（俺がヒサトだとばれたらコイツは間違いなくフォーリーナに吐かされる。知られたら一巻の終わりであろう）

「あ、あの、ヒサトさんは今ご主人様達と御一緒にお買い物に行っております。ですから今は……」

「あ、そうですか。……ところで、貴女のお名前は？」

な、名前ですか！？ え、えっと……

（何でそんな余計なことを聞く、貴様は！？ 何か名前は……）

♪♪♪

さっきのCDプレーヤーから音楽が聞こえてきました。あ、そう

だー！！

（先程のプレイヤーの音楽がリピート再生されているようだ。ああ、そうだ、）

「も、申し送れました。わ、私はアリアと申します」

「へえ、いい名前だね。何時から此处にいるの？」

ファイスさんは特に変わったところも無くて、普通に喋ってます。
（ファイスは特に何の変化もなくいつも通りの喋り方をする）

……良かったあ……特に疑われてはいないみたいですね。
（ふう……特に疑われてはいないようだな）

「えっと、最近来たばかりなんです」

「そっか。それじゃ、仕事の邪魔しちゃ悪いし、俺はこれで帰るよ。ああ、そうだ。アイツに伝言頼まれてくれるか？ 明後日にガストさんと釣りに行くんだが、お前もどうかってな。返事は電話で頼む。それじゃあ、俺はこれで」

「は、はい。確かに引き受けましたー！！」

そう言っと、ファイスさんは何やら満足げに帰っていきました。
（それだけ言っと、ファイスは何やら満足げに帰っていった）

ふう、釣りですか……良いですね。私も行きたいです、その
ためにも早くもとに戻る方法を探さないと……

（釣り、か。そういえば最近行っていないな。久々に行くか。その
前に、元に戻る方法を探さないとな）

* * * *

……うゝん、本で調べてもなかなか見つかりません。何か別の方法で調べないと駄目なんでしょうか？

（……見つからねえな。となると、別の媒体で調べる必要が有るのかもな）

時計を見ると、今は13時。私がこうなってから2時間が経過しました。

（今は13時か。身体がこうなってから大体2時間って所だな）

「ヒサトくゝん？ 帰ったわよ？」

「Relax Spotのケーキもあります。冷蔵庫に仕舞っておきますね」

「何してんのよー？ 早く出てきなさい！！」

玄関からお出かけしてた皆さんの声が聞こえてきました。

（玄関から買物に出ていた3人の声が聞こえてきた）

あわわ、皆帰ってきました！！ ど、どうしよう？

（ちっ、予定より帰ってくるのが早いな。どうしたものか……）

しばらく考えていると、突然なんだかモヤッとなって、パアッとなりました。

（しばらく考えていると、突然視界が霞んで、身体が弾ける様な

感覚を覚えた)

……これは……元に戻れたのか？

(……これは……元に戻れたんでしょうか？)

な、何はともあれまずは着替えよう。外に俺の私服が干してあるはずだ。流石に男のメイド服は拙い。

(と、とにかく着替えなきゃ！！ 男の人がメイド服を着ていたら変態さんみたいです！！)

人目につかないルートで外に出て、急いで私服に着替える。

(皆にいられないように外に出て、急いで私服に着替えます)

……ちよつと待て。何で未だに()があるんだ、リニア？

(あ、あの、リニアさん？ 何でまだ()があるんでしょうか？)

—— …… 知らん。必要だからある。それだけだ。尤も、それが有るのは今回だけだな——

……今回だけは？

(……今回だけは？)

「あ、ヒサト！！ 何やってんのよ！！ ほら、さっさと来る！ お昼ごはんまだ食べてないんだから早く来る！！」

リニアの言葉に首をかしげているとシリアが俺に声をかけた。
(リニアさんの言葉の意味を考えているとシリアさんが私に声をかけてきました)

シリアは俺を見つけると、俺の腕を引つ掴んで引つ張り始めた。
結構痛い。

(シリアさんは私を見つけると、私の腕を掴んで引つ張って行きました。痛いですよ!!)

「わ、わかった!! 今行くから引つ張るなって!!」

それから、昼食を取って残りの掃除をした。今度は、ドジをすることも無く掃除を終えた。

(それから、お昼御飯を食べて残りの掃除をしました。今度は失敗せずに終わらせる事が出来ました。しくしく……)

15時を過ぎて皆で集まってティータイムとなった。

(15時を過ぎて皆でティータイムの時間です)

♪♪♪

「あら、この音楽は何？」

突然流れてきた曲に、シリアが顔を上げる。どうやら、この曲に興味があるらしい。

(いきなり流れてきた音楽にシリアさんが顔をあげました。どうもこの音楽に興味が出てきたみたいです)

「ああ、これはね、J・S・バッハの「G線上のアリア」って

言う曲なのよ。確かヒサト君の世界の曲じゃなかったかしら？」

リリアは自分の情報を確認するように俺に話しかけた。

（リリアさんはリリアさんが持つてゐる知識を確認したいみたいで、私に質問してきました）

「そうだな。しかし何処で見つけたんだ、これ？」

オレンジペコのダージリンの茶葉に湯を足し蒸らす。うん、今日のケーキには良く合いそうだ。

（オレンジペコのダージリンの茶葉に湯を足し蒸らします。うん、今日のケーキには良く合いそうです）

「それはガストさんが茶葉を仕入れた時に買ってきたものなんですって。聴いてみたら同じもののレコードが有ったそうなんですCDを貰ってきたんです」

むう、流石は放浪ダンディ。レコードとはまた渋いな。

（ふわあ、凄いですね。レコードを持つてゐるんですか、ガストさん）

「ああいうクラシック音楽は確かに好きそうだな、あの人は。他に何かあったか？」

「後はよく分からないものも多かったわよ。確か、ゴスペルって言うのもあったわ」

ゴスペル……俺の世界じゃキリスト教の福音歌だ……ヴァンパイアが聴いて平気なものか？

（ゴスペル……私の世界じゃキリスト教の福音歌ですよ……ヴ

アンパイアが聴いて平気なのでしょうか？

ふふふふ

「……良い曲だ……」

「あら？ ヒサトってこういう曲好きなの？」

俺の眩きにシリアが気づき、俺にそんな質問をした。

（シリアさんが私の一言に気がついて、そんな事を訊いてきました。

「少なくとも嫌いではないな。こういう曲を聴くと心が落ち着く」

「ふふん。アタシはこの曲で眠れそうだけどね」

そういうと、シリアは興味を無くしたらしく、紅茶を飲み始めた。
（シリアさんは興味を無くしちゃったみたいで、そう言うって紅茶を飲み始めました）

それは音楽に対する冒瀆じゃないか？ いや、子守唄とかは確かにあるがこれは違うだろう。

（あ、あの、それは音楽に対して失礼じゃないですか？ 子守唄じゃないんですよ？）

つと、そろそろ紅茶が淹れられるな。さてと、うつ！？

（つとと、そろそろ紅茶が出来ますね。さてさて、ふえっ！？）

視界が霞んで身体が弾ける……！！

（モヤッとなってパアーツとなります……！！）

「ヒ、ヒサト君？」

「あ、あらら！？」

「あ、アンタ……！！！」

私の突然の変化に思わず驚くミリアさん達。

（突然の俺の変化に驚愕するお三方）

……何で……何でまたこうなるんですかぁー！？！？

（何でこうなるんだぁー！？！？ 説明求む、説明！！）

「シリアさん！！！」

「な、何よ！！！」

「貴女がくれた水を飲んだらこうなっちゃったんですけど、どうなってるんですかー！？？」

「え……あ。もしかしてアタシ、間違えてあの薬渡しちゃったのかしら！？？」

私がそう言うと、シリアさんはハッと何かに気がついたような感じで答えました。

（俺がそう言うと、何やら心当たりがあるらしかった）

「あれって何ですか！？？」

「……えっと……アンタの想像通り、性転換薬。洒落のつもりで作ったんだけど、その格好じゃ少し肉体改変もされてるみたいね、髪の色が違うし。……待って、ひょっとして貴女、性転換した自分に名前を付けた？」

「え、え〜っと……あ、はい。お客さんに名前を尋ねられて咄嗟に「アリア」と……」

「あつちゃ〜、名前付けちゃったか〜。つけなかったら1回きりで済んだのよ。恐らく、これから先、「アリア」って呼ばれるか自分で呼べばヒサトはアリアに代わることになるわよ」

頭をガシガシ掻きながら困った感じでシリアさんはそう言いました。

（頭を激しく掻きながらシリアはそう言った）

そ……そんな……えーん、ファイスさん、何であの時名前を聞いたんですか〜!?

（おお、ゴッド!! 今からお前を殺してやりたい!! それからファイス、テメエは俺がブツ殺す!!!!）

「それから、一度変化したら確か……2時間は代われないはず。それから名前を呼ばれてから変化するまで3分だったはず。だからアリアになって2時間後に「ヒサト」と呼ばれるか自分で呼ぶかすれば元に戻るわ。それは覚えておいて」

うつ……こんな身体になったのは悲しいですけど、仕方が無いですよね……

（ぐぐぐ……仕方が無い、腹を括るか。こうなってしまったもの

は仕方が無い)

「それにしても……随分可愛くなっちゃいましたね、ヒサトさん。あ、今はアリアさんですね」

そう言いながらじーっと私の方を見ているミリアさん。

(ミリアはじっと俺の方を見ている)

うつつ、目線に何か危険なものを感じます……

(その視線は舐めるような視線だった。)

「本当にね。スタイルも良いし、性格も元がヒサト君ならきつと可愛いわよね?」

ニコニコしながらそんな事を言ってるのはリリアさん。

(満面の笑みでそんな事を言うリリア)

あ、あう、私は男の子なんですからそんな事言わないで下さいよう。

(頼む、そう言う事は言わんでくれ。凹む)

「……よく見れば本当に可愛くなったわよね……っていうか……その胸は私へのあてつけか!?!」

手をワキワキとさせながらシリアさんが迫ってきます。

(手を動かしながらシリアは迫ってくる)

そ、その手は何をするつもりですか? え、えと、やめて下さいね?

(ええい、何を考えてるか想像はつく、やめんか!!)

な、何ですか？ 何だか肉食動物に狙われた草食動物の気分ですよ？

（こ、これは拙い。とつと逃げねばって、行動が遅い！！）

「それっ、確保っ」

「了解っ ♪ それっ！！」

「え、ええっ！？ ひゃあ！？」

ミリアさんが飛びついてきたのを何とか避けます。
（ミリアのタックルをギリギリで避ける）

「あ、シリア、そっち！！」

「逃がすかあ！！ たりやあ！！」

「ムギユ！！ シ、シリアさん！？」

避けたところにシリアさんが突っ込んできました。

（飛びのいた先の着地地点に居たシリアにタックルを喰らう）

あわわわわ、シリアさんに捕まってしまいました……今私のお腹の上に馬乗りになってます。

（ち、シリアにマウントポジションを取られたか！！ これは拙い）

「フッフッフ、さあ、まずはどうしてくれようか……よし、まずは……こうしてくれる！！」

「えっ、き、きゃあああ!？」

そう言つと、シリアさんは私の胸をグニグニと揉み始めました。
(そう言つなり、シリアは俺の胸を弄び始めた)

や、止めてくださいシリアさん!! 胸が大変なことに!!!
(止める馬鹿!! 人様の胸を揉みしだくんじゃない!!)

「このこの、この〜!!」

「ひゃああああああ!!」

あうあう、さつきより激しくなってますよ〜!!

(更にシリアの攻撃は苛烈さを増していく。誰か止める!!)

この後、かなり酷い目に遭いました。

(この後、徹底的に遊ばれた)

……ぐすん、酷いです。だれか私に幸運を下さい。

(……ちっ、酷いもんだ。俺に幸運を分けてくれ、誰でも良いから)

へ〜んしん!! ……・したくはなかったが。(後書き)

永和君、TSの憂き目にあう。

正直この話を書くのはめっちゃ疲れた。
同じことを2回書かなきゃいけないんだもの。

ご意見感想お待ちしております。

俺は着せ替え人形にあらず。

こないだの日記：俺は女にトランスフォームする事が出来るようになった。夢だといって欲しい。

「はあ！？ 釣りに行けなくなっただあ！？ そりやまた何でよ？」

この前約束していた釣りに行くために、釣具を準備して出かける用意をしていると、突如電話が掛かってきた。

フォーリーナからだった。

「それがねえ、この前口説き落とした女に目を付けられててね。後ろからグツサリやられたって訳よ。まあ、死ぬことは無いでしょうけど、当分は入院ね」

「うわゝ、そりや災難だなゝ（棒読み）」

フォーリーナの口調は内容にしては軽く、俺も棒読みの返事で返す。ふっふっふ、この前余計なことをしてくれた罰が当たったんだな。病院のベッドで猛省するが良い。

「本当よねゝ。全く、だから行為に至る時には無理矢理やりなさいとあれ程……」

「いや、それは違っただろ」

「被害者として言わせていただく、勘弁していただきたい。
それ、犯罪だかな。」

「あら、そう？ まあ、どうでも良いわ。また今度家にいらっし
やいな。可愛がってあげるから」

「全身全霊全力で遠慮させていただく」

「もう、つれないわね。それじゃ、私は仕事だから切るわよ」

「ああ、それじゃあな」

不満を口にするフォリーナとの電話を切って軽く溜息を吐く。
やれやれ、予定がすっぽり空いてしまったな。

「あらゝ、ヒサトくん。今日は釣りに行くんじゃないの？」

俺が電話を切るとリリアが話しかけてきた。

「あ？ ああ、どうもファイスの奴が女に後ろから刺されたらし
くてさ。今日の釣りは中止になった」

「あらあらゝ、あの子また刺されたのねゝ。これでもう17回目
じゃなかったかしらゝ？」

可哀想にねゝ、と言いながら俺に同意を求めるリリア。

……何だか奴が哀れに思えてきた。

アイツほどインキュバスという種族に振り回されている奴も居ま
い。

奴は本当は1人に決めたいらしいが、その相手が居ないらしい。
しかしインキュバスの宿命で、その相手が居ようが居まいが女性
を抱かなければならないと言う。

人生ままならないものだ。

そんな事を考えていると、リリアが何か思いついたみたいでパツ
と笑顔を咲かせて話しかけてきた。

「そっか。それじゃあ今日ヒサトくんは暇なのね。あ、それ
じゃあ今日はお洋服を買いに行きましょ？ 皆も呼んでくるから、
準備して待つてね、ア・リ・アちゃん？」

「なっ!？」

* * * * *

と、言う訳で、今は皆と一緒にフォリーナさんの洋服売り場に居
ます。

今の格好はメイド服ですから、戻ったら変態さんになっちゃいま
す。

何でそんな格好なのかって言うと、私が逃げられないようにと無
理やり着替えさせられたからです。シクシクシク……

「いらっしやい。あら、そっちの娘は？」

いつものYシャツ1枚とミニスカートって言う格好でフォリーナ
さんは出迎えてくれました。

……何でこの人はこんな過激な恰好が出来るんでしょう？

「この娘はアリアちゃんって言うのよ。今度家に新しく来たメイドさんなのよ」

「でも、持つてる洋服が少ないんですよ、アリアさんは」

「何か良い服は無いかしら？」

「つまり、今日はこの娘の服を見立ててあげれば良いのね。OK、それじゃあまず採寸をしないとね。こっちに来てくれる？」

「凄く行きたくないですけど、行かなきゃ変ですよ……」

「そう言うわけで大人しく従います。」

「うーん、スリーサイズを測るのは初めてなのでドキドキします。だって、元々は男の子なんですからね……」

「あらあら、照れちゃって」

「……スタイル、良いんですね、アリアさん……」

「く、悔しくなんか無いんだから……」

「皆さんは楽しそうに私が採寸されてるのを見ています。」

「一体何が楽しいんでしょうか？」

「ふーん、上から、88、56、92か。随分と着痩せするのね貴女。それにウエストもかなり細いし、そのスタイルなら並みの男ならすぐに落とせるんじゃない？ 顔も可愛いんだし。」

「あ、あははは……」

あの、何度も言いますが、私ホントは男の子なんですよう。
男の子を落としたって嬉しくないですよ。

でも、今の私は誰がどう見ても女の子なんですよね……よよよ……

「……負けてしまいました……」

「ああもう!! 腹立つわね!! このこの!!」

「きゃ、きゃあ!? い、痛いですから脇腹抓るの止めてくださ
い!!」

私のスリーサイズを聞いて落ち込むミリアさんと私に八つ当たり
するシリアさん。

私だって勝ちたくななんて無いです!!

全部あげますからずっと男で居られるようにしてください!!

「で、どんな服がいいのかしら?」

「折角可愛いんだし、まずはうちにあるもの色々試してみたら?
ちよっと待つてなさい、持つてくるから」

そう言つてフォーリーナさんは店の奥に消えていきました。

さ、流石にそんなに酷いものは持つてきませんよね?

「着せ替えですか……どんなのが来るんでしょうか?」

「ふっふっふ、こうなったら遊びつくしてやる……」

ああああ……ミリアさん、貴女は一体何を想像しているんです
か?

貴女の笑顔がとっても不安です。

それからシリアさん、黒い笑顔を浮かべて貴女は私に何をする気でいるんですか？

眼が据わってますよ？

「あ、あの……皆さん、お手柔らかにお願いしますね？」

皆があまり酷いことをしないように、ちょっとだけ自己主張を試みます。

「それは聞けないわ（ね）（です）」

「そ、そんなあゝ！！」

あうつゝ、どうやらおもちゃになるのは確定みたいです……がつくりorz

「お待たせ。とりあえずこんなところでどう？」

そうやって話しているうちに、フォーリーナさんが戻ってきました。ワゴンに入られて出てきた服は皆センスのいい服で……

「普通の服ばかりだけど、もっと面白いのは無いのかしら？」

シリアさんは少し不満げにそんな事を言います。

これで良いんですから余計な事を言わないで下さいっ！！

「何言ってるのよシリアちゃん、底のほうを見てみなさい」

すると、フォーリーナさんはふふん、と笑いながらそう言いました。

……嫌な予感がします。

「あら〜？ この店こんな服まであったのね〜」

「チャイナドレスに、巫女服、修道服に……これはアニメの魔法少女の服？ こんなものまで揃えてるんですか？」

「うわ、しかもその服の小道具まで揃ってんじゃない。よくもまあこんなに……」

皆さんが底をさらうたび、凄い服がいっぱい出てきました。

「ふふふ、服やその小物とあれば揃わないものは無い、って言うのがこの店の売りよ。ささ、どんどん試しちゃって」

それを、フォーリーナさんは自慢げにそう話すのでした。

……あ、あはははは、期待した私が馬鹿でした……

「さて、それじゃ、色々試して見ましょう。まずはくノ一の服。これから着て下さい」

「その次はこれね〜、看護服」

「その次はこれを着てもらうわよ、ミニスカポリス」

「す、少しはまともな服を着させてくださいー！ー！ー！ 何でそんなキワモノばかりなんですかー！ー！ー！ー！」

「「「面白そうだからに決まってるじゃない（よ〜）（ですか）」」」

「あはははは！……！ それじゃ、アリアちゃん。観念して試着室に来なさいな」

……ぐすん、皆、あんまりです……
それから、色んな服を着せられました。
例えば……

「王冠を乗つけて、はい、完成よ」

「……何か、大きな緑色の亀みみたいな人にさらわれそうです……」

ピンク色のドレスとか……

「こ、こんなの恥ずかしいですよー！……！」

「ダメですよ。ほら、ちゃんと言い直して下さい。それまで着替えさせてあげません」

「と……とっても恥ずかしいっちゃ……」

虎縞模様のビキニとか……

「もうヤケです！！ これが私の全力全壊！！！！」

「ア、アリア！！ その先は危険過ぎるわ！！ て言うか、流石にこれは色々間違えたわ……」

魔砲少女の格好とかさせられました……

「さて、ひとしきり遊んだことだし、そろそろ真面目に選んであげましょ～？」

「そうですね。色々面白いものが見られましたしね」

「あー、面白かったー！」

酷いです…… 最初から真面目に選んでくださいよう。

あれ、そう言えばこういう時に一番乗っかってくるフォーリーナさんが居ませんね。

何処に居るんでしょうか？

「どう？ 決まったかしら…… ってその様子じゃまだまだって所ね。それからミリアちゃん、この前注文してた奴出来たわよ」

「あ、そうですね。それじゃ、サイズも合いそうですし、アリアさんに着てもらいましょう」

そう言っ取り出されたのは3人が着ているドレスの色違いの白いドレスでした。

派手さは無く、清楚な感じのドレスです。

「こ、これ私が着るんですか？」

「そうですよ。さあ早く着てください。皆待ってますよ」

ミリアさんに促されてドレスを着ます。

サイズはピッタリで、鏡を見ると自分のことですけど悪くないかな？　って思います。

……これが自分じゃなければどんなに良かったことか……しくしくしく……

「アリアちゃん、綺麗ね」

リリアさんは素直に褒めてくれました。

…… 済みません、似合っても嬉しくないです。

「似合ってるのは認めるけど……あれ、何だろう？　何かおかしいような……」

シリアさんは褒めてくれましたけど何か考え込んでます。
一体何を考えてるんでしょうか？

「ちょっとちょっと、ミリアちゃん。アリアちゃん、何で此処まであのドレスのサイズがぴったり合うのよ？」

「さ、さあ……たまたまだと思いますよ？」

向こうは一体何を話してるんでしょうか……

何となく知らない方が良い気がしますけど、どうしましょう？

「ああ、分かったわ！！　ねえ、ミリ姉。何だか知らないけど、

やけに出来るの早くないかしら？　アリアが家に来たのは一昨日だし、採寸したのはついさっきの筈だけど？」

「あゝ、そう言われればそうね。それじゃあ、これは一体誰のドレスだったの？」

何かに気づいたシリアさんがミリアさんにそう訊くと、リリアさんも同じ質問をしました。

誰のなんでしょうか……友達にでも送るつもりだったんでしょうか？

「え〜と、ちょっとこれは……」

珍しく口ごもるミリアさん。

これを着る人の事がそんなに言いづらいんですか？

「アタシが知る限りでミリ姉がドレスを送る相手は2〜3人しか居ないわ。しかも、その子達はまだ小さいから、そのサイズのドレスは着れないわ」

自分の推測を言い始めるシリアさん。

そうなんですか？　え、えっとそれじゃこれは……

「それじゃあ、これは一体誰の物なの？　シリアちゃん」

「ずばり、ヒサトの物。そうでしょ、ミリ姉？」

「「え、ええええええ！？」」

シリアさんの出した結論に、思わずリリアさんと2人で叫んじゃ

いました。

う、嘘ですよ、ミリアさん？

「あ、あははは……………正解」

ミリアさんは可愛く舌を出しながら答えてくれました。

……………ミ、ミリアさん、幾らなんでもそれは酷いですよー！

！！

男の子に何着せるつもりでしたんですか！？

うっ、言いたいけど言っちゃうとフォーリーナさんにばれちゃうし

……………

「はあ……………ミリ姉、確かにからかうと面白いのは認めるけどね、少し手加減しないとアイツ切れるわよ？」

ミリアさんを諷めるシリアさん。

何だか、声だけ聞くとシリアさんの方がお姉さんみたいです。

「で、でも、ドレスを着せられて恥ずかしがっているヒサトさんって凄く可愛くなりそうだし、一度やってみたいんですね」

「そーよそーよ、本当はこの場で着せるつもりだったのよ」

でも、ミリアさん達はちっとも反省した様子はありませんでした
……………がつくしorz

今日此処に来て本当に良かった……………もし男の子の状態で来ていたら酷い目に……………

あれ？ そっいえば、さっきから何回か自分の名前が出ているよ
うな……………

時間を確認すると、もう私に代わってから2時間過ぎていました。

た、大変です！！ 急いで此処を出て着替えないと！！

「あ、あの、ちょっと用事があるので失礼します！！」

そう言ってお店を飛び出して、近くにある男物の服を売っているお店に行きます。

フェイスさんは居ないので今日は安全です。

そこらにある服を適当に掴んでレジに直行します。

「済みません、これ下さい！！ お釣りは結構です！！」

レジにお金を置いてすぐに誰も居ない路地に行って即座に着替えます。

着替え終わると、モヤゝつとして、パーツとなりました。

* * * *

……で、戻ったわけだが……

くそ、幾ら急いでもとはいえ、もう少し良く見るべきだった。

今俺の服装は赤いシャツに青いオーバーホール、それに赤い帽子と白い手袋、とどめは何故か付いていた付け髭と言う格好だ。

……何故だか急に配管工の仕事を覚えてみたくなった。それに、ジャンプ力が高くなった気がする。

しばらくすると、3人が俺を捜しにやって来た。

「アリアちゃん……て、ヒサトくん！？ あっ！ そう言
えばもう2時間経ってたわー！！」

金色の髪を振り乱して大慌てするリリア。
慌てるには遅すぎる。

「少し、遊びすぎましたね……でも、余所行きのドレスは買えた
から良しとしましょう」

ばつの悪そうな顔をするミリア。
言っておくが、俺はあのドレスは着ないからな。

「それにしても、アンタなんて格好してるのよ……」

俺の格好を見て呆れたようにそう言うシリア。

「う、うるさい！！ 元はといえばお前が不用意に俺の名前を出
すからだろうがー！！」

「うっ、そ、それは悪かったわよ……」

俺がそう言うと、シリアは申し訳なさそうにそう言った。

まあ、過ぎた事はしょうがないか。

「まあいい、折角だから俺の服を買いに行きましょう。あの服だ
けじゃ辛くなってきたことだしな」

「そうよね、ヒサトくんの服のパターンって1つしかないわよ
ね」

「それじゃあ、もう時間も遅くなって来たことですし、早く行きましょう?」

と言うわけでさっきの洋服屋に行くことにした。

道中、街中を全力疾走して行った白いドレスの美少女の噂を聞いたが無視することにした。

店に行くと、レジの前で店員が何やら困っていた。

「ちよつとそこのアンタ、一体どうしたつてのよ?」

「あ、それがですね……さっき白いドレスを着たお客さんが大急ぎで買い物をしていったんですけど、お金が足りないんですよ。どうすれば良いのやら……」

何と、さっき払った金じゃ足りなかったのか。なんてこった。

仕方が無い、足りない分を払うとするか。

「済みません、その人は私の知り合いです。不足分は代わりに払っておくのでそれで宜しいでしょうか?」

「はい。それでは、此方のお値段になります」

うぐつ、高いな……つて、さっき払った代金がめっさ少ねえじゃねえか。10分の1にも届いていない。

ダメだアイツ……つて、アイツは俺か。

「これで宜しいですか?」

「はい、ありがとうございます。……ところで、あの人、僕に紹介してくれませんか?」

店員は黒ぶちの眼鏡を光らせながらそう言ってきた。

おいおい、マジかよ……

冗談じゃない、此処はお引取り願おう。

「済みません、彼女の承諾なしでは此方からは何とも言えませんので……」

「そうですか……」

残念そうに肩を落とす店員。

まあ、運が悪かったと思って諦めてもらおう。

しかし、町に出て初日で一人堕ちるとはな。

アリアの時は外に出るのは自粛するとしよう。

—— 残念ながら、それは無理だ。どう頑張ってもアリアは町に行かざるを得なくなるだろうな——

……いきなり現れてテレパスで人の揚げ足を取るのは止めてくれないか、リニア？

—— 済まんな。だが、数少ない退屈しのぎでなんでね。ま、大目に見てくれよ？——

人を退屈しのぎに使うな！！

…… 応答が無い。ちっ、逃げやがったか。

まあ、彼女はほつといて服を探すでしょう。

まずはあの3人が変な服を選ばない様に見ておかないとな。

「どれが似合うかしら？」

「ミリ姉、真面目に選んでよ。もう時間が無いんだから」

「分かってますよ。これとかどうでしょうか？」

……と思ったが心配は無さそうだ。

それじゃあ、俺は少しばかり新作を漁って見るとしますかね。

「ヒサトさん。ちょっと来てください、試着をお願いします」

しばらくすると3人が俺を呼びに来た。

どうやら、決め終わったらしい。

「ああ、分かった」

「あら、随分と素直に返事したわね。またアンタで遊ぶかも知れないのよ？」

「馬鹿、あれだけ皆真剣に選んでただろうが。なら、きっと良い服に決まってるだろ？」

俺がそう言うと、3人は少し面食らったような表情をした後、

「そう言われると少し嬉しいわね」

いつもと変わらない笑みで返すリリア。

「うわぁ……ヒサトさん、そんな台詞も言えるんですね……」

呆けたような顔して感心しているミリア。

「くさい台詞と言うか何と言うか……でも、悪い気はしないわね。ほら、さっさと試着して見なさいよ!!」

顔を真っ赤に染め、照れ隠しなのか俺に試着を促すシリア。
……うるさいな。言った後に思い返してくさい台詞言っちゃった
と思ったさ。

試着室に入って渡された服を着る。

「お待たせ、これでどうだ？」

渡された服は白いカッターシャツにベージュのスラックス、それに、紺色のベストに黒いハットだった。

俺は実にシンプルで良い格好だと思っただが……

「うんうん、似合ってるじゃない」

「私もいいと思いますよ？」

「そうね。私もこれで良いと思うわよ。ヒサトくんはどう思うの？」

「ああ、俺も気に入った。これを買わせて貰うよ」

ところが、財布を出そうとすると、何故かシリアに止められた。

「ちょっと待ちなさいよ。その服は私達からプレゼントさせてもらうわ」

「ん？ 良いのか？」

「良いのよ。たぶん、これからもお世話になるんだろうしね」

「そうですよ。だから、受け取ってくれないと困っちゃいます」

……拙い、正直滅茶苦茶嬉しい。

そう言つことなら貰うしかないだろう。

「ありがとな。それじゃ、これからも宜しく」

さて、気持ちも新たに明日から頑張りますかねー！

「あ、そうだ。ヒサトさん、少し寄る所が有るんですけど良いですか？」

「ああ、良いぞ何処だ？」

帰り道、ミリアがいきなり寄りたい場所があると言い出した。
俺は勿論承諾したんだが、連れて行かれた先は……

「やつほ、待ってたわよ、ヒサト」

「さあ、大人しくこれを着てもらいますよ?」

よりにもよってフォーリーナの洋品店だった。

おまけにミリアは先程の白いドレスを持っている。

そして他の2人はと言うと、

「ごめんね、私も少し見てみたいのよ」

「ごめん、流石に今のミリ姉は止められないわ。だから、せめて
楽しませてね」

待て。お前らそんな事言つてとめる気0だろ!!

結局、俺は試着室までドナドナされた後、力尽くでドレスを着せ
られ、徹底的に遊ばれると言う憂き目を見た。

俺は着せ替え人形にあらず。(後書き)

永和君、着せ替え人形にされる。
特にいうことは無し。

ご意見ご感想お待ちしております。

お茶会とは胃に穴をあけるものではない

こないだの日記：アリアは迂闊に外を歩けない事が発覚。……まあ、どうしても「よくないです！」か。

「え〜っと、栗生永和とと」

五分経って、元に戻る。

外に出かけるときはこの行動が必須になった。

何しろ、話の最中に「アリア」と言う単語が出てきたら酷いからな。

念のために着替えは持って行くが、使わずに済むことを祈ろう。時間は限られているわけだしな。

……一つ懸念事項があるとすれば、手荷物検査をされると死ぬことになるが。

「あら、出かけるの？」

出かけようとすると、シリアが俺に話しかけてきた。

「ああ、少しばかり。色々足りなくなってきたものが多いからな」

「え？ 家に足りないものは当分出ないはずだけど……ああ、アンタの趣味の物か。前々から気になってたけど、アンタの趣味って何よ？ 紅茶はこの間買ってきたばかりのはずだし、一体何が足りないのかしら？」

ぐっ、人が買ってきたもの何ぞ良く見てるな。
……ばれたら何を言われるか分からね。

「さ、さあ？ 俺が何を……うわたっ!!」

俺が誤魔化そうとすると、シリアは俺の胸倉を掴んで引き寄せた。
で、俺の首筋に牙を突き立てて、流れる血を舐めるように飲み始めた。

「はうあ！？ いきなり何を、うつ!？」

抵抗するが、シリアは放そうとしない。

そして、俺の首筋を舐めながらニヤリと笑いながらこのたまった。

「誤魔化そうなんて許すと思ってるの？ さあ、早く喋らないと
アタシがアタの血を全部飲むことになるわよ？ まあ、アタシは
それでも良いけどね。さあ、話すか、飲まれるか、どっち？」

ちっ、こりゃ積みか。

言うしかねえのか、くそ。

「わかった、わかった!! 言うから放せ!!」

「はい、了解。それじゃあ、聞かせてもらおうかしら？」

そう言ってシリアは俺を解放して、指で口元の血を拭い、最後に
それを綺麗に舐め取った。

その血が自分の物だと思うと、正直微妙な感じになる。

「はあ……なんて事は無い、軽い料理だ。それもごく普通の家庭料理だ」

「そう……そう言うこと。で、何が作れるのよ？」

「……まあ、レシピがあれば和食洋食は出来るな。後は紅茶の付け合せの茶菓子くらいか」

「お茶菓子？ クッキーとかケーキとか？」

やけに後半部分を強調してシリアはそう言った。

……こいつ、それが狙いか……

「まあ、そうな」よし、私も買い物に付いて行くわよ！」「って人の話を聞けい！！」

俺の叫びも虚しく、シリアは俺の手をぐいぐい引いて町に繰り出していった。

町の外れの駐車場でロールスロイス級の御立派な車を止める。

もちろん、運転してきたのは俺だ。この運転も慣れるまではヒヤヒヤものだった。

とりあえず町に入って、スーパーに向かう。

ただケーキを作るだけなら此処で全部揃う。

「そうねえ、どうせなら変わったケーキが食べたいわ」

突然訊いても居ないのにシリアはそんな事を言い出した。

……いきなり何を言い出すんだ。面倒なもので無ければいいが……

「で、具体的には何が良いんだ？」

「そんなのは自分で考えなさいよ。こっちはどんな風に作るのかわからないんだし」

「それが一番困るんだが……」と言つか、普通初めて作らせるんだつたら普通のケーキにするだろ」

「あゝはいはい。それじゃあ次までに考えておくわよ」

ふゝ、何とか今回は普通のケーキに収まりそうだ。

あまり凄いのを言われても作るのは……まあ、サバスあたりに聞けば何とかなるかも知れんが、金が足りん。

そもそも、今日だって本当は単に調味料が切れ掛かってただけだったのにな……

まあ、己の不幸を呪ったところで今更だ。

それに、別に俺の父上は悪くは無い。生まれまでは悪くないからな。

だから友人に謀られて、どこぞの国に「栄光あれええええ……！！！！」などと叫びながら敵に特攻することは無いはずだ。たぶん。

「さっきから何をブツブツ言ってるのかしら？ さっさと決めなさいよ」

隣でシリアが怪訝な顔で俺の脇腹を肘で突いた。

おっと、思わず口に出してしまっていたようだな。

さっさと材料を買って退散するでしょう。

ケーキは……この前作れなかったシフォンケーキで行くか。とな

れば必要な材料は……

* * * *

「ありがとうございます」

材料を買ってさっさと家に帰ることにする。

何しろ、シリアの眼がいつもの数倍増しで輝いている。余程ケーキが楽しみらしい。

やっぱ、「女の子」ってのは甘いもんが好きなかね？

「およ？ ヒサっちじゃん。今日は買い物？」

そうそう、この目の前のウェイトレス幽霊みたいな。

「何だポーラ、そのヒサっちてのは？」

「だって、ヒサトって呼ぶより呼びやすいじゃん。で、今日作るの？」

俺がポーラと話していると、シリアが話しに入ってきた。

「ねえ、ヒサト。確かこの人、あの喫茶店のウェイトレスをしてなかったかしら？ 知り合いなの？」

「知り合いも何も、ヒサっちはウチの店の常連さんだよ」

「でもって、なんとなく話すようになった」

「ふ〜ん、そう。ねえ、早く帰りましょ？ アンタのケーキのレベルを試してやるんだから」

俺の腕を引っ張りながらシリアがそう言う。

しっかし、素直に食べたいとは言えんのかね？
顔がおあずけ喰らった子供みたいになってんぞ。

「あ、作るんだ！！　ねね、私も行つていい？　この前約束してたでしょ！？」

そして俺がケーキを作るとわかった瞬間、ポーラが俺に詰め寄ってきた。

お互いの顔の距離は驚きの1cm以下。

これで相手に触れないんだから、もはや神業だ。

「ねえねえ、駄目なの？　良いの？　どっちなの？」

その距離を保ちながらポーラは俺に詰め寄る。

「わ、分かった、分かったから少し離れる！！　顔近いつて！！」

「やたつ。それじゃ、御一緒させていただきま〜す！！」

嬉しそうにそう言うと、ポーラは俺から離れた。
これでポーラが付いて来る事が確定した。

「ふ〜ん？　約束してたんだ？　そう……」

そして、何故かシリアは不機嫌である。

まあ、不機嫌にもなるか。

客が増えるって事は1人当たりの量が減るって事だしな。
そんな訳で3人で車の所に帰ろうとすると、

「ヒサ兄!!」

と言う元気な声が聞こえてきた。

……もうこの際何も言うまい、この流れなら来るとは思っていたからな。

「あゝ、シルフィ？　あまり街中で大声を出すって言うのはどうかと思うぞ？」

「だって、仕方ないよ。久しぶりに逢えて嬉しかったんだよ？」

近づいてくるなり腕を絡めて来る。

突然の行動に他の2人の反応は……

「おやおや、愛されてるね〜ヒサっち。いつの間に籠絡したのかな？」

「シ、シルフィ？　ちょっとヒサト、アンタの趣味ってそう言うものなのかしら？」

碌でもない事をのたまう奴約2名。

「OK、2人とも。ケーキは要らないんだな」

「ちょー！？　冗談だって、ヒサっち!!」

「そ、そうよね！！ 幾らなんでもそんな事は無いわよね！！」

俺の一言に慌てて発言を取り消す2人。

全く、失礼な連中だ。人のことを何だと思ってやがる。

ふと前を見ると、シルフィの友人がこっちに走ってくるのが見えた。

「……漸く、見つけた。シルフィ、ヒサトを見つけたからっていきなり飛んで行かないで欲しい」

「あ、ごめんね、ヘルガちゃん」

駆け寄ってきたヘルガは息も絶え絶えだ。

そんな彼女にシリアが声を掛ける。

「あら、ヘルガ。アンタも久しぶりね。元気にしてた？」

「……最近シルフィに少し禁断症状が出た」

そう言うヘルガの無表情な顔には影が見えた。

……事態はかなり深刻なようだった。

「あゝ、そうなのね。良いわ、ヒサトが暇な時は言ってくれば貸し出すわ。」

「え、良いの！？ ありがとう！！」

俺の意思をPerfectに無視してそう言うシリア。

ちよっと待て！！ 俺の意思は何処に行った！？

声を大にして言いたいのが、俺に抱きついて満面の笑みを浮かべて

いるシルフィを見ると言えなくなる。

恐らく、言った瞬間反転して、俺はお持ち帰りされることになるであろう。

「……ヒサト」

「んどわっ！？ お、脅かすなよ、ヘルガ！！」

突然背後から声が掛かったので振り返ると、首筋に丁度鎌が当たる位置にヘルガが立っていた。

相変わらずのステルスっぷりである。その内本気で暗殺されそうだな、俺。

「……修行の成果」

無表情で俺に向かってピースするヘルガ。

……上手く行ったのが嬉しかったのか？ と言うか、何の修行だよ。

「はあ……で、一体何のようだ？」

「……その袋の中身は？」

ヘルガはさつきから袋の中身に興味津々だ。

あゝ、前にも似たような事があったな。

「シフォンケーキの材料だよ。シリアの頼みでこれから作る事になった」

「え、これから作るの！？ 私達も食べるに行っている！？」

一番最初に反応したのはシルフィだった。

「……この前約束した」

鎌を軽く食い込ませながらそう言うヘルガ。

その眼は断つたら首を刎ねると雄弁に物語っていた。

……さて、どうしようか。このままじゃ材料がまた足りなくなるのだが……

「ねえ、駄目なの？」

考えていると、シルフィは少し泣きそうな目で下から俺の顔を覗き込んできた。

……泣かせたら事だな。

周囲の被害を出さないためにも連れて行くか。

「ああ、分かったよ。いいぜ」

「本当？　ありがと、ヒサ兄！！」

ぎゅっと俺を抱きしめてシルフィが答えを返す。

「へえええ、シルフィ達とも約束してたんだ。そう……」

そして、やっぱり不機嫌になるシリア。

一体どうしたと言うのだろうか？

まあ何だ。とりあえず材料が足りんから買い足しにいくか。

* * * *

で、再びスーパーで買い物をして皆が居る場所に戻る。

緑色の服と帽子で髭面の男が足の生えた人面キノコに頭を齧られていたが気にしない。

それから車に乗って館に戻る。

「うーん、やっぱり遠くから見ると実際に行くのとは違いますな」

「此処にヒサ兄は住んでるんだ……」

「……大きい」

どうやら此処に来るのは全員初めてらしく、どうやら驚いているようだ。

「それじゃ、姉さん達呼んでくるわね。先にアンタの離れに行つてて」

「ああ、分かった。先に行つてる」

シリアはそう言うと館に向かって行つた。

それから離れに向かおうとすると、

「……いる」

突然ヘルガの雰囲気が変わった。

なんというか、獲物を見つけた狩人のような雰囲気だ。

「いるって、何がいるってんだ？」

「保護されていない幽霊。このままじゃ危ない」

そう言つと、ヘルガも館の方向に歩いていった。

「ちょ、ちょっと、ヘルガちゃん？」

「幽霊を保護してくる。大丈夫、すぐに終わるから」

幽霊？ 俺が考え付くのは1人だけだ。
ダッシュで追いかけ、ヘルガに追いつく。

「ちょっと待った。保護って一体どうするつもりだ？」

「今のままじゃ黄泉路に迷って、何処にも存在できなくなる。だから、この世界に一時的に固定する」

そう話しながら、ヘルガは書庫のドアを開けた。

「おや、どちら様ですか？」

そこではサバスが窓の外を見ていた。

すると、ヘルガはサバスが振り向く前に手にした鎌でサバスを刈り取った。

サバスは、光となって霧散した。

「がつ！？」

「お、おい！！ お前一体何を……」

「浄化完了。結」

ヘルガが一言発すると、今度は霧散した光が段々集まってきた。そして最後の一かけらが揃うと、以前と変わらぬ姿でサバスが現れた。

「あだだだだ……いきなり何をなさるんですか、貴女様は……」

サバスは腰を押さえながら立ち上がる。

「……本、持ってみる」

ヘルガはそんなサバスに本を差し出し、サバスの腕に落とした。すると、本はサバスの腕をすり抜け——ない。

「おお、こ、これは！？」

サバスは眼を見開いて、何度も本のページをめくった。

「……上手く行った。さあ、ヒサト。ケーキ作る」

そう言いながら、ヘルガはまた無表情で俺にピースした。

「あ、ああ。ま、まあ、何だ、サバスも一緒に食うか？」

「私めも宜しいのですか？」

「当たり前だろ。折角物に触れるようになったんだ、そのお祝い

も兼ねてどうだ?」

「そう言うことでしたら、お言葉に甘えさせていただきます。さて、永和様のお手並み拝見と行きましょう」

ほっほっほっ、と高らかに笑いながらサバスはそう言った。

「……お手柔らかに頼みます……」

「……早く。皆、待ってる」

ヘルガに引つ張られながら離れに向かう。
離れでは、既に全員集結していた。

そんでもって、いきなり現れたサバスには流石の家の3人も驚いた。

「サバス!?! アンタ死んだんじゃないの!?!」

「いえ、それが事の外未練があつたようでして……」

「え〜と〜、つまり〜、今は幽霊つてこと〜?」

「はい、そう言うことになります。先程保護を掛けて貰いましたので、また執事に復帰する事が出来ます」

「それじゃあ、またお願いできますか?」

「ええ、勿論です!! 皆様、また宜しくお願いいたします」

そう挨拶するサバスは、感無量といった感じだった。

ふう、何だか丸く収まったみたいだな。

これで俺も執事をするのではないd

「はい、それじゃあ、ヒサトさんと一緒に頑張って下さいね。」

は？

「サバスさんは館の中の管理を宜しく、外の事はヒサトくんに任せるから」

「畏まりました。それでは永和様、これからも宜しくお願いいたします」

俺に対して礼をするサバス。

おいおい、俺は解放されるんじゃないのか？

「うーん、2人に増えたことだし、ヒサトには少し手伝ってもらおうかしら？ 実験台とか」

こらまで、何でそうなる！？ て言うか俺はサバスの代わりじゃなかったのか！？

——……お前のような面白い存在がそうそう簡単に解放されるわけあるまいに……——

黙らっしやい！！ いきなりテレパス飛ばしてモノローグに突っ込むな、リニア！！

等と考えてると、誰かが服の裾を引っ張った。

「ねえねえヒサ兄、いつケーキ作ってくれるの？」

「そーだそーだ、ポーラちゃん待ちくたびれちゃうぞ〜？」

「……早く食べたい」

「お話も終わった見たいやし、そろそろ作り始めても良いっちゃ
ない？」

振り返ると、お客4人の催促が来た。

……どうやら皆を待たせ過ぎたらしい。いい加減作り始めるか。

「おやおや、皆様をこれ以上お待たせするわけには参りませんな。
永和様、此処は2人で分担して仕上げることに致しましょう」

「そうだな。材料は充分な量あるからシフォンケーキを何種類か
作ろうと思ってたんだが……」

「ふむふむ、それならば紅茶と抹茶は私めが、永和様はプレーン
と桜をお願い致します。」

「任された」

2人でどんどんケーキを焼き上げていく。流石に2人で作業をす
ると出来るのも早い。

俺達がケーキを焼いている間、外では皆で話をしているようだ。

「あいつらそういえば全員顔見知りなのか？」

「そうですね、ポーラ様は喫茶店で皆様に、シルフィ様、ヘルガ様はお嬢様方と共に旅行に行かれた事がございますから、皆様顔見知りと言うことになりますな」

こういう他愛も無い話をしている間にケーキが焼けた。

「ふむ、見た目は全て合格ですな。後は中の焼け具合と味と香りですな。さて、久々に焼きましたから、上手く焼けているか……」

いつも以上に眼に真剣みが籠っている。

どうやらこれはサバスにとって譲れないものらしい。

焼いたケーキ4種を皿に移して、テーブルに持っていく。

合わせる紅茶はこの前ガストさんに薦められたレリツシュ。

シフォンケーキに使われてるのは別なので大丈夫なはずだ。

「おお！！ 美味しそうじゃん」

眼を輝かせるポーラ。

「うわゝ、すごいー！！」

素直に驚くシルフィ。

「……じゅり」

すでにフォークを構えているヘルガ。落ち着け。

「ふふふ、久々に家のケーキが食べれるわね」

「今から食べるのが楽しみです」

「サバスは流石ってとこだけど、ヒサトもレベル高いじゃない」

久々に自家製のケーキが食べられるのが嬉しいらしく、待ち切れないという感じの3人。

「いえ、まだですぞ。皆さんが食べてからが肝心です」

「とまあ、そう言うわけでどうぞ召し上げ」

「「「「「頂きます!!」」」」」

さて、みんなの反応は如何なもんかね。
順に回りながら聞いて見るとしよう。

まずはサバス。先に辛口な人から聞いておいたほうが後が楽だな。

「ど、どうでしょうか？」

「……少し、重たいですな。もう少し空気を入れられると良かったのですが……他にも言いたい事はございますが、今回は合格点ですかな」

「おっしゃ。んじゃ、次はそこらへん気をつけてみる」

次はポーラに聞いてみるか。

「お、ヒサつち。美味しいじゃん、これ」これホントにヒサつちが作ったのん？」

そう言いながらもどんどんケーキを食べていくポーラ。どうやらなかなか好感触のようだ。

「……あのなあ。ついさっきまでキッチンでんてこ舞いしてたんだぞ。その言い草はねえだろうが」

「あはは、ごめんごめん。今度何か奢ったげるよ」

「ああ、期待しないで待ってる」

次はシルフィたちのところに行くとしよう。

「よお、そのケーキはどうだ？」

黙々とケーキを食べるヘルガだったが、どこことなく表情に影が差していることに気付く。

「ん？ 何か拙い事でもあったか？」

「（もぐもぐ）シルフィが（むぐむぐ）頭痛こくいって（コクコク）。

」

俺が質問すると、ヘルガは一心不乱にケーキを食べ、紅茶を飲みながら答えた。

……見た目の割りに結構食うのな、ってそれどころではない！！

「待て、じゃあシルフィは！？」

「クスクス、此处だよ？」

声がした方向を見て俺は激しく後悔した。

……だって翼が黒いんだもん！！

「あ、あの、シルフィさん？」

「なあに、ヒサ兄？」

シルフィは俺にしなだれかかりながら妙に艶っぽい声で答える。
周りの者は家主を含めてあまりの豹変ぶりに啞然としている。

「フッフ、黙ってても分からないよ？ あ、ひょっとしてケーキの感想が聞きたいの？」

「あ、ああ。で、どうだ？」

するとシルフィは少し考えて、

「タダじゃ教えてあげないよ。ねえ、ヒサ兄。私と食べさせあいっこしよう？ そしたら教えてあげる」

……何かありそうな気がするが……まあ、良いだろう。

「分かった。それじゃ……」

「あ、そうだ。1つルールを決めるね？　それは、「フォークとかの食器を使うのは無し」っていうルールだよ。はい、ヒサ兄。フォークは置いて？」

……逆らうと余計に酷いことになりそうな気がする。仕方が無い、手で食べさせるか。

「ほら、どうぞ？」

「違うよ、ヒサ兄。そういう時は、「あ〜ん」でしょ？」

少し拗ねた様に要求してくるシルフィ。

うぐぐ、激烈に恥ずかしいがやるしかないか。

「あ……あ〜ん……」

「あむっ」

意を決してあ〜んをしてやると、シルフィは漸くそれを食べた。で、食べたは良いが、放そうとしないのはどういうことか？

シルフィは俺の指を吸ったり、舐めたりして口の中で弄んでいる。

「シ、シルフィさん？」

「ん〜、チュ……フッフ、ご馳走様。ヒサ兄の指、美味しかったよ?。」

悪戯っぽく笑いながら感想を言ってくる。

……誰か助けてくれ、精神が擦り切れそうだ……

周りに視線を巡らす、ことごとく眼を逸らされた。薄情者共め。

「いや、俺の指の味の感想は良いから、ケーキの味をだな……」

「もう、せつかちなんだから。それは、私が食べさせてあげるから、食べてくれたら教えてあげるよ」

すると、近くにあった桜のシフォンを手に取り、それを自分の口に……

おいおいおい、幾らなんでもそれは拙い。

何が拙いって、世間体とか色々拙い。

「や、やつぱりいいや！！ その顔を見れば俺だって……な！？」

断って逃げようとする、何処からとも無く鎖が伸びてきて、俺の両手両足を拘束した。

鎖は丈夫以前に何故かどうやっても切れる気がしない。

くそ、これじゃ逃げられん！！

「ダメ、こういうときは逃げちゃいけないんだよ、ヒサ兄？

女の子に恥かかせないようにしないと、ね？」

妖艶に笑いながらゆつくりと近づいてくるシルフィ。

くう、見た目は10歳位なのに、何処でこんなこと覚えてくるんだ！？

ギャラリーはもはや再起不能。完全にシルフィの空気に飲み込まれてしまっている。……助けは望めそうに無い。

「それじゃ、ヒサ兄。食べさせてあげるね？」

シルフィはさっきと同じようにケーキを自分の口に含んだ。
そして、少しだけひんやりとした手が俺の両頬に添えられて、
そのまま俺の唇に口付けた。

「むぐっー!」

「ん……はぁ、んむ……」

シルフィから口移しでケーキを食べさせられる。
ケーキの甘味と桜の風味に、シルフィの匂いと唾液の味が混ざる。
正直に言って、さっぱり味が分かん。

「んっ……はぁ、どう？ 美味しかった？ 私はとっても美味し
いと思うよ?」

シルフィが漸くケーキの味の感想を言ったが、俺はそれどころで
はない。

……何だろな、何か色々大切なものを失くした様な気がする……
……ははは……

「ん……少し頭が痛い……ちょっと休ませて貰うね……」

そう言つと、シルフィは座りこんだ。
みるみる翼が白く染まってい。

「あ、あれ? ど、どうしたの? 何で皆ぼっとしてるの?」

「……シルフィ……世の中には知らなくて良い事があるんだ……」

「????」

……き、気を取り直して我がマスター達の所に行くとしよう。

「……シルフィちゃん、結構大胆なのね……」

「びつくりしました……凄く……官能的でした……」

「あ、あははは……だ、大丈夫、ヒサト？」

3人とも突然の事にまだ呆然としているようだった。

「ふふふふ、もう燃え尽きそうだ……」

もう心身ともにグロッキーだ。しばらく動きたくない……

「あの、ケーキ、とても美味しいですよ」

「うんうん、美味しかったわよ」

「そうね、結構美味しかったわ。また今度作る事があつたら言いなさいな」

その素直な感想が荒廃しきった心に沁みる。

「そいつは良かった……わ、悪い、少しだけ休ませてくれ……」

「良いわよ、ゆっくり休んでね」

俺はベンチに座ると、そのまま即座に眠りに落ちた。

* * * *

しばらくして眼を覚ますと、あたりは暗くなり、お茶会はもうお開きになっていた。

視界がはつきりしてくると、目の前にはミリアの顔があった。

「あ、やっと起きましたね、ヒサトさん。もう皆帰っちゃいましたよ?」

「悪いな、起こしてくれても良かったんだが……」

「ふふふ。ごめんなさい、凄く気持ち良さそうにしていたものですよ……」

ミリアは優しい笑顔でそう言った。

いい加減に起きるか。

ゆっくりと身体を起こして伸ばす。疲れはある程度取れたようだ。

「さ、帰りましょう? 皆待っていますよ」

「そうだな、帰るとしようか」

「今日は楽しかったですね、ヒサトさん」

今日一日を振り返る。色々な奴に振り回されはしたが、確かに楽しい一日だった。

「ああ、そうだな。またお茶会が出来ればいいな」

「はい。サバスさんも戻ってきましたしね」

振り回されるにしても、こういう一日なら悪くは無い。
明日からまた頑張れそうな気がした。

* * * *

「遅い！！ 被告人、遅刻するとはどういうことか！！」

「……はい？」

いきなりリリアから、恫喝のつもりであろう間延びした声が聞こえてきた。

館に入ると、そこは裁判所と化していた。

裁判長の席にはリリア、裁判官席にミリア、検察側にはシリアが居た。

で、被告人席には俺こと粟生永和。そして弁護人不在。
全員スーツをきっちり着こなし、かなりノリノリである。

「それでは開廷する。検察官、罪状を」

「はい、被告人、ヒサト・アオウは事もあるうか自分の趣味を主人に黙っておきながら、友人には平気で喋っていたのです。以上のことより、検察は被告人に然るべき処罰を課したいという所存です」

「ちよつと待てやあ！！ そんなことでこんな裁判起こしたんか

あ！？」

「被告人は静粛に〜！！！！」

検察を務めるシリアが淡々と罪状を読み上げる。

俺が抗議するとリリアが手にしたハンマーで音を立てて俺を注意する。

「弁護人、異論はありますか？」

リリアが弁護側に問いかけるがもちろん反応は無い。

「それでは、ホントは色々あるのかも知れないけど判決を下します。被告人、ヒサト・アオウを有罪とする。ささ、それじゃ連行しちゃって」

「だからちよつと待てゐ！！ 俺に弁明の余地は無いのか！？」

「「無いわ（よ〜）（ですよ）。」「」」

「じ、じゃあせめて弁護人を！！ サバスは何処に行った！？」

「サバスさんなら「主人に存在報告せずに隠れ住んでいた」罪でさっきお仕置きしました。」

……哀れ、サバス。復活早々酷い目に遭ってまあ……

「ま、待て、隠していたのは悪かった、だからせめて一言……」

「往生際が悪いわよ。さあ、大人しく罰を受けなさい！！」

そうして俺はいつもの反省部屋と名付けられた処刑場に送られ、
そして……

「ふんぎゃあああああああああああああああああああ
！……！！！」

お茶会とは胃に穴をあけるものではない（後書き）

よう　　い　　よ大暴走。

……我ながら何を書いているんだ。

ご意見ご感想お待ちしております。

どうして俺の周りには変態しかいないのかと小一時間。

こないだの日記：お茶会を開いたらエライ目に遭った。あと、サバスが復活した。

「あゝ、だりいゝ、仕事サボろう……」

ファイスは机の上にのびている。

相変わらず覇気が無いな、こいつは。

髪とか何のかんのは滅茶苦茶だし。

「おいおい、良いのか店長、退院早々なこと言ってて。仕事溜まってんだろ？」

「まあ、仕事くらいはちゃんと終わらせておいた方が良いとは思うがね」

俺の言葉にガストさんも同意の様だ。

すると、ファイスはだるそうに顔をあげて、

「あゝ？ んなもんとつくに片付けたぜ。高々1週間分だろ？」

と言い、また机に突っ伏した。

「……何でお前が店長なのか漸く分かった気がするぜ、ファイス」

ファイスはつい先日どこか今日退院したばかりである。

退院してから6時間、もう1週間分の仕事が終わったと言っのか。一体こいつはどれだけ仕事が早いのだろうか？

まあ、それはともかく今日は久々の休みだ。

そう言う訳で俺はファイスやガストさんと喫茶店で駄弁っている。ちなみに、ガストさんはミストさんに許可を得ているから堂々と駄弁ってられる。

「しかし、今度はどういう理由で刺されたのかね？」

「まあ、いつも通りだな。俺が離れていくのが嫌だったらしい。

……… ったく、最初に一夜だけ、って断ってんのによ………」

心底面倒くさそうにファイスはそう言う。

何て言うか、苦労してんな。

「ま、モテる男は辛いつて奴だな」

「………それを君が言っちゃうのかな、ヒサっち？」

2人で話しているとニヤニヤしながらポーラが割り込んできた。コイツ、一体何を言っつもりだ？

まあ、碌でもないことを言いそうな気配はひしひしとを感じるが。

「ちょっと聞いてよ、ヒサっちったらね、この前のお茶会で………」

「っ！！ ちょっと待て！！ そいつは「え、何々！？ 教えて

！！」むぐう！！」

拙い、ポーラが言いたいのは間違いなくシルフィのことだ！！

だが、止めに入ろうにもファイスがガツチリ押さえ込んでいて動けん。口も塞がれている。

「それがね、天使の女の子に猛烈なアピールをされててね……あれは凄かったな。もうその場の時間が止まっちゃうくらい」

「アピール？ どんなアピールをされたのかね？」

「あのねあのね、そのお茶会で出されたケーキはヒサッチが作ったもので、ヒサッチはその感想を聞いて回ってたんだけど、その子は食べさせあいっこしてくれたら教えてあげるって言ったんだよ」

凄まじい勢いでマシンガントークをかますポーラ。

やめろ、それ以上言うな！！

「そしたら、直前になってフォーク禁止とか、ヒサッチが指で食べさせたら指をしゃぶりつくすわ、挙句の果てには自分が咀嚼したケーキをヒサッチの口に流し込むわ、もう半端じゃ無かったよ」

ポーラが話し終わると、2人は揃ってこっちを見た。生暖かい視線で。

「すげえな。俺でもそんな事滅多に無いぜ？」

「いやはや全く、情熱的な人も居たものだな。で、どんな人なのかな？」

……絶対に言わねえ。言ったらどうなるか目に見えてるからな。

「小さな女の子だよ。そうだね、人間基準で行くと多分まだ

10歳くらいかな？」

相変わらずニヤニヤ笑いながらポーラはそう言った。

「ポーラ！！」

ええい、余計な事を言いおつて！！

ポーラが話し終わると、2人は揃ってこっちを見た。若干冷たい視線で。

「……お前……そちの気があつたのか……」

「……君が少女性愛者とは気が付かなかったな」

「誰が少女性愛者だ！！俺ノーマル！！ 此処大事！！」

必死で自己弁護するが、効果は薄いようだ。
その横では元凶が腹を抱えて笑っている。

「きやはははは！！」

「お前も、そこで笑ってんじゃねえええええ！！！！」

くっそ、碌でもねえ奴らだ。今に見てやがれ。

「ごめんごめん、実際はかなり一方的なものだったから、ヒサツ
ちにその気は無いよ、多分。でも、将来大きくなったら危ないかも
ね、ヒサツち？」

パタパタと手を振りながら、ポーラは俺に謝った。

「ま、まあ、確かに可愛いのは認めるけどな……」

認めるが、流石にあれは勘弁してほしい。
いつか胃に穴が開く。

「良いじゃねえか、だったら10年待ってやれよ。で、どうやって知り合ったんだ？」

「ふむ、確かに、何の接点も見当たらない2人がどうやって知り合ったのかは気になるな。どのように知り合ったのかね？」

2人とも俺とシルフィの馴れ初めに興味津々のようだ。

……ああ、思い出すだけで死にたくなる……何であんな事をしたのだろうか？

「別に。公園で怪我して1人で泣いてるところを見つけたんで、治療した後少し遊び相手になってやったただけだ。それがまさかあんなるとはね……」

正直に言って、あの時に戻れるなら戻りたい。

このままだと、下手するといつか捕まって一生逃げられなくなりそうな気がする。

というか、反転すれば初対面で監禁寸前までやる程アグレッシブな性格をしているのだから、本気で一生を一つの部屋で過ごすことになるそうだな。

「そう言えば、あの天使の子の名前何て言っただけ？ 私この間名前聞いたんだけど、忘れちゃったんだ」

ポーラは両手の人差し指をこめかみの近くでぐるぐる回して考えながら俺にそう言った。

お前はー。さんか。

「シルフィだよ。俺に定期的に会わんと被害を出すとかいう話を目の前でしてただろ」

「ほう、と言うことは貴様がヒサトだな？」

「……はい?」「……」

突如、後ろから高圧的な声が聞こえる。

振り向くと、そこにいたのは金髪の背の高い男で、頭に角が生えている。

「……どうやら、シルフィの親父さんと言うわけでは無さそうだ。ついでに言えば、結構よさげな生地を着ているところからかなりのお偉いさんかぼんぼんであることは間違いないだろう。」

「あの……どちら様で?」

「何? 貴様……我の顔を判らぬと申すか!!」

「は、はあ!?」

俺が名前を訊くと、男は突然キレ出した。何故だ。

「ん? そういえば、この顔何処かで……」

何やらガストさんは彼が何者なのか心当たりがあるようだ。腕を組んで思いたそうとしている。

「おお、そうだ!! 貴方はこの一帯の領主の嫡子のリオンさんではないか!!」

「うむ、その通りだ。いかにも、余がリオン・ファフナーである!!」

ガストさんが名前を言うと、大仰な声でそうのたまった。
……リオン『さん』で良いのか。こういう奴は『様』付けさせるもんなんだがな……

「ああ、領主様んとこの。ところで、そこのヒサトに何のようด้วย？」

「うむ、そのシルフィの件で言いたい事がある!!」

ファイスがそう言うなりリオンは真剣な表情で俺の肩を両手でつかんだ。

俺は聞くだけ聞くことにした。

「は、はあ……なんでしようか……」

うゝむ、被害を抑えるためにあいつと常にいるとかだったらどうすっかな？

そんな事になったら、俺速攻で胃潰瘍かなんかで病院行だよな。まあ、とりあえず聞いてみよう。

「どうすれば、シルフィちゃんと仲良くなれるのだ？」

一瞬にしてその場の空気が凍り付いた。

……今コイツ何て言った？

「あ、あの……済まないがもう一度言ってくれんか？」

「だから、どうすればシルフィちゃん、いや、出来ればヘルガちやんと仲良くなりたい！！ どうすれば良い！！」

心の底からそうなりたいのか、熱く俺に語りかけてくる。

「……」

対して、完全に沈黙する俺達。

……無駄だとは思うが、一応確認しておこう。

「あゝ、1つ質問だ。お前の好みの女性って、どういう人だ？」

すると、リオンは不適に笑って、

「良くぞ聞いてくれた！！ 良いか我は……」

—— 15歳以上の女性に興味は無い！！！！！！」

あんまりな発言に俺は思わず頭を抱えた。

……駄目だコイツ、力強く断言しおった。

そんな事を公衆の面前で誇らしげに大声で叫ぶか、普通？

あゝあ、もう周りの空気氷点下だよ……

「で、どうなんだ、どうすれば仲良くなれるんだ？」

そして全く空気を読む気が無い次期領主。

とりあえず、コイツには言わないほうが良いだろう。

大真面目な顔で問いかけるコイツに一言言おうとしたその時、

「お兄様！！　こんなところで何をしてるんですか！！」

と言う声が飛んできた。

……　なんか来た。

来た女性は長い金髪の頭に角が生えている。

先ほどの発言から考えて、どうやら妹らしい。

「む、どうした、リアン？　余に何か用か？」

「もう、お兄様ったら！！　あれ程後で一緒にお話してくださる
って約束したではないですか！！」

リアンと呼ばれた彼女は頬を膨らませながらそう言った。

「む？　そうだったか？」

「そうです！！　さあ、早く参りましょう？　2人つきりでじっ
くりお話をしましょう？」

しらばっくれるリオンになおも食ってかかるリアン。

……　今度はブラコンか？

しかし、何か様子がおかしい。

リアンが現れてからと言うものの、リオンの顔色がみるみる悪くな
っていく。どう言うことだ？

「ま、待ってくれ！！　せ、せめて彼と少しだけ話をさせてくれ！！」

リオンがそう言うと、リアンはこっちをチラリと見て、

「……良いでしょう。では、思う存分話し合ってください。私はそこに居ますから」

そう言って、リアンは脇にある椅子に座った。

リオンは、軽く溜息を吐いて俺に話しかけた。

……何やら熱い視線を感じるが気にしない事にする。

「で、どうするのだ？　どうすれば仲良くなれるのだ？」

大真面目にそう聞いて来るリオン。

……少女たちの平和のためにも、此处で理由を言うわけにはいかないな。

「あゝ、生憎だが、今のアンタにや言えんわ」

「な、何故だ！！　何故言えんのだ！？」

「いや、だってアンタ、普通に聞くとかなりの危険人物だぞ？」

「貴様、我を愚弄するか！！」

そう言つたりリオンは掴みかかってきた。

俺はリオンに押し倒される形で床に転がった。

「言え！！ どうすれば良いのか我に言っのだ！！」

「奴等の平和のためにも、アンタには言えん！！ て言うか、大体なんで俺の名前知ってたんだ！？」

「そんなもの、シルフィちゃんの周辺を調べ上げればすぐにわかる！！」

「この変質者が！！ 絶対に言っただまるか！！」

そうやって2人で言い合っているところ……

「お兄様があの殿方を押し倒して……きゃー♪♪♪」

「……………」

リアンの突然の叫びは氷点下どころか絶対零度の世界を作りだした。

おい、誰かあの腐女子を止める。

リアンはどうやら801がお好みらしい。

こいつ等揃いも揃ってなんちゅう兄妹だ。

これに関してはリオンも沈黙している。

……ああ、そういうことか。

リアンの言う2人っきりの話っていうのは、リオンとリアンではなく、リオンともう1人の誰か男と言うわけだ。多分。

「……アンタ、苦労してるな……」

「言うな。時々あまりの無様さに死にたくなる……」

俺がそう言つと、リオンは両目から滝のように涙を流してそう言つた。

「さあ、お兄様？ そろそろ帰らないと、夕食の時間に遅れますわよ？ まあ、どうしても言うならば、まだその殿方と抱き合つても宜しいですけど」

その言葉に慌てて飛びのくりオン。

飛び退いたところを素早くリアンに捕獲され、いつの間にか外に着いていたリムジンに乗せられる。

リオンがリムジンの中に消えたかと思えば、リアンがこつちに寄つてきた。

「貴方のお兄様との一幕中々に良い絵でしたわよ？ 貴方、お名前は？ 何処でお仕事をなさってるのかしら？」

寄つて来るなり俺の手を握つてそんな気色の悪い事をのたまうリアン。

えらく力が籠っている。どうやら俺が名前を言うまで放す気は無いようだ。

「永和だ。栗生永和。フローゼル邸で執事をやっている。」

すると、突然リアンの目の色が変わった。

「フローゼル？ ……そう、貴方、シリアのところの執事なの…

…ふふふ、面白いですわ。貴方にも家に来て頂きましょう」

新しいおもちゃを見つけたような顔でそう言うや否や、リアンは俺を脇に抱えてリムジンに乗り込んだ。

「は？　ちょ、おい！！」

「あの、シリアが気に入ってる執事ね……こんなに面白い材料ありません。さて、シリアはどんな顔で私の家に飛び込んでくるかしら？　ふふふ……楽しみですわ……」

真っ黒な笑みを浮かべてリアンはそう言う。
ちなみに、俺は逃げられない様にすっかりブロックされている。

「シリアに何か恨みでも有るのか！？」

「いえ、ありませんわ。でも、普段見られない顔が見られるって言うもの面白いものですわよ？　さ、貴方はそこで寝ていてください」

そう言っ、俺は見動きすら封じられ、リムジンの後部座席に転がされた。

すぐ前の席から、リオンの声が聞こえる。

「教えるー、教えるー、今すぐに仲良くなる方法を教えるー……」

……この場で胃潰瘍になりそうだった。

* * * * *

ファフナーの館に着くと、ウチんとこの館と甲乙付けがたい規模の庭が出迎えた。

俺は拘束されたまま、その一室に放り込まれ、椅子に座らされた。リアンは、俺の対面に椅子を置き、そこに座った。

「さて、貴方にはしばらくこの部屋に居てもらいますわよ」

極めて優雅な態度で俺に話しかけてくる。

口調こそ兄に似て高圧的だが、その実、人の扱いは丁重で不快感を感じさせない。……拘束されてなければ。

「1つ質問だ。この後の俺の処遇はどうなってるんだ？」

「扱いとしては客人ですわ。ですから、当家の使用人にも相応の扱いをするように言っておりますわ」

「まさか、アンタの兄と同じ事を？」

「いいえ、私はあくまでお兄様が絡むのを見たいだけですわ。お望みならその通りに致しますわよ？」

「全力で遠慮させてもらつ。だから息を荒げるんじゃない」

「……それは残念ですわ……」

心底残念そうにリアンはそう言った。

……なるほど、ブラコンで兄限定のやおい好きかよ。

痛いにも程があるが、そのお陰で助かるんだから目を瞑っておこ

う。

「でも、シリアの前で貴方に色々してみるのも面白いかもしれない
せんわね。さて、どうしましょうか……」

妖しい笑みを浮かべて席を立つリアン。

おいおいおい、何を抜かすかこやつは!?

「俺に一体何をする気だ!？」

「そうですわね……シリアの性格から言って……ふふふ、ヴァン
パイアのお株を奪うのも面白そうですわね」

リアンは、白くて細い指を俺の首に伸ばしてきた。

「何を言ってやがる!！」

俺がそう言った瞬間、館全体に轟音が鳴り響いた。
どうやら、何かが爆発したらしい。

「な、何だあ!？」

「これはまた随分速い到着ですわね。さてと、モニターとカメラ
を……」

リアンがリモコンを取り出して何やら操作をすると、目の前にカ
メラとモニターが現れた。

モニターには、あらゆる角度から玄関の様子を捉えた画像が映っ
ていて、そこには1つの人影があった。

「リアン！！ さつさとウチのヒサトを返せ！！ さもなくば、この館ごとぶっ飛ばす！！」

モニターが切り替わり、声の主、シリアを真正面から捉えた画像と、背後から捉えた画像のみになった。

どうやらシリアの真正面には巨大なモニターがあるようで、そこには俺とリアンが映っていた。

シリアはあの研究室で開発したのだろっ、白衣の上にコマンドーも真っ青なフル武装で来ていた。

……まあ、とりあえず落ち着けな、シリア。
館ごとぶっ飛ばすって俺も巻き添え喰らうから。

「あらあら、まさかそこまで怒るとは思いませんでしたわ。でも、身内を守ろうとする良い顔してますわよ」

シリアに挑発的な態度を取るリアン。

そう話したところで、突然リアンはこっちに小声で話しかけた。

「ところで、貴方はヴァンパイアですわよね？」

「あ、ああ、そうだが……」

一体何をしようと言っのだろうか？

リアンは再びシリアと向き合った。

「ふふふ、こんなことをしたらどういいう顔をするのかしら？」

そう言っつと、リアンは突然俺の首に齧りつき、そのまま食いちぎった。

辺りには俺の血が飛び散り、見るからに凄惨な状態になっている。

……いや、家では心臓貫かれたり、首斬られたり、もつと悲惨な目に遭ってるけどな。

「うぎゃあ！！ 何しやがる！！」

「なるほど、シリアが言うとおり、確かに美味しい血ですわね。それに、何て美味しいお肉でしょう。さあ、早く来ないと全部食べてしまいますわよ？」

指に着いた俺の血を舐めとりながらリアンはモニターの前のシリアを挑発する。

こら、煽るんじゃない！！ そんなことしたら俺まで巻き添え喰らうだろうが！！

モニターを見ると、シリアは何やら俯いている。
しばらくすると、

「あつつつつつたまきたあああああああ！！！！ リアン、
アンタはアタシがぶっ飛ばす！！！！！！！！」

と館中に響くような声で叫んで、手にしていたライフルのような物のトリガーを引いた。

放たれたのはビームだった。そして、あろう事かシリアはそれを撃ちつぱなしのまま1回転しおった。

直後、俺の足場が大きな音を立てて崩れだした。

大黒柱だの、全ての柱を切断したのだから当然である。

「やりますわね、ならば私も答えるとしましょう！！」

リアンは、何処から取り出したのか、大きな斧とサブマシンガンを取り出し、俺を置いたまま崩れ去る館を脱出した。

その直後、屋敷は崩壊した。

「何でこうなるんだああああああああああああ！！！！」

……俺を巻き添えにして。

* * * *

館の崩壊が止まり、眼を開けると異様な光景が広がっていた。

「はあああああ！！！」

「せいっ！！！」

2人は激しい戦闘を繰り広げていた。

シリアは、ビームで牽制しながらビームサーベルと言つべき剣で斬りかかっていた。

対するリアンは、中遠距離ではサブマシンガンを撃ち、近距離では蹴りをアクセントに加えながら白熱した斧で斬りかかっていた。

ちなみに、服は俺の血で真っ赤に染まっている。

……いい、皆まで言うな。誰がどう見たって白い何たらと赤い何かの戦闘にしか見えん。

ふと、横を見るとリオンがいた。

「全く、彼女が遊びに来ると碌な事にならん」

呆れたと言う風に溜息をつきながらリオンはそう言う。

「……遊びか？」

「ああ、そうだ。2人は学校の同級生なのだが……女子であると言つのにこつこつ戦争ごっこが好きでな」

そう話している間にも、ロケット弾が残骸を吹き飛ばし、ナパームが周囲を焼き払っている。

誰がどう見ても戦争である。

「どう考えても本気にしか見えんが……」

「まあ、どうでも良いだろう。いつもの事だ」

いつもの事なのか。此処の修理費とか誰が出すんだ？
まさか税金じゃねえだろうな？

「ところで、いい加減にどうすればあの2人と仲良くなれるか教えるが良い」

今までの話を全てぶった切ってリオンはそう言った。

…… 空気読め阿呆。

「却下だ黙れ」

「何だと！？ 我が此処まで下手に出ても駄目なのか！？」

「その何処が下手なんだよ！！ 完璧に上目線じゃねーか、口リコン！！」

「ロリコンと言っでない！！ ペドフィリアと呼ぶが良い！！」

「ちつとも変わんねえだろ！！」

「ええい、つべこべ言わずにとつと教えるが良い！！」

そのまま取っ組み合いになった。

くそ、こいつ割と力強いな。

マウントポジション取られちゃった。

「さあ、さつさと教え……」またお兄様とヒサトが……きゃあ♪

♪♪「……………」

「……………」

その状態のまま俺達は固まった。

本当に勘弁してくれ。一瞬で世界が凍りつくから。

シリアも啞然としてんじゃねえか。

しばらくして、我に返ったシリアがハリセンの一撃でまだ身悶えてるリアンを沈めた。

……そのハリセンは何処から出した？ と言うか、ビームサーベルはどうした。

「……空しい勝負だったわ。さあ、帰るわよ、ヒサト」

そう短く告げると、俺の襟首を掴んで背中 of 装備で空を飛んだ。下でリオンが何か喚いてるが聞かないことにする。

「全く……リアンがあんな奴だなんて思わなかったわよ……」

シリアが空を飛びながらぼやく。

「普段はどんな奴なんだ？」

「普段は私とあんな感じでじゃれ合う事が多いんだけどね。今日のは少しやりすぎだわ。今度しっかり釘刺しておくから」

一刻も早くそうしてもらいたい。

大体なんだって俺の周りには碌な奴が集まらないんだ？
ホントに1回死んでくれ、神様。

「いつもあんなことしてんのか？」

「いつもじゃないけど、まあそれなりにはしてるかしら？ ストレスが溜まったりした時には丁度良いしね。」

何て事の無いようにシリアはそう言った。

どうやら、本当に普段からあんな事をしているらしい。

「そうかい。だったら今度は俺の居ないところでやってくれ。正直言っであんなに巻き込まれたら堪らん」

「はいはい、とりあえずさっさと帰るわよ。 あそこにいたらヒサトの方が危ないわ」

同感だ。あそこに居たら速攻で入院できる自信がある。

折角の休みだが、今日はもう大人しく帰ろう。もう身も心も疲れ果てた。

——あ、そういえば、紅茶の代金払ってないな。

どうして俺の周りには変態しかいないのかと小一時間。(後書き)

変態領主とも推参。

何でこいつらがムシヨ送りにならないのか。

ご意見ご感想お待ちしております。

海、それは楽しむべき場所。

こないだの日記：領主の子供がとんでもなく変態だった。いいのか、これ？

「うーみーはー広いーな、おおきーなー」

夏ですね、私は今、皆さんと海に来ています。

「海ね」

「海です！！」

「海だ！！」

「海ですな！！」

「海だぜ！！」

「海だな！！」

「海ですよ！！」

「海よ！！」

「海だ！！」

「海だあああ!!」

「海——!!」

「海」

「海ですね」

……この声だけで誰が誰だか分かりますか？

——そもそも、忘れられている奴とか居るんじゃないか？ 作者も忘れてる奴が居るくらいだし——

いつもに増してキツイですね、リニアさん。
何かあつたんですか？

——別に、事実を言ったまでだ。全く、何で私が留守番何ぞ……

……

不貞腐れてるだけみたいです。

まあ、突然あんなことを頼まれたらそうなりますよね。

ちなみに今のは上から順に、リリア、ミリア、シリア、サバス、
フェイス、ガスト、ミスト、フォリーナ、ポーラ、シアン、シルフ
イ、ヘルガ、雪乃（敬称略）でした。

それにしても、凄い大所帯になってますね。

何でこんな大人数になったかと言うと、皆が知り合いをかき集めた結果こうなったからです。

え？ 何で永和じゃなくて私なのかって？

……それはですね、こんな事があつたんです。

*	*
*	*
*	*
*	*
*	*
*	*
*	*
*	*

「海に行く？ それを何で俺に言う？」

「だって、ヒサト君、水着持っていないでしょ？ だからちょつと今有る中から2種類選んでもらおうと思つて」

ぼやぼやした笑顔を浮かべてリリアが俺にそう言う。

「それは良いんだが……何処にあるんだ？ ていうか、2種類？」

訳が分からん。わざわざ着替えんといかん理由があるんだろうか？

「此方にございますぞ、永和様」

サバスがキャスター付きの台の上に水着を山ほど乗っけてやってきた。

何でこんなにあるのかは気にしないことにする。

そんな事よりも重要な点が一つ。

「ところで、1つ聞きたい事がある」

俺の発言に、相も変わらずのほほんとした笑みを浮かべたリリアが肩にかかった長い金髪を直しながら首をかしげる。

「なぐに、ヒサト君？」

「いつの間に集めたとか何で禪ふんどしとか混ざってるんだとかは置いておく。問題はだな、何で女物まであるんだ？」

これ、「俺のために」集めたんだよな？

女物があるっておかしくないか？

「それは私達が全員行くのにアリアさんを置いて行ける訳ないでしょう？」

ミリアは笑顔で何気なく俺の腕に自分の腕を絡めながら、当然のようにそう言う。

……ああ、そう言う事が、要するに俺にアリアになって海に行けってことか？

ふざけんな！！

「わざわざアリアにならなくても、俺がそのまま行けば良いだろうが！！ 大体全員行くって、留守番はどうするんだ！？」

「御心配には及びませんが、永和様。信頼できるお方に警備を依頼しておりますゆえ」

「それにね、一緒に行く人が両方を希望してるのよ。アリアはフアイスが、ヒサトはシルフィとシアンとフォーリーナがご指名よ」

シリアの一言に俺は思わずめまいを覚えた。

……うつわ、めんどくせえ連中の指名を貰ったもんだ。

このまま行けば、フォリーナに遊ばれてシルフィにへばり付かれてシアンに追い回されると言うスパルタンな状態になり兼ねん。

「悪いが、俺はパスだ。この様子じゃ俺は胃潰瘍その他で病院送り……」

と言いかけたところで背中に悪寒が走った。

ぼんっ、と俺の左肩に後ろからサバスの手が置かれた。

いつの間に後ろに回ったんだ、アンタ？

「……永和様？ 執事たるもの、主の依頼には可能な限り最大限に答えるものですぞ？」

サバスは笑顔だったが、眼は赤く鋭い光をたたえていた。

何て言うか、どこぞの漫画の執事宜しく「逆らったら狩る」と視線で告げているような気がした。

「ハイ、ワカリマシタ……」

俺は結局、海に行かざるを得なくなった。永和とアリア両方で。

* *
* *
* *
* *
* *
* *
* *
* *

……なんていう、よくある漫画のノリで海に連れて行かれることになったのでした。

午前中を私が受け持って、後を永和で受け持つことになっています。

私に渡された水着は白いセパレートの水着です。

胸元が苦しくて、正直慣れません。

ちなみに、選んだのはミリアさんです。

あ、それから他の皆さんがどんな格好をしてるか気になる人もいますでしょうか？

えーっと、ビキニの人がリリアさん、ミリアさん、シリアさん、ポーラさんで、色は順番にライトグリーン、オレンジ、白地にブルーのストライプ、スカイブルーですね。

ミリアさんにはパレオが着いてます。

レーススクリーンみたいな水着の人がミストさんと雪乃さんで、色は赤と青。

私と同じような水着がシルフィさん。色は水色。

シルフィさんのはヒマワリの柄が入ってます。

その他、シアンさんは競泳用の水着、ファイスさんとガストさんは普通に海パンですけど……つっこみたい人が何人が居ます。

「さて、今日は何人落とせるかしら？」

まずはプロポーション抜群のフォーリーナさん。

幾らなんでも眼のやり場に困ります。形的にはV。

それに発言が不穏当です。

貴女の目的は逆ナンパですか？

「ヘルガさん、何でその水着なんですか？」

「……有るのに使わないのは勿体無い」

次に褐色の肌もまぶしいヘルガさん。

幾らなんでも胸に「へるが」と書かれたスクール水着はやめたほうが良いと思います。

リオンさんみたいな人に声を掛けられたらどうするんですか？

「ほっほっほ。さて、久々に遠泳に行きますかな！！　アリア様、申し訳ありませんが皆様のことは頼みましたぞ！！」

豪放磊落に笑いながらやたらとキレのあるラジオ体操をするサバスさん。

彼の水着は風に揺られて白くはためく禪で、鍛え上げられた芸術的な肉体と驚くほどマッチしていました。

「質問です。何で禪なんですか？」

「ほっほっほ！！　漢たるものやはり禪でなくてはなりませぬ故。このサバス、まだそこいらの若造には遅れを取るつもりはございませんぞ？」

仁王立ちして意気込んでいるところ済みません、少しやめて欲しいです。似合います。

そんな中、少し離れたところで皆を見ている人がいました。

「どうっすかね、ガストさん？」

「そうだな、子供達は除くとして、見たところリリアさん>フオリナさん>アリアさん>ミスト＝シアンさん>雪乃さん＝ミリアさん>ポーラさん>シリアさんといったところか」

「ところで数値は分かりますかね？」

ファイスさんに言われてガストさんが女の子達を凝視します。
正確には胸元を。

「そうだな……ミストが85だから……上から93、89、88、85、85、83、83、80、78ではないかな？」

……ガストさんの発言を聞いて思わず胸を隠した私は間違っていると思います。

な、何でわかるんですか、ガストさん……

「スゲエ、姉貴のは当たってるし。と言うことは、これが……でも、何で分かるんだ？」

「経験だ。結婚するまで色々な人からお誘いを受けたからな。君もその内出来るようになる」

驚いた表情を浮かべるファイスさんに、ガストさんは白い歯を見せて笑います。

……済みません。2人とも、それ軽くセクハラです。

ていうか、ガストさん、意外とプレイボーイだったんですね。

「あゝなゝたゝち？ さっきから2人で何を話してるのかしら？」

そんな2人の後ろに気が付けば笑顔の修羅が立っていました。凄い迫力です。

「うわっ、ミストさん!？」

「は、ははは、いつから聞いていた？」

純粹に驚くフェイスさんと、引きつった笑みを浮かべるガストさん。

「あなたが名前を列挙している辺りからです」

「で、俺達どうなるんすかね？」

「お・し・お・き・です」

ミストさんの、可愛らしい死刑宣告でした。

その後、ミストさんが2人まとめてブレンバスターをかけて、頭が砂に埋まった男の人のオブジェが2つ出来上がりました。

自業自得です。しばらく反省した方が良いと思います。

「それじゃーみんなー、時間になったら集合場所に集まってー
そしたらお昼にするからー」

「皆さん、楽しんでくださいね？」

「そんじゃま、とりあえず解散!！」

主催の3人が音頭を取って皆さん思い思いの事をし始めます。

「それでは、私めはあちらの島まで行って参ります」

「分かりました。気をつけてくださいね？」

サバスさんはそう言うのと、物凄い速さで海面を切り裂くように泳ぎ始めました。

傍から見ると魚雷みたいです。

……あの島まで何km有るんでしょうか？ かなり遠くにあるんですけど……

「おい、アリアちゃん！！ こっちでビーチバレーやらない？」

ポーラさんから声が掛かりました。

隣にはシアンさんと雪乃さんが居ます。

ビーチバレーですか、面白そうです。」

「あ、はい。」 やりま〜す。」

「よし、これで面子が揃ったな。チーム分けはどうする？」

何やらシアンさんは物凄く意気込んでます。

で、手加減してくださいね？

「えっと、アリアさんはヴァンパイアなんですよ？。」

雪乃さんが私の種族を確認しに来ました。

種族によって身体能力に差が出るんで、当然ですね。

「はい、そうですよ。」

「ふむふむ、それじゃあ身体能力の高いガーちゃんとアリアちゃんは別のチームね」

ガーちゃん？ 誰のことでしょうか？

私が考えていると、突然シアンさんが怒りはじめました。

「おい、ガーちゃん言うな！！」

ガーちゃんってシアンさんのことだったんですね。

でも、何でシアンさんがガーちゃんなんでしょうか？

「あの、何でシアンさんがガーちゃんなんですか？」

雪乃さんも疑問だったらしく、ポーラさんに聞きます。

「それはだね、シアンは人狼でしょ？ で、やっぱり狼になれる訳なんだけど、その時の鳴き声がガウガウって鳴いたからガーちゃんって呼ぶことに……」

面白い話を話すようにポーラさんはそう言いました。
からかう気満々ですね。

「だから言うなっつってんだろ！！」

「あは、ごめんごめん。それじゃ、まずは適当にシアンと雪のん、私とアリアちゃんまでチームね。それじゃ、試合開始！！ 最初はこっちサーブ！！」

青白い髪を振り乱して憤慨するシアンさんに反省の色が全く見えない謝り方で謝ると、ポーラさんはボールを持ってコートに立ちま

した。

「いづくよー！！ そりゃあー！！」

ポーラさんが元気よくサーブをすると、すかさずシアンさんがレシーブに入りました。

それを雪乃さんがトスして、

「はああああー！！！！」

シアンさんが強烈なスパイクを打ってきました。

空中で弓形になって、全身をフルに使った完璧なスパイクでした。

「うひゃあああ！？」

ポーラさんの近くに突き刺さったボールは周囲に砂を巻き上げて埋まりました。

……ポーラさん、避けて正解だと思います。

恐らく当たったらただじゃ済まないと思います。

「ちよっと、シアン！！ 少しは手加減してよ！！」

「わりいわりい、久々だったもんで力加減を間違えた。んじゃ、今度はこっちがサーブだな。そらー！！」

ポーラさんの抗議に、パタパタと手を振りながら謝るシアンさん。……さっきの仕返しなんですな、今の。

そんな事を考えてると、シアンさんのジャンプサーブがこっちに飛んできました。

「やああああっ!!」

私はそれをヘッドスライディングみたいに滑り込んでレシーブします。

「アリアちゃん、頼むよ!!」

それをポーラさんがトスします。

えっと、多分シアンさんの性格上、絶対にブロックに入りますよね。

なら……

「させるかああ!!」

「えいつ」

「なっ!?!」

案の定ブロックに入ったシアンさんの手の上をギリギリ越えるようにボールを押します。

山なりの軌道を描いたボールはシアンさんの足元に転がりました。

「やるじゃん、アリアちゃん!!」

「えへへ、上手く行きました♪」

ポーラさんとハイタッチをしていると、何やら後ろから不穏な空気が流れてきました。

「へえ、やるじゃないか。……こりゃ本気を出さないとかねえ?」

「あ、あの、シアンさん、落ち着いて……」

ゆらりと言う擬音があつてそんな雰囲気醸し出すシアンさん。

……どうやらシアンさんに火を着けちゃったみたいです。

雪乃さんの静止も聞こえていないみたいです。

と、とりあえず、私のサーブですね。

「えりやつ!!」

サーブはやっぱりシアンさんが受けて、雪乃さんがトスを上げます。

「せいやあつ!!!!」

今度は手加減無し of 強烈なスパイクが私に飛んできました。
それにレシーブしようとしたが、

「うひゃあああ!!」

レシーブしたボールは鉛玉のような重さで、受けた私は後ろに転んでしまいました。

勢いを殺しきれなかったボールは、コートの外に飛んで行きます。

「ちょ、大丈夫? アリアちゃん?」

「は、はい……大丈夫です……」

「よし、次はこっちのサーブだな」

シアンさんは止まる気配がありません。

その後、シアンさんによる一方的なゲーム展開が続き、ポーラさんがシアンさんのスパイクでKOされるまでビーチバレーは続きました。

「うきゅ……」

ポーラさんはベンチに寝そべって眼を回しています。

……凄いのが顔に入りましたからね……空中で2回転してうつ伏せに倒れる威力って……

「ポ、ポーラさん、大丈夫でしょうか……？」

「あちゃゝ 少し熱くなりすぎたか……おい、ポーラ、生きてつか？」

心配そうに話す雪乃さんに、目の前で手を振って無事を確認するシアンさん。

「目の前がプラネタリウムだよ……」

眼をぐるぐると回しながらポーラさんは返事をします。

……やっぱりかなりの重傷みたいです。

シアンさん、あれほど手加減をしてくださいって言ったのに……

「……重傷だな。アタシはポーラを休憩所に運んでくる。ビーチバレーはお開きにした方が良さそうだ」

そう言つと、シアンさんはポーラさんを肩に担いで休憩室まで運んで行きました。

「私はポーラさんの看病をしています」

雪乃さんはその後を追ってついて行きます。

「それじゃあ、私は他の人のところに行つてますね？」

そう言つて、私は他の人たちの所に行くことにしました。

「アリア、覚悟！！」

「え、きゃああああ！？」

後ろからシリアさんの声が掛かったので振り返ると、顔に水鉄砲をかけられました。

中身は海水みたいで、目に沁みて痛いです！！

「い、いきなり何をするんですひゃあああああ！？」

今度は胸元に水鉄砲を撃たれました。

具体的には谷間部分に。物凄く悪意を感じます。

「ちょ、シリアさん！？ やめてください！！ うきゃあ！？」

「はっはっは！！ うりゃうりゃゝ、もがけもがけ！！」

シリアさんは心の底から楽しそうな声で私に水を掛けます。
そうやって騒いでいると、

「えいつ！！ 2人とも隙あります！！」

「「ぷぎゃあああ！？」」

今度はミリアさんがバケツに海水を汲んで私達にかけました。
あまりの水圧に2人とも少し跳ね飛ばされます。

「ちょっと、ミリ姉！！ やりすぎよ！！」

「まだまだあゝ そおゝれ！！」

「「うにゃああああ！！？」」

シリアさんの抗議も全く効果を示しません。
起き上がる間も無くどんどん水を掛けてきます。
み、ミリアさん…… 過激すぎます……

「そゝれ、もう1回！！」

「甘い！！ アリアシールド！！」

「わきゃああああ！！」

ミリアさんが放った海水は、シリアさんの盾になった私の胸を直
撃しました。

物凄く痛いです。やっぱり、微妙に悪意を感じます。

「こうなりや私もバケツで勝負よ！！ ミリ姉、覚悟！！」

「させません!!　アリアさんシールド!!」

「きゃうううう!!」

今度はミリアさんの行動を、そっくりそのままシリアさんがしました。

狙われたのはやっぱり胸元、ミリアさんとは比べ物にならない悪意を感じました……

私はしばらく2人の盾になった後、開放されました。

私が立ち去った後も、壮絶な水掛合戦が繰り広げられてました……
辺りの砂浜はバケツの水の水圧で思いつきり決れてました。

あうう、胸が痛いですう

少し水着を引っ張って中を見てみると、真っ赤に腫れ上がってました。

シクシクシク、何でこんな目に……

少し休もうと思って岩場のほうに行くと、見知った人影がありました。

「……それにしても、こうして2人きりで海を見るのは何年ぶりだったかな、ミスト」

「3年ぶりですよ、あなた。あの時もこんな風に磯に座って海を眺めてました」

そこに居たのは渋い銀髪のナイスミドルのフランケンシュタインと、亜麻色の髪の美しいマリオネットさんでした。

2人は岩の上に寄り添って座ってます。

何て言うか、空気がとっても甘いです。

「違うのは目の前にあるのが夕日じゃなくて入道雲というところだな」

「でも、隣にあなたがいるのは変わりませんよ」

そういうと、ミストさんはガストさんに身を預けました。

……邪魔しちゃ悪いですね。他の所に行きましょう。

ほかの人を捜して砂浜を歩いていると、

「よお、姉ちゃん。俺たちと遊ばねえか？」

なぐんていう、良くある恋愛ゲームでヒロインがかけられるような声が掛かりました。

……私、本当は男の子なのに……orz

「あ、あの、私連れが居るので……」

「えゝ、良いじゃんかよゝ」

さっきからこの調子です。何とかならないでしょうか……
周りを見回して見ると、フェイスさんを見つけました。

フェイスさんも私に気付いたみたいで、1つ溜息を吐いてこっちにきました。

「何やってんだよ、アリア。またナンパされてんのか？」

「え、あ、はい……済みません、ファイスさん」

「何だ？ それ、姉ちゃんの彼氏？」

怪訝そうな顔でナンパしてきた人がこっちを見ます。
えっと、こういう場合は……

「はい、そうですよ？ さ、行きましょ、ファイスさん」

「ああ」

ファイスさんの手を笑顔で取って、走り出します。
さっきの人は追ってこないみたいです。

ファイスさんはまた1つ大きなため息を吐いていました。

「ありがとうございます、ファイスさん。お陰で助かったよいました」

「まったく、夏の海を君みたいなのが1人で歩いたら絶対あななるって。はつきり言うけど、アリアちゃんは凄く可愛いんだからさ」

ぬれた金髪から水を滴らせながら、ファイスさんは溜め息をつきました。

か、可愛いって……シクシクシク……

「どうかしたのか？ 俺、何か気に障るようなこと言っちゃったか？」

項垂れてる私を見て、ファイスさんが慌てだしました。

いけません、今は女の子なんですから、普通は喜ぶところですよ。ね。

「い、いえ！！ あんまりそういう事言われ慣れてないので少し……」

「そつか。もうちょっと自分に自信を持って良いと思うぜ。魅力が無いって言うんならさっきみたいにナンパされたりしないんだしさ」

「は、はい。ありがとうございます……」

……我慢です。少し泣きたいですけど我慢です。が、頑張つて明るく振舞わなきゃです！！

「そうだ、さっきみたいな奴に絡まれるかも知れないから、俺と一緒に回らないか？俺も結構周りから声が掛かって碌に遊べないしさ」

「やっぱりインキュバスも大変なんですね。良いですよ。そういう事なら一緒に行きましょう」

「よし、決まりだな。……あれ、俺、自分がインキュバスだなんて話したっけか？」

ファイスさんはそう言うと言った首をかしげました。

あ。そういえばまだ私は聞いていないんです。

「えっと、永和さんから聞いたんです！！ 私が始めて応対した客人だったので、どんな人かなと……」

「なるほどね。興味を持ってもらえるとは幸いだな。それじゃ、何処に行く？」

ファイブさんはそう言っていると普通の女の子なら簡単に落ちちゃいそうな笑顔を浮かべました。

ふう……何とか切り抜けられたみたいですね。
さて、何処に行きましょうか？

「この辺りに良い場所って知ってますか？」

「うーん、幾つか知ってつけど……あ、そうだ。この辺りならペンギンが見られたはず。見に行ってみるか？」

ペンギンさんですか……少し興味もありますし、行ってみましょう
う

「良いですね、それじゃ、行ってみましょう」

「OK、決まりだな。それじゃ、こっちだ」

私はファイブさんの後をついて行って、ペンギンさんが集まる場所に向かいます。

ペンギンさん、ペンギンさん

一体どんなペンギンさん何でしょうか

——くくく……精神は体に引きずられるとはよく言うが、少々引きずられ過ぎてないか、お前？ 可愛い思考がただ漏れたぞ？—

るんるん気分で居ると、リニアさんが含み笑いをしながら話しかけてきました。

……うっ、何て事言っんですか、リニアさん！！
シクシク、男の子なのに可愛いつて……

——悪かった。だが、男であるということを忘れるな。もっとも、アリアのほうを主人格とするのなら話は別だが——

分かってますよう。私は男を捨てるつもりなんてないんですから。

「アリアちゃん？　どうかしたか？」

リニアさんと話しているのがぼーっとしているように見えたみたいで、ファイスさんが碧い目で心配そうに私の眼を覗き込んでいました。

いけません、ファイスさんを待たせちゃったみたいですね。

「あ、ごめんなさい！！　今行きます！！」

ファイスさんに連れられて行った先は、小さくて綺麗な入り江でした。

海はエメラルドグリーンで、砂は真っ白でした。

「うわ、綺麗ですね」

「ここは殆ど知られていない穴場でね、海水浴場からあんまり遠いもんだから人が中々来ないんだ。ペンギンを見るだけなら反対側にも見やすくて近い場所があるんだが、アリアちゃんは人ごみが苦手そうだからな」

流石はファイスさん、女の子に対する気遣いはピカイチですね。私としては複雑ですが……

すると、ふくらはぎに何かひんやり冷たい感触を覚えました。

下を見ると、そこには1匹のペンギンが居ました。

海のほうを見ると、入り江にどんどんペンギンが上がってくるのが見えました。

「はうゝ、可愛いですゝ」

「お、来たな。アリアちゃん、少し座ってみなよ。面白い事が起きるから」

何でしょうか、面白いことって？

私はとりあえず言われたとおり座ってみることにしました。

すると、私の周りに沢山のペンギンが集まってよじ登り始めました。

もう膝の上はペンギンで一杯です。頭の上にも1匹居ます。

みると、ファイスさんの足元にも沢山のペンギンが集まっています。

「はうはう、可愛いですうゝ でも、どうしてこうなるんですか？」

「あー、確か、ペンギンは海で泳いだ後、下がった体温を上げるために日光浴をするんだよ。んで、今の時点では俺たちのほうが体

温が高いもんだから、暖を取りに来てるって訳だ」

「そうなんですか。きゃあ、くすぐったいですよ!!」

ファイスさんと話していると、私が抱いていたペンギンさんが胸の間に挟まってジタバタしていました。

日向ぼっこでお腹が暖まったので、背中にお日さまを当てたかったみたいです。

体を入れ替えると、ペンギンさんは私にべったりと貼りついてきました。

どうやら私の体が暖かいみたいです。

「……このエロペンギン……」

その様子を見て、ファイスさんが何か言っていたみたいです。が良く聞こえませんでした。

しばらくすると、暖まったのかペンギンさんはまた海に戻って行きました。

少し名残惜しいですけど、お別れですね。

「さてと、そろそろ昼飯時だな。じゃ、集合場所に帰るか」

「そうですね。ファイスさん、どうもありがとうございました」

私がお礼を言うと、ファイスさんは少し照れくさそうにそっぽを向いて、

「あ、ああ。気に入ってもらえて良かった」

と返事をしました。

海、それは楽しむべき場所。（後書き）

改訂に次ぐ改訂。

一昔前の文に手を加えようとすると、どうやって改善すべきか考えなきゃならんから、軽く編集者になった気分を味わえる。

それではご意見ご感想お待ちしております。

バーベキューですよー！！……あれ？

この前のにつき：皆さん海を楽しんでくれてるみたいですよ

集合場所に戻る途中、何やら砂浜に崩れ落ちた男の人の群れを見つけた。

皆どうやら泣いているみたいです。

「一体何があったんでしょうね、ファイスさん？」

「は、はははは……こりや多分姉貴の仕業だな……またこんな被害者を出してまあ……」

……ファイスさんの眼は遠い眼をしてました。

ファイスさんが海を眺めていると、突然海の方を見て固まりました。

「……おい、あの沖に浮かんでるのリリアさんじゃないか？」

「え？」

私が沖を見るとそこには浮き輪にはまって浮かんでいるリリアさんが居ました。

どうやら寝てるみたいで、どんどん沖のほうに流されています。

「た、大変ですっ！！な、何とかしないと……」

私がそついった瞬間、

「……何だ、ありゃあ……?」

ファイスさんは指を沖を指差して言いました。

何かが居るみたいですが、それが何かは良く分かりません。

それはリリアさんのところへ魚雷みたいに猛スピードで真っ直ぐに向かつてました。

「り、リリアさん!! 起きてくださーい!! 危ないですよー!!」

私は大声でリリアさんに声を掛けましたが、リリアさんからの反応はありません。

そうこうしてる間に、影はリリアさんに近づいて……
その浮き輪を引っ張って浜辺に近づいてきました。
その影は、海から上がると、

「ふう。全く、肝を冷やしましたぞ。リリア様、お目覚め下さい、昼食の時間ですぞ!!」

「ふ、ふえ? うゝん、もうそんな時間?」

と言ってふんどし一丁の紳士が、金髪のお姉さんを起こしに掛かりました。

あの影はサバスさんだったんですね。

……泳ぐ姿が魚雷に見えるって、どうなのでしょう?

「サバスさん、何を背負ってるんだ?」

「ほっほっほ。無人島からの帰りに魚を見つけたので少し漁をしておりました。」

背負われているのはカツオ2匹、アジ数匹。

……サバスさん、貴方、何者ですか？ 濱。優ですか？
と言うより、どうやって仕留めたんですか？

「さて、帰って調理に掛かるとしましょう。アリア様、お手伝いいただけますかな？」

「あ、はい。それじゃ、皆さん、集合場所に行きましょうー！」

「そうね、おなかも空いたし」

「そうすつかね」

集合場所に向かって歩いていけると、海の家に見知った顔を見つけました。

褐色の肌にスクール水着をつけたヘルガさんと、かわいらしいヒマワリの柄の水着をつけた白い肌のシルフィさんでした。

「ね、ねえ、ヘルガちゃん。この後お昼だよ？」

「もぎゅもぎゅ……大丈夫。子供は食べ盛り」

「そういう問題じゃないでしょ……」

……ヘルガさん、黙々と焼きとうもろこしを食べてます。その横

には既に3本の芯が転がっています。

シルフィさんはヘルガさんの説得に掛かっているみたいです。

「皆さん！！ お昼にしますよ！！」

私が声を掛けると、

「……分かった。すぐ行く」

少し弾んだ声でヘルガさんは返事をする、あつという間に焼きとうもろこしを食べ終わりました。

えっと、比較するなら、志村。んのスイカの早食い芸と同等でしょうか？

集合場所に着くと、私とサバスさんは早速調理に取り掛かりました。

お昼はバーベキューと、さっきサバスさんが取ってきたお魚です。カツオは軽く炙って叩きにして、アジは新鮮さを生かして刺身にしました。

……何だかとてもアンバランスですけど、皆喜んでもらっているみたいなので気にしません。

「ハムハムむしゃむしゃモキュモキュこっきゅん。はむはむムシヤムシヤもきゅもきゅゴツキュン」

「ふわ……すごい……」

「ヘルガの胃はどうなってるのよ？」

ヘルガさん、ものすごい勢いで食べてます。

えっと、さっき焼きとうもろこし食べてましたよね？ それも何本も。

「あつ！！ ヘルガ、それアタシが取ろうとした奴！！」

「……バーベキューや鍋物、その他大皿料理は弱肉強食。それが家の教え」

目の前で焼かれていたお肉を掻っ攫われて、シリアさんがヘルガさんを睨むと、ヘルガさんはそう言って返しました。

どんな家の教えですかっ！？

ヘルガさんの家の食事は毎日が戦争とでも言うんでしょうか！？

「……良い度胸ね。その勝負、乗った！！」

ああっ、シリアさん！！ 触発されないで下さい！！

2人によって物凄いスピードで料理が消えていきます。

え？ ヴァンパイアは血の方が良いんじゃないかって？

確かに栄養効率は良いんですけど、普通のお食事でもちゃんと栄養は取れます。

だから、皆と食事をするときにはこうして一緒に食べるんですよっ

「ほっほっほ。まだまだ沢山有ります故、心配なさらずどんどんお食べ下さって構いませんぞ？」

私とサバスさんでどんどんお肉を焼いていきます。

それにしても、凄い量のお肉ですね。食べ切れるんでしょうか？

「ちょっと、アリア。少し相談があるんだけどさ」

私がお肉を焼いてると、シアンさんが空のお皿を持って私の所に来ました。

「何ですか？ シアンさん」

「出来れば生肉で少し欲しいんだけど。ほら、アタシ人狼だし」

あ、そうでした。シアンさんたち人狼は、体質上野菜が食べられないんで、生肉を食べないと栄養が上手く取れないんでしたね。焼いちゃうと壊れちゃう栄養もありますし。お皿に少し多めに生肉を乗つけて渡します。

「はい、どうぞ。量は多いんでしっかり食べてくださいねっ」

「サンキユ。よし、これ食べて、後で奴がきた時に頑張るとするか！」

やたらと気合を入れて食べ始めるシアンさん。

……もう少し少なかったほうが良かったかもしれません。この後行くのが鬱になります。

「ア・リ・アちゃん」 どう？ 楽しんでる？」

「ふにゃああ！？」

お肉を焼いていたらフォリーナさんが後ろから抱きついてきました。

手はすっかり私の胸を掴んでいます。さっきの水掛で腫れているのでかなり痛いです。

「い、いきなり何をするにやああああ!？」

私が一言言おうとすると、フォーリーナさんはグニグニと握っていました。

「フフ、良い反応。でも、流石に子供が居るからこれでお終い」

「それなら最初からしないで下さい!! 大体なんでこんなことしたんですか!？」

私がそう聞くと、悪びれた様子もなく、こう答えました。

「んゝ、したくなつたから?」

……もう、良いです。この人のマイペースぶりには付いていけません。

この人は放つといってお肉を焼くことに専念しましょう。

「はい、あゝんゝ どうですか、あなた? 美味しいですか?」

「うむ、美味しいぞ」

バーベキューの一角では、ミストさんがガストさんにお肉を食べさせていました。

それにしてもお肉を焼く火に負けないくらい2人も熱いですねゝ

あの御夫婦の周りだけ別の空間になってます。

「アリア様。後は私めが引き受けますので、どうぞ昼食になさってください。久々に熱い戦いになりそうですね」

サバスさんがお肉を焼きながらそう言ってきました。
目線はヘルガさんとシリアさん、その眼は強敵に挑む勝負師の眼をしていました。

……今日になって分かったことですが、サバスさんって凄く熱い人だったんですね……

勝負に水を刺しては悪いので、お皿を持って自分が焼いていたお肉を少し食べる事にしました。

んゝ、脂が乗っていて凄く美味しいです♪

ふと雪乃さんの姿が見当たらないので周りを見てみると、ポーラさんと一緒にお魚をつついてました。

「いやゝ肉もいいけど、魚も美味だわ」

「そうですね。このお魚は獲れてから1時間も経っていないみたいですから新鮮で美味しいです」

お肉に夢中な皆さんに比べて随分平和ですね。
そこに少し疲れた表情でフェイスさんがやってきました。

「あゝしんどい。やっぱり最近運動不足かねえ、俺。あ、少しその魚くれるか？」

「はい、どうぞ」

ファイスさんの要望を受けて、雪乃さんがお刺身をファイスさんに手渡します。

「サンキュ」

「って言うか、後ろから刺されて入院してたんだから仕方ないんじゃない？」

「それもあるんだろうな……お、美味い」

ファイスさんは鰯のお刺身を食べると、戦場になっているお肉の場所を見ました。

シリアさんは満足したのか勝負から抜けていて、代わりにシアンさんがヘルガさんと勝負していました。

勝負は周りを巻き込んで白熱したものになっています。

……皆さん、女の子ですね？ もう少し落ち着いて食べたほうが……

それに対して、それを上回るペースでお肉をサバスさんが焼いていきます。

「ったく、どんだけ食うんだよ、あいつ等。落ち着いて食べねえし」

「ホントにねえ。ま、私等はこっちでゆっくり魚を食べてましょ
うや」

「賛成です。私はあの状況にはついていけそうもありませんし」

あきれ果てたっていう感じで話すフェイスさんに同意するポーラさんと雪乃さん。

私もお魚の方に行きましょう。少し疲れましたしね。クーラーボックスからジュースを4つ取り出して持っています。

「皆さん、私も御一緒させてもらって良いでしょうか？」

「お、いいよー!!」

「もちろん、良いぜ」

「では、こちらが空いてるのでどうぞ」

1つの大皿を4人で囲むような形に座ります。

私はジュースを配って、お魚を食べる事にしました。アジのお刺身をお醤油につけて食べます。

んー、おいしいですー 中々ここまで新鮮なものは食べられませんからねー

カツオもおいしそうですね。それじゃ、一口……

そうやって食べていると、周りから視線を感じました。見ると、3人とも私の顔をじっと見ています。

「あれ？ 皆さん、どうかしたんですか？」

「いや、刺身を食べたびにあんまり幸せそうな顔をしてるもんだからつい、な」

「いやー破壊力抜群の笑顔だったわ」

「本当、可愛らしかったですよ。さ、まだありますのでお食べ下

さい」

皆さん暖かい笑顔で私の顔を見ながらそんな事を言いました。
……もういいですよ。だ。こうなりや開き直りですつ。

「ありがとうございます。それじゃ、いただきます。」

それからしばらくの間、私が食べてるのを見て周りが和むって言う、よく分からない構図が出来ていました。

……なんか納得がいきません。

ひとしきり食べてお腹も膨れたので、私は他の人を見て回ることにしました。

「えっと、少し他の人たちの様子を見てきますね」

「ほいほーい。いつてらっしゃーい」

見ると、お肉は殆ど無くなって、皆が食べ切れなかった分をサバスさんが食べていました。

サバスさんの顔には清しい笑みが浮かんでいました。

……どうやらスッキリしたみたいです。

皆少し食べ過ぎたのか、思い思いに休んでいます。

さてと、後確認してないのはリリアさんとミリアさんですね。

見たところ、この近くには居ないみたいです。

シリアさんも居なくなってますし……何処に行ったんでしょうか？
探し回っていると、岩場の影に休んでいる金色のツインテールを発見しました。

「シリアさん、いっぱい食べてたみたいですけど、大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫よ。だいぶ食べたけど、あと少しなら入るわよ」

「そんな無理して食べなくてもっ!？」

私がシリアさんと話していると、後ろから両腕を取られました。どうやら、リリアさんとミリアさんみたいです。

「ふっふっふ、引っかかったわね」

右腕をしつかり抱えているのはリリアさん。いつもの笑顔が怖いです。

「食後のデザート確保ですね」

左腕を捕まえてるのはミリアさん。視線はじっと私を見ています。

「さて、覚悟は良いかしら？」

前からゆっくりとにじり寄ってくるシリアさん。

手の動きが不穏です。やめて下さい。

はうっ、どうやら罠に掛かっちゃったみたいです。

「ちょ、ちょっと皆さん!？ 私この後もあるんですよ!？ 動けなかったら困るんですけど!？」

「大丈夫よ　手加減くらいはするから」

「そういえば、貴女の血を貰うのは久しぶりですよね？」

「最近中々隙を見せてくれないしね。外に出ていることも多いし」

3人とも私を話すつもりはないみたいです……

もう諦めたほうが良さそうです。

私はがっくりと項垂れました。

「それじゃ　アリアちゃんの肝が据わったところで」

「「「いただきます」」」

「はうっ――！」

号令と同時に皆さんが私に噛み付きました。

リリアさんが首筋、ミリアさんが脇腹、シリアさんが太ももです。

「はむっ……アリアちゃんの血って、んちゅ……甘いのよね」

……んむっ……」

「ひうっ……あ、あんまり首は……ひゃあっ――！」

はうはう、やっぱり首筋は駄目です……こらえきれません……

「んっ……そうですよ、姉さん……ちゅる……アリアさんは首が

弱いんですから……れる……」

「あうっ――！　わ、脇腹も舐めたりはちょっと……きゃうっ――？」

脇腹も勘弁してください……くすぐったくて……声が我慢できません……

「はあ……どうやら脇腹も弱いみたいね……んくっ……ホント、アンタ弱点だらけじゃない……ちゅ……」

シリアさん、内ももは拙いですって……その……色々と……あ、ああ、目が霞んできました……

「あ、あうっ、み、皆さん、も、もう眩暈が……」

私がそう言うと、3人とも口を離しました。私は、その場にへたり込むように座りました。

「あらあら、少し吸いすぎちゃったかしら？」

「もう少し早く切り上げるつもりだったんですけど、アリアちゃんも彼も美味しくて可愛いから、つい進んじゃうんですよ」

「まあ、要するに、アンタの自業自得よね」

皆さんは悪びれた様子もなくそう言いました。

「り、理不尽です……」

何なんですか、その滅茶苦茶な理論は……

私はちつとも悪くないと思うんですけど!?

「さてと、皆に連絡しないといけませんね」

「そうね。それじゃ、アリア。向こうに行くわよ」

「突然居なくなったら皆心配するから、ちゃんと帰るって事伝えないとね」

そうでした。午前中だけでも結構な密度でしたが、まだ午後があるんです。

3人と一緒に皆さんのところへ行って、私が帰って、代わりに永和が来る旨を伝えました。

「さて、メインディッシュの到着ね」

「ヒサ兄が来るの！？ わーい、いっぱい遊んでもらおう」

「ふっふっふ。早く来いヒサト。今日こそ貴様に土の味を教えるやる……」

至るところから上がる不穏な声。不安です。とっても不安です。

何だか、生命の存続のためにはアリアのままの方が良い気がしてきました。

「そ、それじゃお先に失礼しまーす！！ 皆さん、楽しんでくださいねー！！」

走って車に向かい、手早く私服（男物）に着替えます。名前が出てからもつすぐ5分が経つんで、そろそろ……

* * * *

はあ…… ったく、鬱だ。

3つの死刑宣告を喰らった状態で出て行かなきゃならんのか……
溜息ばかり吐いていても仕方ないか。

覚悟を決めて出よう。

……願わくば、生きて家に帰れますように。

どこに居ようが犬が居るなら猛犬注意だ。

こないだの日記：かくして、俺は処刑台に向かう。って言うか、まだ一日終わってねえだろうが。

俺は今海に向かって1人歩いている。

心境はこの青い空に相応しい最高の気分……

……ではなく、吹きすさぶ嵐の中修行をする山伏のような心境だ。何しろ既に胃潰瘍フラグが2つに、複雑骨折フラグが1つ立っているからだ。

これが死亡フラグだったらどれだけ良かったことが。

ヴァンパイアはそう簡単には死ねないので、こういうフラグは幾ら消化したって何本でも立つ。

……過ぎたことを気にしてもしようがない。

今すべきことは行くのを渋ることではなく、これから先どう切り抜けるかを考えることだ。

まあ、とりあえずは顔を出すことにするか。そうしないことには何も始まらない。

他の連中が見えてきたので手を振ってアピールする。

「おい、来たぞー。遅くなった」

うーん、我ながらやる気の無さ全開のあいさつだ。
だと言っのに、

「あ、ヒサ兄きたー!!」

と言う声と共に飛びついてくる天使1名。

ああんもう。貴女はパブロフの犬ですか？

私を見ると反射的に飛びついてしまわれるのですか？

「……相変わらず反応早い」

隣に居た人間が気付かないってどれだけの早さだ。

今、シルフィは俺の腕にぶら下がっている。

周囲の生暖かい視線が俺の心臓を抉り、胃に穴を空け始める。

「ねえねえ、何して遊ぶ〜？」

そんな俺の状況を他所に、シルフィは満面の笑みである。しかし、何して遊ぶと言われてもだな……

「悪い、俺着いてすぐだから少しだけやすま……なくて良いや、やっぱ。そっちで決めてくれ」

何故一旦シルフィから逃れようとして途中でやめたかつて？
そりゃオメエさん、ここで逃げたら明確な敵意を持った奴を相手にしねえといけねえんだぜ？

「……ちつ、逃げやがったか」

そう、その狼女とか。もうやる気満々だな。

「ん〜、私思いつかないや。砂のお城はさつき作ったし……」

「……たこ焼き食べる」

……あれだけ食べてまだ食うつもりなのかよ。

「流石に無理だよ、ヘルガちゃん……」

即座に反対するシルフィ。

昼飯から1時間どころか15分も経っていないので同然である。

「……しゅん……」

それを聞いてどこと無く残念そうな顔をして頂垂れるヘルガ。
いや、正直基本あまり表情が変わらんから何となくそう見えるっ
てだけだが。

それにしても、そんなに落ち込むことなのだろうか？
やれやれ、沈んだ気分じゃ楽しめんだろうし、少しフォロー入れ
とくか。

「あゝ、別に今じゃなくても良いんじゃないか？ 皆が落ち着い
て、おやつ時になったら皆で食べようぜ？」

俺がそう言うと、ヘルガの表情は途端にパアッと明るいものに変
わった。気がする、多分。

……案外面白いな。

「それで、これから何すんだ？ 生憎と俺は思いつかんわけだが
……」

「うゝん、思いつかなかったら、いつもみたいにお話で良いんじ
やないかな？」

そりゃあ良い。俺も疲れないで済む。

何しろ俺はこの後狼とファイトしなきゃなんのでな。

……嘘です、実際は俺が一方的に逃げるだけです。あと、ヘタレとか言うな。

まあ、ヘルガも合意したし、お話の時間と行きますか。

3人、いや、2人で向かい合うようににして座る。

で、シルフィは俺の膝の上に座り、俺の腕をシートベルトみたいに回して抱え込んだ。

「ふふ」

シルフィは御満悦の様子。……もはや何も言えない。

「OK。で、どんな話をするんだ？」

「……ヒサトが最初から居るのは初めて。ヒサトが決めるといい」

「あ、そっか。それじゃ、ヒサ兄。どんなお話するの？」

む、そうきたか。んじゃま、適当に考えたお題で行きますか。

「そんじゃ、最近身の回りで起きた変わったこと。何かあるか？」

そう問われたヘルガは迷うことなく、

「ヒサトが話に入るようになったこと。それが一番の変化」

「「あ」」

と言い、周りはそれに共感した。

なるほど、普段3人という少人数だったところに新参者の俺が入るといのは確かに大きな変化だ。

ただし、そこに俺の意思があつたかといえは定かではないが。

……しかし、話が広がらない。という訳で次、シルフィ。

「えっと、次は私ね。最近私の部屋に気が付くと黒い羽根が落ちてる事があるんだ。お父さんもお母さんもお仕事で居ないはずなのに、何でかな？」

「……………」

全員無言。答えは知ってるけど言わない。
何故なら言わない方が皆にとって良い気がするからだ。

「あ、あれ？ どうしたの皆？」

「い、いや、何でもない。誰なんだろうな？」

「……………実に不思議」

とつとこの話は切り上げることしよう。誰かがボ口を出す前に……

「えっと、皆こんなところか？」

「そうだね。じゃ、最後はヒサ兄の番だね。変わったこと、ある？」

変わったことね……………お題を自分で出しといて何だが、整理券が必要なほどある気がする。

何をどう話したのか……

「……ところで、話は変わるけどヒサト。シアンに何かした？」

「はい？」

ヘルガに言われて、彼女が指差した方角を見る。すると、そこには

「……はああああ……」

……今にも飛び出してきそうな、燃えるようなオーラを纏っている

話が終わるのを待っていたらしいが、その前に限界が来そうだった。

よし、まず最初にすべきは無関係者の避難だな。

「……あゝ、君達？　今からしばらくの間、俺の周りに居ると大怪我をするから気をつけてくれ。シルフィも危ないから退いてくれな？」

シルフィは今の一言で察したらしく、

「う、うん……気をつけてね……」

と言って退いてくれた。

3人が避難すると、俺はシアンに向き合った。

「跳びかかる前に１つだけ言わせてくれ、せめて周囲の被害は最小限に「ふしゃあああああ！！！」人の話を聞けええええええ

「!!」

俺の、俺の、俺の話を聞けっ♪（泣）

俺が全て言い終わる前にシアンは跳びかかって来た。即座に前に跳んで後ろを取る。

こちらから攻撃を加えるわけにはいかないので即座に逃げる。繰り返す、ヘタレとか言うな。

「逃げるなああああ!!!!!! 止まれえええええ!!!!!!」

「バカ言え!!! 止まったら俺はお前の馬鹿力で木っ端微塵になるだろうが!!!」

「くあああああ!!!!!! 殺す!!!!!! ぶっ殺し尽くす!!!!!!」

次々に繰り出される攻撃をランダムにジグザグに走ることでする。

シアンの攻撃を受けた砂浜は、大量の砂を巻き上げた後に大穴を残していった。

「うぎゃあああああ!?!」

あ、今ので何人が巻き込まれた。

許せ、名も知らぬ旅人よ。その分きつと良い事があるさ

……などとふざけている場合ではない。何としても人の少ない場所に移動しなくては……

「チヨ口チヨ口すんじゃねえ!!! 喰らいやがれえええ!!!!!!」

「おい、何をすんぎゃあああああああ!?!」

ちよ、何してんだ!! 近くにいる人投げるんじゃない?!
とりあえず、受け止めるかなんかしねえと!!!!

「せい!!」

「ぐああああつ!!」

あ、いけねえいけねえ、受け止めるつもりが投げちゃった。
惚れ惚れするような背負い投げが決まった。ちよっとスツキリした。

相手は今砂浜でヒキガエルになっている。

「な、何故俺が……」

金髪のイケメンが涙を流しながらそう呟く。
……何だ、良く見りゃフェイスじゃねえか。なら放つときや治るな。

「死ねえええええええ!!!!!!」

なおもシアンの攻撃は続く。
今度は空中からのレッグプレスだ。

「死んでたまるかあああああ!!!!!!」

「うぐはあああああ!?!」

俺が避けると、半死半生の哀れな友人にシアンの非情なる一撃が

見舞われた。

フェイスは、僅かに痙攣した後、動かなくなった。

……まあ、放つときや治るよな。あいつタフだし。

しばらくすると不死鳥のように蘇ってくれるだろう。

これ以上の被害を避けるべく、人が居ないと思われる岩場の方へ逃げ込む。

「このおおおおお!!!!」

今度は真つ正面からの正拳突き。

俺が攻撃を避けると、そこにあつた岩が粉々に砕けた。

……冗談だろ？ 喰らったら本気で木っ端微塵じゃねえか。

しかし、まいったな。ここじゃ街中みたいに入り組んでいるわけじゃないから、撒くのが難しい。どうしたものやら。

「いい加減に……くたばれ!!!!」

今度はシアンは高く跳び上がって飛び蹴りを放ってくるようだ。咄嗟に目の前の岩を飛び越えてそれを盾にしようとする。が、

「あら、永和さん。そんなに慌ててどうかしましたか？」

何と雪乃さんが一人で休憩しているところでした。

がつでむ。なあ、神様。そんなに俺が嫌いか!?

とりあえずこいつは拙い。シアンの攻撃が岩を砕いた以上、この岩が持つ保障は何処にもない。

「すまん、失礼する!!」

「え、きゃあ!？」

咄嗟に雪乃さんを抱えて前に走る。

図らずもお姫様抱っこの形になってしまったが、この際仕方が無い。

走り出した直後、後ろにあった岩が粉碎された。

「おらあ！！ 待てやああああ！！」

今更だが、完全に冷静さを欠いている。

シアンが猛スピードで追ってくるため、雪乃さんを降ろす余裕はないし、攻撃に巻き込まれる可能性があるため逆に危険だ。

「も、もし、これは一体どういうことなんですか？」

雪乃さんが状況の説明を求めてくる。

「簡単に説明すると、俺がシアンに襲われてるんだ！！」

「私を降ろせそうですか？」

「悪いが、今は無理だ！！ これから激しく動くからしっかり掴まっててくれ！！」

「は、はいっ！！」

俺の言葉を聞いて、雪乃さんは俺の首に腕を回してしっかりと掴まる。

俺も、落としたりしないようにしっかりと抱きしめた。

「うりゃあ！！」

地面すれすれに飛んでくる石をジャンプで躲す。

「まったく、あいつは他人の迷惑と言うものを考えた事があるんだろうか？」

その後、数多の攻撃を走りながら避ける。

そして……

「やつちまった……」

目の前にあるのは人の海。

俺は海岸の外れにある、「ペンギンの入り江」と呼ばれる場所に
来てしまったようだ。

ちょうど、ファイスに教えてもらった場所の反対側になるな。

この入り江は出入り口が両端にしかなく、海の向かいは崖になっている。

人ごみを突っ切るわけにはいかないので、実質出入り口は入ってきたところしかなく、俺は袋小路に入ったのと同じ状態になってしまった。

「取った！！！！ 死ねええええ！！！！」

気が付くとシアンはもう俺が避けきれない位置にまで迫ってきていた。

「ははは……終わったな俺（号泣）。」

せめて雪乃さんだけでも無傷で済まそうと、背を向けて身構える。
すると、

「ぐきゅっ！？」

という人にあらざる声が聞こえた。

振り返って見ると、後ろではシアンがひっくり返っていた。

「な、何だいこれは……うつ！？」

見ると、シアンの首には枷^{かせ}が首輪のように嵌^はまっていて、それには銀の鎖が付いていた。

そしてその後ろには、

「くすくす。もう、危ないんだから。それにヒサ兄に攻撃しようとするなんて、酷いことするんだね。ふふふ、いけない子はお仕置きしなくっちゃ」

黒翼の魔王がいらっしやった。

ああんもう！！ 次から次に面倒ごとばっか増えるな！！

黒翼の魔王こと、シルフィ（だてんしもーど）は鎖でシアンを引きずったままこっちにやって来た。

「ねえ、ヒサ兄。私がこの子をお仕置きしたらたつぷり遊ぼうね？」

シルフィはあどけない顔でありながら、子供とは思えないやたらと色っぽい視線で俺を見ながらそう言った。

こういふときは逆らわない方が良く。俺は素直に頷いた。

シルフィは立ち去ろうとするが、その前に「ああそつだ」と言つて振り返り、俺の眼を覗き込んで囁くように、

「それからヒサ兄。今回は見逃すけど、あんまり浮気はしないでね？」

と言って俺の頬にキスをした後、今度こそシアンを引きずって去

っていった。

「くぬつ、こんな鎖……だ、駄目だ、力が抜けてく……おまけに首が絞ま……」

自業自得だな、シルフィにこつてり絞られるといい。
何をするか知らないけどな。

……しかし、シルフィは何をもって浮気などと言ったのだろうか？
いや、そもそも付き合っているわけではないし浮気のしょうが無いのだが。

「あ、あの……永和さん？」

ふと、腕の中から声が……って、忘れてた！！

「あ、ごめんなさい！！ 今降ろしますね！！」

雪乃さんを腕から降ろす。彼女の顔は真っ赤だった。
はあ、何て謝るべきか。思いつきり巻き込んだしな……

「本当に申し訳ありません。このような私事に巻き込んでしまつて……」

そう言つて頭を下げ、返答を待ったが、一向に返つて来ない。

雪乃さんを見ると、何やらぼーっと呆けた表情をして、腕は何かを抱え込むような動きをしていた。

「雪乃さん？」

「あ、い、いいえ！！ き、気にしていませんので大丈夫ですよ

「!!」

頬を赤く染めてオロオロしている雪乃さん。

……？ 何か様子がおかしいな。

「あの、どうか致しましたか？」

「だ、大丈夫です。ただ……1つだけお願いしたい事があるんですけど、宜しいですか？」

「はい、何でしょうか？」

「あの……出来ればその言葉遣いを止めて頂きたいんです。その……お友達なんですから……」

ふむ、突然何かと思えばそういう事か。

「それはすまなかった。いや、あんまり話をした事が無かったから念のためにあの言葉遣いにしてたんだが、無用な心配だったか」

「い、いえ、そこまで気にすることはありませんよ。あまり話す機会が無かったのは事実ですし……」

「まあ、話す機会はこれから作っていけばいいさ。とりあえず、皆の所に戻ろう」

「そうですね。それじゃあ、行きましょう」

それからしばらくの間話をしながら歩いた。
何分か経ったころ、先程シアンが荒らしまわった岩場に着いた。

そこはそこら中に穴が空いていて、あたりには沢山の石が転がっていた。

「それにしても、随分派手にぶっ壊したな、あいつ」

「そうですね……どうしたらあんなことが、痛っ!」

「ん? どうした!」

声に反応して雪乃さんを見てみると、雪乃さんはサンダルを脱いで右足の裏を確認していた。

「どうやら尖った石を踏んだようだ。足からは結構な量の血が出ている。」

「大丈夫か?」

「は、はい。何とか大丈夫です」

そうは言うが、雪乃さんは明らかに右足を庇いながら歩いているし、右足をつけるたびに表情が歪んでいる。

しかも岩場は先程の騒動のせいで散らかっており、二次災害の可能性が十分に考えられた。

「ふむ、ここは助け舟を出すか。」

「雪乃さん。あんまり無理をしないほうが良いぞ。特にこういう岩場では両足でしっかり歩かないと滑ったりして危ないからな」

俺がそう言うと、雪乃さんは申し訳なさそうな顔をして、

「えっと……済みません。それじゃあ、お願いします」

と言つて、俺の前に立つて首に手を回した。

……ああ、そういう事か。
ならばお望みどおりに。

俺はまた雪乃さんをお姫様抱っこした。

すると、雪乃さんは落ちないように俺にまわした腕に力を込めた。
雪乃さんの顔は心なしか紅く染まって見えた。

「んじゃま、さつさと戻るとしましうかね」

「は、はい」

皆がいる場所まで一気に戻る。

……しっかしまあ、随分遠くまで逃げ回ったもんだ。
そして、戻って一番最初に眼に入っただのは。

「……おい、シアン。生きてるか？」

「……………」

「もし、返事をしてください!!」

「……………」

真っ先に眼に入ったシアンは、顔面蒼白で首から下を砂浜に縦に埋められていた。

そう、横ではなく、縦に。

horizontalではなく、verticalに。

額には、「反省中。触らないこと」と書かれた札が貼ってある。一体何があったというのだ。

……まあ、流石にこいつもこれには懲りただろう。帰る間際に掘り出してやろう。

とりあえず、今は雪乃さんの怪我の治療が先だな。

救急箱のあるところまで戻ると、そこにはミリアが居た。

「ヒサトさん？ 何でユキちゃんをお姫様抱っこしてるんですか？」

「さつき岩場で雪乃さんが尖った石を踏んで怪我をしたからな。救急箱とつてくれるか？」

「あ、はい。ちょっと待ってて下さいね」

雪乃さんを降ろしてサンダルを脱がせる。足からは相変わらず血が出ている。

……赤い、な。

飲んでみたいという衝動をぐっところえる。

うーん、やっぱり直接血を見るとどうしても本能にひっぱられるな。精進せにや……

しばらくすると、救急箱とペットボトルを持ってミリアが帰ってきた。

「お待たせしました。それじゃ、治療しますね」

傷口をペットボトルの水で洗い流してから消毒し、化膿止めの軟膏を塗って絆創膏を貼る。

「はい、出来ましたよ。それにしても、お姫様抱っこなんてロマンチックですね。何でそんな事になったんですか？」

「いや、それが俺にもよく分からないんだ。どうしてだ？」

俺が雪乃さんに尋ねると、雪乃さんは少し怒ったように、

「それは、永和さんが怪我をした私を運んでくれるって言ったからじゃないですか」

と答えた。いや、確かにそういう事は言っただけどな……

「それじゃ、何で負ぶって貰わなかったんですか？ そっちの方が普通だと思うんですけど……」

そう、確かにその通り。

ミリアがそう言っと、雪乃さんは今思い出したと言った表情で、

「そ、そうですね……すっかり忘れてました……」

と言つて、耳まで真っ赤にして縮こまった。

それを見たミリアはくすくす笑つて、

「でもまあ、良かったじゃないですか。お姫様抱っこしてもらう機会なんて滅多にありませんよ？ あゝあ、私も今度ヒサトさんにしてもらっちゃおうかな」

と言った。

「はあ、そういうのは恋人を作ってからやってくれ。大体俺がやったら、即刻血を吸われて終了だろうが」

「あら、ばれちゃいました？　ちえ、つまんないですね」

そう話すミリアは何処となく楽しそうだった。

「そういう問題じゃねえだろうが、ったく……んじゃま、俺は他の連中を見てくるわ」

「あ、はい。いつてらっしゃい」

ふと雪乃さんを見ると、まだ俯いている。

「雪乃さん？　俺、行くぞ？」

「え？　あ、はい、お氣をつけて」

……何か、やっぱりおかしいな。調子でも悪いんだろうか？
まあ、ミリアも居るから問題ないだろう。

小さな桃色台風に巻き込まれて酷い目にあった。

こないだの日記：しつけのなっていない犬は危険です。犬を飼っている人はしつけをしつかりとしましょう。

さて、現在俺がすべきこと、それは周囲の警戒。
何故かって？

そんなのは少し考えれば分かることだ。

まだ消化していないフラグが1本あるだろ？

俺が警戒してるのはそのフラグの主、フォーリーナだ。

他の2人と違って水面下で行動するため、ある意味最も危険な相手とも言える。

一体どんな搦め手を使って来るのやら……

「フフフ、待ってたわよ、ヒサト」

オウ、シット。

正解はまさかの真正面だった。

フォーリーナは真っ直ぐにこちらに歩いてくる。

……周囲に男達の屍があるのは気にしないでおう。

「シアンに追い掛け回されて疲れたでしょう？ さ、こっちにいらっしやい」

色っぽい声が耳元で囁くように発せられる。

フォーリーナは素早く俺の右腕に腕を絡めて引っ張っていく。

振りほどこうにも腕の関節を見事に極められているため外れない。
諦めかけたその時、

「お？ あぐっ！？」

俺の首に金属製の何かが巻きついた。
そして後ろに引つ張られる感覚。

「ヒサ兄は私と遊ぶの！！ 連れてかないで！！」

そんな必死な声と一緒に黒い翼の魔シルフィ様降臨。
その手に握られた鎖は俺の首元につながれていて、俺は見事に確保されている。

ああんもう！！ ああんもう！！ 何でこうなる！！
きつとこれから壮絶な喧嘩が……

「あら、シルフィ。私はヒサトと遊ぶんだけど、貴女も一緒にどうかしら？」

ハア？ いきなり何を言い出すんだ？
シルフィも訳が分からずキョトンと小首をかしげている。

「……どういうこと？」

「そのまんまの意味よ。それに、ヒサトがどうすれば喜んでくれるか分かるかもよ？」

「おい、待て。子供に一体何むぐっ！？」

やめろ！！ それだけはやめてくれ！！
くそ、シルフィの枷のせいで力が入らん。
何と言つか、鎖に吸い取られているような気がする。

シルフィはというと、先程の怒りが成りをひそめ、フォリーナの方に近づいてきていた。

いかん、この顔は興味津々な顔だ。

「それ、本当なの？」

「ええ、本当よ。さ、貴女もこっちにいらっしやい」

「……わかった」

そう言つと、シルフィは俺の左腕をしっかりと抱え込んで付いて来た。

両脇をブロックされた上に力も吸われ、成す術無く俺は連行されていく。

……頼む、誰かこいつ等を止めてくれ……

連れて行かれた先はファイスに教えてもらった場所の更に奥の洞窟だ。

……立地条件的に絶対誰も来ませんね、分かります。

「ねえ、まずどうすれば良いの？」

「まあまあ、焦らないの。そうね、まずはヒサトにその気になつてもらおうかしら？」

妖しい笑いを浮かべてフォリーナはそう言う。

おい、俺に一体何をする気だ？

すると、フォリーナは地面に俺を押し倒した。

枷のせいで力が入らんものだから、俺はあっさり押し倒される。

「良いわね、これ。これが使えるんなら私も天使の方が良かったかも。んっ……」

首に付いた枷を少し撫でた後、フォリーナは俺の唇に軽く口付けをした。

小鳥がついばむ様なキスで、唇が何度も触れ合う。すると、脇から非難するような叫び声が飛び出した。

「あゝ！！ずるい！！私もゝ！！」

頬をぶくつと膨らませてそう抗議するシルフィ。フォリーナはそれに微笑み返す。

「ええ、良いわよ。ほら、やってみなさい。まずは吸うんじゃない、触れるだけよ？」

「うん。それじゃ、いくよ、ヒサ兄？ んっ……」

フォリーナと入れ替わりに今度はシルフィが俺にキスする。

……まあ、分かつちやいたが俺の意思は完璧に無視だな。

ぶにぶにとした赤く柔らかい唇が俺の唇と重なる。

加減が分からないのか、少し強く押し付けるようなキスだった。

「んんっ……これで良いの？」

「ええ、それで良いわ。それじゃ次は私の番ね。むっ……」

シルフィと入れ替わって、再びフォリーナのターン。

今度は唇が触れるだけではなく、舌で俺の唇をなぞり始めた。
舌は口の中に入ってくることはなく、じらすように優しく唇を撫でる。

……いかん、段々と意識にもやが掛かってきた……

「はぁ……さ、次は貴女の番よ。舌を使うときも押し付けるんじゃないくて、優しく……ね」

「うん。んにゅ……」

シルフィもまた、舌で唇をなぞってくる。
フォリーナに比べると拙いが、チロチロと唇を舐められるとやはり来るものがある。

むしろ、初々しい感じがして逆に辛い。

ぐぐぐ、拙い。何とかこらえないと……

知らず、こらえるのに夢中になっていたために息を止めていた。
俺は苦しくなって息を吐き出した。

「……ぶはっ、んあっ!？」

「んんっ!？」

息を吐き出すために口が少し空いた瞬間、シルフィの舌が口の中に入ってきた。

シルフィもサファイアのような瞳を白黒させて少し驚いている。

「そのまま続けなさい。後は口の中を自分の好きなようにして良いわ。舌を絡めるもよし、歯茎をなぞるのもよし、舌を吸うのもありね。あまり強くしすぎないことがコツよ」

「んむっ……うん、わかった……んちゅっ……」

フォリーナはそれでも構わず続けさせる。

シルフィはフォリーナに言われたとおり、舌を絡めて、歯茎をなぞりだした。

勝手が分らないのか、おっかなびつくり口中を舌で弄るシルフィ。

その行動がどうにもじれたい……いかんいかん、流されてはいかん！！

ぐっ……何とかやめさせないと……

そう思った俺は、シルフィの顔を手で引き剥がしてやめさせようとする。

ところが手に力が入らず、シルフィの頭は微動だにしない。

それどころか、向こうは触れられたことを喜んで、さらに深く求めだした。

引き続き、粘着質な音が洞窟内に広がる。

さっきよりも強くなった舌の動きは、少しずつ俺の意識を溶かしていく。

「フッフ、気持ち良さそうね、ヒサト。ねえ、シルフィ。ちょっと代わってもらえるかしら？ 私がヒサトに止めを刺すから」

「ちゅぱ……はぁ……はぁ……」

「んく、ハッ、ハッ、ハッ……」

シルフィはそれに答えず、唇を離すことでそれに答えた。

その幼い可愛さのある顔は上気し、目はトロンとして焦点が合わなくなっている。

一方の俺はといえばもう息も絶え絶えだ。

……拙い、このままじゃ持たない。

「それじゃ、覚悟は良い？ んんっ……」

だが、どうやら俺に休みはくれないらしい。

今度はフォリーナが俺の口の中に侵入した。

フォリーナは流石に慣れたもので、シルフィがやっていない舌の裏や奥等も満遍なく蹂躪した。

フォリーナが口の中で動くたびに電気が走るような刺激が全身を駆け巡る。

「んっ……」

ふと、口の中に流れる液体の感覚が。

フォリーナが唾液を俺の口に流し込んだのだ。

それは、とても甘美で、俺の脳を確実に蕩かしていった。

「んむっ……んくっ……ちゅる……コクッ……」

そして、フォリーナは俺の唾液と混ぜたそれを舌で掻き出し、吸ったりして飲んでいく。

掬っても啜っても中々無くならず、結果的にフォリーナの味が口の中全体に広がった。

……くっ、もう駄目だ……思考が回らん……

気が付けば、俺のほうからフォリーナの舌を絡めていた。

「はぁ……はぁ……ひ、ヒサ兄……気持ち良さそう……」

シルフィは俺の顔を羨ましそうに見つめていた。

その息は荒く、ともすればフォリーナを押しつけてでも俺の口に

舌を差し込んでくることだろう。

そんなシルフィにフォリーナは笑いかけた。

「んっ……はぁ……フッフ、こんな顔初めてみるでしょう？
でも、まだまだよ。今度はこうしてみて……ちゅっ……」

「うくっ……うっっ……」

今度はフォリーナが胸板に何度もキスをした。

もはや俺には抵抗する気力すら残っていないので為すがままだ。

普段なら痛みを感じるほど強く吸われたにもかかわらず、俺の脳は唇が触れた心地よくすぐたさしか感じなかった。

フォリーナが唇を離すと、そこには赤いキスマークが付いていた。

「さあ、シルフィもやって御覧なさい？」

「ねえ……どこでも……良い……の……？」

「ええ、構わないわ。また唇を狙いによっても良いし、自分の好きなところを取りなさい。今のヒサトならどこを狙ってもはずれは無いはずよ」

「うん……」

シルフィは俺の上に腹ばいになって乗った。

その成長途中の柔らかい体の感触と体温が、俺の頭を更に使い物にならなくする。

夢心地のシルフィの顔がどんどん近づいてくる。

「それじゃあ……ぴちゃ、ぴちゃ、ぴちゃ……」

「くっ、はうつ、くあっ……」

シルフィは首筋に舌を這わせてきた。

柔らかく湿った感触が俺の肌を擦るたびに、背中に電流が走るような強烈な感覚を覚える。

そうでなくてもシルフィの荒い息が首に掛かるだけでも相当きつい。

ぐう……俺は首は無理なのに……

「ぴちゃ、ぴちゃ……あ……ヒサ、兄……可愛い、かも……んっ」

刺激に耐える俺の表情を見て、シルフィは満足そうに笑う。

そしてすぐに俺の口に口をつけ、舌を絡める濃厚なキスをし始める。

「でしょう？ さあ、まだ時間はたっぷりあるわ。どんどん行きましょう？」

「……………」

蕩けた意識の中、フォリーナの声がどこか遠くに聞こえた。

その後、俺は1時間ほど遊ばれた。

内容は思い出したいくないが、流石に子供の手前なのでフォリーナもそれなりに自重した様だ。

……ぐすん、子供に弄ばれた……

綺麗な声には面倒がついて来る。

こないだの日記：子供に弄ばれた。……ぐすつ、ちくせうめ……

俺、現在1人ゴムボートの上で絶賛不貞寝中。

上半身のキスマークが酷いのでパーカーを着ている。

はあ……パーカーを取りに行った時の皆の視線が痛い何のつて。その視線は容赦なく俺の心と胃を掘削工事していった。

もう、俺の心と胃はブレイク寸前です。

その内血を吐いて倒れます。

……ふう、いつまでもウジウジしても仕方が無い。戻るか。

で、起き上がってみれば岸ははるか彼方。

ありゃ、こりゃ随分と沖に流されてしまったな。

「ララララ〜 ♪ ララ〜 ♪ ララララ〜」

ん？ どこから……歌が聞こえる？

何て澄み切った綺麗な歌声だ……誰が歌っているのだろう……

「ララララ〜 ♪ ララ〜 ♪ ララララララ〜」

こっちだ……こっちから聞こえる……

柔らかく心地の良いソプラノの歌声のする方角にボートを進めると、岩の上に歌い手の姿を見つけた。

「ララララ〜 ♪ ラララ〜 ♪ ラララ〜 ♪ ラララ〜 ♪ ラララ

ラララ〜ララララ〜」

もう少し……それで、あの人の所に……
俺は気がつけば夢中で櫂を手繰っていた。

で、気が付いたら海の底。

でも、何でか知らんが空気はある。

周囲360度は海で、どうやら海の底にドーム上に造られた空間らしい。

何じゃ此処は？

「やっと……やっとお客さんが来てくれた……」

「ん？」

声のしたほうを見ると、海のような深い青色の髪を腰まで伸ばして、薄い青紫を基調としたドレスを来た若い女性を見つけた。

年齢は見た目からすると20代前半位だろうか？

鈴の音のような澄んだ声から察するに、彼女がさっきの歌い手だろう。

「う、うつ……寂しかったよー!!」

「たわばっ!!」

その女性は突然大声で叫びながら跳び付いてきたかと思うと、俺の胸の中で泣き始めた。

俺のパーカーを二度と放さんと言わんばかりに握り締め、胸に顔

を押し付けてくる。

「お、おい！！ 良く分からんが少し落ち着け！！」

「うわーん！！！！」

「うがつ！？」

引き離して落ち着かせようとしたら、押し倒されました。

…… 一体何がどうなってるんだ。説明求む。

ひとしきり泣いて落ち着いたのか、女性は鼻を嚙りながらであるが事情を話してくれた。

散々泣きはらしたせいで、綺麗な海辺の水のようなエメラルドグリーン
の眼は真っ赤である。

「すみません、取り乱しちゃって……私はソ프라って言うの」

ソ프라さん、ね。

「栗生永和、ヴァンパイアです」

「うう、他人行儀はやめて……」

今の一言だけですぐに涙目になるソ프라さん。

今ので泣きそうになるんじゃ「さん」付けしただけでも泣かれそうだな。

「ああ、わかったわかった。で、アンタの種族はローレイで合ってるかな？」

「うん……でもね……皆ちつとも来てくれないんだ……私の歌……下手なのかな……」

「いや、そんな事はないぞ。現に、俺は良い歌声だと思うし、それに惹かれたから此処に居るんだぞ。もう少し自分に自信を持って良いんじゃないか？」

流石にそれは無い。

あんな綺麗な歌声で下手だという奴がいたら、そいつのほうがかしいと思う。

第一、そこまで音楽に興味の無い俺でさえ惹きこまれたくらいだしな。

「うう、ありがとう……でもね、それでも誰も来てくれないんだよ……うう、うう、うわーん！！寂しいよー！！」

「はいはい、今は俺が此処にいますよ」

泣くと同時にソプラはすぐに飛びついてくる。

仕方が無いので、俺はその背中を擦って落ち着かせることにした。はあ……何だか、泣き虫の子供を持つ親の気分だ……こんなでかい子供が居てたまるか。

「ぐずつ……何で皆来てくれないんだろう……」

ソプラは俺の腕の中で呟くようにそう言った。
ちなみに、俺には即座に思い当たる条件がある。

正直言ってあまりに哀れなので、とつと言つことにする。

「あのさあ、正直に言つて歌う場所が悪すぎるって」

「え……？」

「だってさ、ここは海水浴場から遠い沖で、近くに港はない、おまけに禁漁区、人が来る要素が1つもないんだぞ？」

現在地、海水浴場から約1km沖、海水浴場付近に港が出来るはずも無く、そんなところで漁をする奴はいない。

どんな大声で歌おうが波音で分かんし、人が来ない条件の三本柱が見事に建っているのだ。

そもそもここにソプラが居ること自体、誰も分らないことであるろう。

「そ、それじゃあ、ここじゃ誰も来ないって事？ そんな……うわーん……！」

現実を知つてまた俺の胸の中で泣き出すソプラ。

……はあああゝ よしよし、頼むから泣き止んで。

泣き止んでくれないと俺の胃に穴が空くから。

ソプラはその後10分泣き続けた。

「……落ち着いたか？」

「……うん……でさ、私はどうすれば良いの？」

首をかしげながらソプラは俺に聞いてくる。

「ん？ 引っ越せるんならそれが一番良いと思うが……」

「引越し？ えっと……うん、出来るよ……何処がいいと思う？」

再び俺に聞いてくるソプラ。

ぶっちゃけ、何処が良いと言われても俺には分からん。

「なるべく人が多いところとしか言いようが「ふ……ふえ……」
だああああ、分かった！！ 一緒に探すから！！」

俺が遠回しに自分で考えろと言うと、ソプラは俺のパーカーを引
つ掴んで泣く寸前の表情をした。

結局、俺もソプラの引越し先を探しに行くことになったのだった。
……私、泣いていいですか？

何でこんな面倒なことになるんだ……

はあ……他の連中に何て言えば良いのやら……

「まあ、とりあえずはどっか良い物件を探しに行かないとな。さ
とと、ぬおっ！？」

俺が立ち上がると、ソプラは俺の脚にタックルを仕掛けてきた。

「い、行かないで……もう、寂しいのは嫌だよ……」

あ、すげ〜デジャヴ。

何てこった、こりゃあのシルフィと同じパターンだ。

私はとんでもないものに引っかけたてしまいました！！ またこ
の手合いです。↑（ＣＶ・納谷。郎）

この手の奴は人への依存性が高いからな……この先はあんまり考えたくない。

というか、こやつは何を言っておるのだろうか？

「ちよつと待った。ソプラが行かないと話にならんだろうが。引越すのはお前だろ？」

俺がそう言つと、ソプラは抱きついたまま上を向いて俺の顔を見た。

澄んだ瞳に涙を溜め、縋るような上目遣い。

あ、結構可愛い……いかにいかに、ここで堕ちたら碌な事がなさそうだ。

「じゃ、じゃあ私も一緒に良い？」

「むしろ、一緒じゃないと困るんだが……」

「ありがと……それじゃ、行こう？」

ソプラがそう言つと、目の前に俺が乗ってたゴムボートが出てきた。

俺はソプラに手を引かれながらそれに乗り込む。
で、気が付いたら海の上。

「……どうなってんだ？」

「えつと、ローレライなら誰でも出来るよ？ あ、あの空間はお客様専用だよ？」

俺の質問に凄く不安げに答えるソプラ。

へえ、そうなんだ。

「まあ、とりあえず海岸に行くぞ。と、その前に……水辺から離れると何か拙いことであるか？」

「……うん。私たちローレライは髪が乾くと病気になるんだ……でも、置いてかないで……」

ソプラはさすがの様に俺の腕を掴む。

……こいつは人の話をちゃんと聞いていたのだろうか？

淋しがりやもここまで来るとなかなかにきつい物がある。

……段々胃がキリキリと痛み始めてきた。

「置いてかないから落ち着けて。それじゃボートが動かせん」

「う、ごめんなさい……」

ソプラは謝ると、恐る恐る俺の腕を放した。

で、何やかんやしながら海岸へ。

ソプラは置いてかれないように俺の手をしっかりと握っている。

「まずはペットボトルと水だな。それから皆に紹介して……」

「いてて……ひでえ目に遭ったぜ……」

俺が考えていると、先程目の前で暴走わんに止めを刺されて朽ち果てていたフェイスが目覚めた。

奴はこちらを見て、少し驚いている。

「んあ？ おいヒサト、その娘どうしたんだ？」

「ああ、これには少し事情があつてな……」

フェイスに事情を簡潔に説明する。

「なるほどねえ。お前、本当に自分で苦勞を背負い込むよな。ま、救いといえばソプラちゃんが可愛いことだな。つたく、運が良いやら悪いやら」

「うるせえ。運が悪いのは魔女様から認定済みだ。それに、俺だつていつも背負いたくて背負つてる訳じゃねえよ」

俺がそう言つと、

「そ、そんな事言わないで！！ お願いだから！！ う、うわーん！！」

と言つて、俺のパーカーを握り締めて号泣し始めた。

…… やっちまった。

あゝあ、このパーカー新品だったのに…… 特売品の安物だけど。

「ああんもう！！ ソプラ、俺が悪かった。ちゃんと付き合つてやるから、泣き止んでな？」

「ぐずつ…… ひつく…… や、約束だよ？」

「心配するな、用事が終わるまではちゃんとそばにいてやるよ」

落ち着かせるために背中を軽く叩き、頭を撫でる。
うつ、胃が痛い……胃薬が欲しい……

「……ヒサト、物件を探しに行く前に救急箱んここにいけ。胃薬があつたはずだ」

「ああ、すまねえ……」

流石は兄弟、俺の要求が分かるとは。
俺が救急箱の所に行こうとすると、ソプラも俺に付いてきた。
不意に、ファイスから声が掛かった。

「ところで、何でパーカーなんて着てるんだ？」

「……それは聞かないでくれ……」

ファイスはそれだけで何があつたか察したらしく、遠い眼をした。
俺は親友が苦しみを理解してくれたことに安心感を覚えながらその場を後にする。

……ホント、苦しみを共有できる奴がいると気が楽だ。

「……にしてもヒサトの奴……天然誑しか……その内背中からグッサリとかねえよ……な？」

おいコラやめろ、お前が言つと洒落にならん。

救急箱の所に行くと、今度はリリアがいた。

リリアは俺を見つけると、ばやばやした表情を崩さずに首をかしげた。

「あら〜？ ヒサト君、その人誰なの〜？」

「ああ、説明すると長くなるんだが……」

今度はリリアに事情を説明する。

「そうなの〜 なら、良い場所知ってるわよ〜 町も近いし、静かなところよ〜」

「あ、あの……本当に？」

「本当よ〜」

ふむ、どうやらこの問題は思ったよりさっくり解決しそうだ。
時間を見ると、もう4時半。
そろそろ帰る時間だ。

「リリア。そろそろ帰る時間だし、そのついでに案内してやった
らどうだ？」

「そうね〜 それじゃ、帰りに寄って行きましょ〜」

「あ、ありがとう……うあーん、良かったよー！！」

見つかって安堵したのか、ソプラは俺にしがみ付いて泣き始めた。
……いい加減にせい、結局泣くんかい。

「それじゃ、そろそろ皆を集めて帰る準備を……」

とまで言いかけたところで、目の前に研ぎ澄まされた鎌の刃がちらついた。

刃は俺の首を斬るか斬らないかの状態で触れている。
気が付くと、ヘルガが後ろに立っていた。

「……たこ焼き」

「い、いや、ヘルガ？ もう時間だし……ひっ！？」

俺が止めようとすると、ヘルガは俺の皮膚を軽く裂いた。
少しだけ血が出た。

「約束を破るのは許さない。……次は頸動脈」

かつて無い鋭い眼光を見せるヘルガ。
ヘルガが少し手に力を入れれば、俺の首は胴体にサヨナラする
ことになるだろう。

「ハイ、カシコマリマシタ……」

結局、俺はたこ焼きを10人前買わされ、その内9人前をヘルガ
が平らげた。

お前の胃は宇宙なのか、どうなんですか？

そして帰り道、俺達は町の近くにある湖に来ていた。

♪ ラララララ♪

澄み切った声が湖のほとりに響き渡り、その場にいた全員がその歌に言葉を失った。

何と云うか、何か暖かいものが直接心に沁みこんでくるような感じがする。

「ララララ♪ ラララ♪ ラララ♪ ラララ♪ ラララ♪」

ソプラは穏やかな表情で歌い続ける。

歌い終わるころには町からも人が出てきていて、物凄い人だかりになっていた。

中には涙を流している人もいるくらいだ

「……うわあ……人がいっぱい……これは……？」

歌い終わった後、周りの盛大な拍手に包まれながら、ソプラは信じられないと言った顔で俺を見た。

俺はその拍手の嵐の中、ゆっくりとソプラに近づいた。そんな俺に、困惑した表情のソプラは駆け寄ってくる。

「ヒ、ヒサトさん、これはいい……」

「だから言っただろうが。お前はもう少し自信を持って良いんだって」

ちなみにこの声、かなりソプラにしか聞こえないくらい小声である。

多分、ファイス辺りならサラリと言うのだろうが。

……くう、今だけは誑しのそういうところ尊敬する。

「うん……それじゃ、私頑張ってみる!!」

ソプラは涙を零しながら、笑顔で返事をした。

「ああ、頑張れよ」

これで、もう大丈夫だな。

ソプラも自信を取りもどしたみたいだし、俺に依存することも無いだろう。

「さ、皆帰ろうぜ？」

「ソプラちゃん、凄いのね」

「あんな綺麗な歌初めて聞きました……」

「心に響く歌ってほんとにあるのね」

「いやはや、あれが音に聞こえたローレライの歌声ですか。私、感激いたしました」

思い思いの感想を言いながら屋敷に帰る。

今日は気分がいい。

色々あったが、終わりよければ全てよしって奴だな。

と、なりや良かったんだが、この話にや続きがある。

後日、久々に俺はソプラの歌が聞きたくなったので湖に行ったら、

「ヒサト！！ 漸く来たか。何時まで待たせるつもりなのだ？
妾は待ちくたびれたぞ」

もっそい高圧的な待遇を受けますた。

……あの……どちら様？

いや、見た目はソプラなんだが……

「えっと……ソプラ……だよな？」

「それ以外の誰に見えるというのだ？ さあ、早くこちらへ来る
が良い」

一体何があったと言うのだ？

何故か知らんが逆らいがたいオーラを感じる。

とりあえず、ソプラの所に行ってみる。

すると、ソプラは俺の頬に手を添えて、こう言い放った。

「そなたには世話になったな、礼を言うぞ。そなたを妾の従者に
してやるう。ありがたく思え」

な、何じゃそりや……数日間の間は何があったというんだ？

「1つ質問だ。何があった？」

「何もありません。ただ思い出したただけだ。我こそは、ローレ
イの王族クインシアの子、ソプラニーネ・G・S・クインシアであ

ると言うことを」

つまりはあの時は孤独によって幼児退行を起こしていただけと
いうのか？

で、本来はこんな我様な性格の王女様だったというのか？

……本当に碌でもない奴ばかりにあたるな、俺。

俺は面倒なことになる前に立ち去ろうとするが、

「ララララ〜 ♪ ララ〜 ♪ ララララ〜 ♪」

これは……いい歌だ……

「フフフ……捕まえたぞ、ヒサト」

等と思った瞬間、ソプラは不敵な笑みを浮かべながら俺の腕を掴
んでいた。

うぐぐ、恐るべし歌の魔力。

「全く、何処へ行くというのだ？ 従者は主人の傍に居るのが当
然であるうつ？」

呆れたといわんばかりの視線を俺に送りながらソプラはそう言っ
た。

……俺の意思に関係なくもう従者は決定かよ。
だが、こちらにも手札はある。反撃といこう。

「まあ、待て。俺はリリアのところで執事をやってるんだぜ？
この湖だって彼女の物だ。俺に勝手に手を出すのはどうかと思っ
ぜ？」

すると、ソプラは不敵に笑って、

「甘いな。そなたが彼女に従事しているのは知っておる。そなたは家の外の担当だと言うこともな。加えて言えば、そなたが今休み時間だということも、2時間後にそれが終わることも知っておる。だから、その少なくとも休み時間や外回りの時に妾の所に来い」

何……だと……？

仕事や休憩時間に関してなど俺は一度も言っていないはずだ。

「……何故知っている？」

「妾が歌で集めた人間から少しずつ聞き出して整理しただけのことだ。自らの所有物の事を知らんなどと言うことはあつてはならんからな」

なるほど、ソプラは人を使うのが上手い知性派か。

何てこつた、こいつは思ったより強敵だ。

ていうか、俺は所有物扱いかよ。

「心しておけ、そなたはフローゼルの執事であり、妾の従者でもあるのだ。異論は認めぬ。何、妾も鬼ではない。休みくらいなら用意はしておく」

そう言うなら開放してくれ……そう思った瞬間、胸を締め付けられるような、強烈な感覚を覚えた。

「ぐ……ガッ！！」

俺は喀血して倒れた。

「なっ……ヒサト！？　しつかりせい！！　ヒサト！！　お主に倒れられたら妾はどうなる！！　……うわーん！！　目を覚ましてよー！！」

俺が目の前で倒れたのが余程こたえたのか、ソプラは錯乱して幼児退行を起こして俺に泣きつく。

その後俺は救急車で運ばれ、緊急入院と相成った。

以下、カルテ。

患者名：ヒサト・アオウ　（21）

担当医：ナズナ・セルベス

病名：神経性胃炎を要因とする胃潰瘍

備考：何をどうしたらこうなるのやら。

綺麗な声には面倒がついて来る。(後書き)

あとで知った大失敗。

ソプラのファミリーネームはイギリスの国歌から取った。

しかし、ローレライはドイツの妖怪。

しかもファーストネームの由来のソプラノという言葉はイタリア語。

……何を考えてんだ、俺……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7776s/>

全く、ついていない。誰か助けてくれ。

2011年8月22日12時37分発行